坂道の向こうは

山下祐嬉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
坂道の向こうは

【Ｎコード】
Ｎ２１１６Ｆ

【作者名】
山下祐嬉

【あらすじ】
美咲は双子の兄正樹と幼馴染の和明と同じ高校に通っている。疎遠になっていた和明と少しずつ距離を縮め、勉強にクラブにといそしんでいた日々にまた、違った彩りが加えられていきます。三人の夢の向こうには、何が見えるのでしょうか。

第一話　いつもの教室から

いつもの教室から眺める運動場が、今日は違って見えた。
数学の応用の公式が耳を素通りして流れている。

昨日十七歳の誕生日を迎えた美咲には、今までの物がすべて少しずつ違って見える。
運動場から体育をしている男子生徒の高らかな笑い声が聞こえてくる。
その男子生徒の中にいつも見慣れた顔があった。

一人の生徒が投げたボールをカットし、ドリブルしてゴールまじかに行く。
そこでボールをパスした。

「あ、正樹ったら、なんて〝ボールを・・・・。」いけない、授業中だった。
「沢中、運動場の方より黒板に注意してもらいたいな。Ｐ．５２の問３答えなさい。」

結構人気のある岩田先生に怒られた。少し、ショックだ。

「はい、えーと・・・・。３８です。」頭をフル回転させて考えた。

「よろしい。」

何とかその場を切り抜けた美咲は、また、外に注意を向けた。
でも今は、さっきとは違う。バスケットをしている生徒の姿は、も

うなかった。

三時間目の終わりを告げるチャイムが学校の閑静を破って教室にも賑やかな声がこだました。

五月。窓から差し込む光が少しまぶしかった。

「美咲、どうしたの？さっき驚いたわよ。急に声だして。」

親友の森野久子が美咲の机にもたれたまま、話しかけた。美咲は疲れた声で

「何かよくわかんない。

ボーっとしちゃった。寝不足かな。昨日遅くまでオセロやってたから。」

そう、昨日は午前二時まで正樹相手に奮闘していた。今考えるとバカみたいだ。

「ふうん、正樹くんと？楽しそうね。」久子がため息交じりに言った。

南向きの校舎の三階は、校庭が一目で見渡せる。バスケをしていた正樹と二人の共通の幼馴染の男の子の姿が目に入った。美咲は、今では疎遠になっている寺西和明の姿を追っていた。

二人は今も仲がいい。昔はよく三人で遊んだものだ。けれども、いつからか美咲は和明と共に過ごすのを避け始め、いまではろくに話もしなくなっていた。

美咲は、両親と双子の兄の正樹、年の離れた兄の修司の五人家族だ。

大学生の修司は地方の大学に進学し、一人暮らしをしている。

昔はおてんばだった美咲も年頃になって、美しく成長した。正樹と和明もそれなりに成長し、高校生らしいさわやかな好青年になっている。二人とも学内では結構人気があるらしい。

久子も少しのぼせているようだ。

「正樹なんかのどこがいいの？わたしには、わからないわ。」

「かっこいいじゃない。成績もいつも上位だし、やさしいし。非の打ち所がないわ。」

「久子、何なら私からうまく話してあげようか。」

内気な久子は、顔を真っ赤にさせて断った。

「とんでもない。美咲にそんなこと頼めないわ。」

いつもの返事が返ってきた。高校一年の時からの親友が血のつながった兄に関心があるというのは、変な感じだった。でも、協力したい。力になりたかった。

第二話　才能ない？

放課後になり、クラブ活動の時間たった。美咲は中学の時吹奏楽をしていたが、今は弓道部に所属している。それがまた、下手くそで的に当たるのも数えるほどだった。

「私、才能ないのかな。」

後輩も慣れてきた人は、すぐに美咲を追い抜かしていく。こんなに惨めなことはない。

一本の矢を手に取り腕を動かして弓を張り、放す。この瞬間はいい。だげどその飛んだ矢は、またしても的から大きくそれて地面に落ちた。またか、しょうがない。そう思った時、後ろから声が飛んできた。

「肩に力が入りすぎてんだよ。もっと楽にしないと・・・。」

振り返ると笑った端整な顔があった。久しぶりに目があったような気がする。

和明だ。美咲はすぐに顔をそらせた。

「寺西君、なにか用？」

美咲は、つっけんどんに言った。できたら早くここからにげだしたくなっていた。

「寺西君か・・。いや、別に用はないんだけど、あまりへたくそだから・・。あ、ごめん。」

久しぶりに話す言葉が「下手くそ」とは、少しの間言葉もでなかった。

「本当に下手くそだから、何もいえないわ。」

ショックで落ち込んだ美咲を見て、和明はなぐさめようと努めている。

「いや、ごめん。そんなことないよ。少しやり方を変えればすぐ上達するよ。腕をこう・・・。」

和明は美咲の腕をつかんで姿勢を変えようとした。美咲は、はっと顔を上げて和明の方に向き直った。二人は近い距離で見つめあい固まっていた。しばっていた美咲の髪が落ちてきて顔に少しかかる。少しの長い時間が流れた。

「何だ、君は。」

大きく太い声が和明にかかった。弓道部の部長の尾上だった。

「入部希望者か。こっちに来なさい。」

「いえ、違います。弓道をしているのが見えて、つい・・・。すみませんでした。」

和明は、はっきりした声で簡単に言うと、足早に去っていった。美咲は何があったのかわからない様子でぼうっとしていた。

「沢中、ポケッとしないでしっかり練習しろよ。」

「あっ、はい。」

数人の部員が少し離れたところで矢を放っている。的は小さくとても遠くに見えた。

旧校舎の三階のつきあたりの教室は、美術室だった。室内は油絵の具のにおいのする古風な感じで絵を描くのにちょうどいい所だった。校庭から少し離れた場所で運動系クラブの掛け声も遠くかすんで聞こえてくる。夕日が陰り周りが赤く染まる頃、部屋の窓を開けると木々が赤に映えてとても美しかった。

部屋の中にいる数人の部員が黙々とキャンバスに向かっている。その時，いきおいよくドアの開く音がした。バスケ部のユニフォームを着た寺西和明が一人の男子生徒に近づく。何が起こったのかとみながその中心に目を向けた。

「正樹、話があるんだ。ちょっと来てくれないか。」

みんなの注目を集めた沢中正樹は少し顔を曇らせて答えた。

「何の用だ？」

「兄弟そろって冷たいやつらだな・・。それよりちょっと来てくれ。」

和明は強引に正樹を美術室から連れ出した。

「頼む。一ヶ月バスケットの部員になってくれないか。レギュラー

の一人が怪我をして試合に出られなくなったんだ。頼むよ。」

和明に真剣な顔で頼まれ正樹は少したじろいだ。

「だめだよ。今は美術部の方も大変なんだ。コンクールが近いんでね。」

「何が美術だよ。絵の下手くそなお前がコンクールに入選するはずがないじゃないか。それより一緒に全国大会へ行こうぜ。」

和明は必死に頼みこんだ。

「下手で悪かったな。それに入選が目的じゃないさ。芸術は心を磨けるからね。」

正樹は和明にはっきりと下手と言われ、気分を害していた。

「本当に強情だな。だいたい自分の才能を生かせるクラブに入らず道のそれたところでじめじめしてるなんてよくないぞ。お前の片割れもそうだな。」

和明の言った言葉に正樹はいぶかしげに聞き返した。

「片割れ？美咲がどうかしたのか。」

逆に聞き返された和明は間の抜けた返事をした。

「あ、いや、別に・・・。」

「そうだな。美咲も変わってるよな。やったことのない弓道なんか

始めて。得意な音楽でもやってればいいのに。最近はピアノもろくに弾いてないな。」

「・・そうか。ピアノも弾いてないのか・・・。」

和明は窓の外に視線を移し、口をきつく結んだ。

「そうか・・忘れてた。」

「何を？」

正樹は口の端をあげて笑った。

「いいよ、協力してやるよ。そのうち美咲も前みたいに戻ると思ってたんだが・・・。」

「そうか、入ってくれるか」

「ん？違う。クラブじゃなくて美咲のことだよ。バスケは考えとく。じゃあ、またな。」

「頼むぞ。本当に困ってんだから。」

正樹は急いで踵を返し、部屋に戻った。

第三話　兄からの手紙

「ただいま。」

美咲は六時前に帰宅した。台所の方から夕食のおいしそうな匂いが漂ってきた。

「おかえりなさい。あら、美咲なの。めずらしいわね。」

「なにが？」

「正樹、まだ帰ってきてないのよ。」

母親の佐智子がパタパタと玄関先に現れて、手をエプロンでふいている。いつも美咲は道場のあとかたづけで帰りが遅かった。早く着替えるようせかす母親の声と同時に玄関の扉が開いた。

「ただいま。あれ、美咲帰ってたのか。」

正樹だった。

「さあ、二人とも着替えて早く来なさい。」

佐智子は足早に戻っていった。

「遅かったのね。今日、どうしたの？」

「別に。ちょっとつかまっててね。」

「また、女の子？いいかげんにしなさいよ。」

「なんだよ。俺から声かけたわけじゃないよ。」

正樹はむっつりした顔を美咲に向けて言った。

二人は二階に駆け上がり、着替えてから食堂についた。病院で医師をしている父親も珍しく早く帰り、四人が顔をあわせている。「ただいま」と父親に声をかけると「おかえり」と新聞から目も話さずに返事が返ってきた。

「ねえ、お父さん。私、弓道やめようかな。向いてない気がしてきた。毎日頑張ってるんだけどなかなか・・・。」

「ほんとに美咲はだめね。しっかりやってるの？」

佐智子が横から口出しして、美咲は口を尖らせた。

「ほっといて。正樹の絵よりはましなんだから。」

「俺がなんだって？」

「別になんにも。今日、体育あったでしょ。バスケなかなかかっこよかったわよ。みんなその姿にだまされてるのね。」

「お前は一言多いんだよ。・・そうだ、和明に今度バスケの助っ人頼まれてさ。再来週の土曜日試合があるんだ。応援に来てくれよ。」

「なんでわたしが・・・。」

美咲と正樹が言い合うのを横目に父親の和樹が口を挟んだ。

「美咲、無理に弓道を続けることはないよ。自分の好きなことをまた探せばいいんだから。正樹も別に無理して美術部にいることはないんじゃないか。話によるとかなりひどいんだって？」

「父さんもひどいな。」

正樹は父親のあまりの言いように絶句していた。
学校であった今日一日の出来事などの話をして、楽しい夕食の時間は過ぎていった。

〜本当に美術なんかやめてバスケ部に入ればいいのに・・。もったいないわ。」

「人のこと言えるのか。できもしない弓道やってピアノはおろそかになって、和明が心配してたぞ。」

「えっ」

そしらぬ顔で正樹は言ったが、美咲はびっくりした顔のまま黙り込んだ。

「これ、見て．修ちゃんから手紙が来たのよ。」

五つ年上の兄、修司からのものだ。地方の大学に通い、下宿生活なので今度会えるのは夏休みのはずだ。小さい頃は二人の良き兄で面倒をよく見てくれた。家をでることが決まった時には、美咲は思わず泣いてしまった。父親の跡を継ぐと一念発起し、猛勉強の末、医大への道を勝ち取ったのだ。両親も期待する長男からの手紙は家族

にとってとても嬉しいものである。

「へぇ、めずらしいな。兄貴が手紙かくなんて・・・。」

正樹は嬉しそうに手紙を読み始めた。

「拝啓、僕は元気にしています。皆さん、元気ですか。お父さん、仕事頑張ってください。

美咲、少しは弓道上達しましたか、だって。だめだよ、全然だ。」

「正樹、なに言ってるのよ。あんたのことも書いてあるんでしょ？」

美咲は手紙を読んで笑う正樹をにらみつけた。

「えーと、どこまで読んだかな。美咲は少しは上達しましたか。正樹、絵の方はどうですか、相変わらず。ピカソですか。」

正樹の声のトーンが少しずつ下がっていった。美咲は大きく笑った。

「兄貴もひどいな、こんなこと書くなんて。『最後にお母さん、手紙ちゃんと書いたので約束忘れないでください。』なんだこりゃ、母さん、約束ってなに？」

佐智子は三人の視線を受けて少し苦笑いした。

「私ね、手紙かくの好きだったのよ。でも今は相手がいないでしょ。だから、修ちゃんに手紙書くようにいったのよ。」

「それで？」美咲は、聞き返した。

「え？」

「約束って何のこと？」

「ああ、そのこと・・。たいしたことじゃないのよ。手紙を書いたら、仕送りもう少し増やしてあげるのにって。ただ、それだけ。」

それを聞いた父親があきれかえった。

美咲は食事を終えてから自分の部屋に戻り、宿題をやり始めたのだが全然先が進まない。今日は色々なことがあった。中学にあがると同時に疎遠になっていた和明と久しぶりに口をきいた気がする。以前は同じ目線のはずだったのに、今では顔ひとつ分あげなくてはならなかった。昔は本当に仲がよかった。いつも、正樹も交えて三人一緒だった。いつからこんなに変わってしまったのか、思い出そうとするが検討もつかない。時間がたちすぎてしまったのか・・。取り留めのないことを考えているうちにどんどんと思い出の中に入り込んでいった。

第四話　思い出の中で　１

美咲は少し小高い丘の上にあるこの家が大好きだった。祖父母の代からのこの家は、すでに古く冬になるとすきま風が入りとても寒いが、今はいないやさしかった父方の祖父母の思い出か、詰まっている。二人とも美咲たちが小学生の高学年の時にパタパタと病気で逝ってしまった。

それでも、小さい時に過ごした楽しい思い出は、懐かしいとてもいい記憶だ。音楽の大好きだった祖父はバイオリンをたまに披露し、家族のみんなを楽しませた。沢中家一家の下の子供たち二人も、当然のようにピアノ教室へと通わされていた。特に、美咲の上達の速さは祖父母二人を喜ばせ、美咲本人も練習にますます励んでいった。

美咲達が小学校に上がる頃、近所でずっと空き地になっていた土地に大きな家が建ち，美咲達と同じ年の子がいる一家が引っ越してきた。父親の仕事の関係でアメリカ帰りの和明達だ。両親たちの年回りも同じで、すぐに親しくなった。ずっとアメリカで過ごしてきた和明は、日本語があまり上手でなく、美咲達にとっては、とても不思議な子供に見えたことだろう。それでもすぐにうちとけて、毎日一緒に遊ぶいい仲間だった。

「和明、一緒に野球しょうぜ。」

「ＯＫ，Ｌｅｔ' ｓ　ｇｏ！」

「私も一緒にいく」

「ＯＫ，・・。美咲、ピアノ、練習、・・Ｉｓ　ｔｈｅ　ｅｘｅｒｃｉｓｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｐｉａｎｏ　ｇｏｏｄ？」

「えっ？ピアノ・・。いいの、後で練習するから。」

三人は同じ小学校に通い、のびのびと育っていった。年数を重ねるうちに美咲と正樹のピアノの上達の差がますます開き、正樹は教室へ行くのを嫌がってとうとうやめてしまった。

「和ちゃん、私もピアノやめようかな。正樹がピアノ教室行くの辞めちゃった。一人で行くのイヤだな」
「どうして？あんなに上手に弾けるのに、もったいないよ。頑張って続けなよ。」
「だって先生すごく怖いもん。一人で行くの怖いよ。行きたくないよ。」
美咲が三年生になってすぐのことだった。正樹は代わりにスイミングに行き始めたときだった。いまにも泣きそうな顔で、教室に行くのを嫌がる美咲をなんとかなだめようと和明は必死だった。
「大丈夫だよ。美咲すごく上手だから、しかられないよ。僕、美咲のピアノ大好きだから辞めてほしくない。」
「でも、行くの怖いよ。どうしよう。」
和明は思案にくれた。なんとかして教室に行かさないと美咲の演奏を聴けなくなってしまう。
「美咲、僕がついていってあげるよ。だから大丈夫。」
和明は美咲と一緒にピアノ教室へ向かった。美咲はその時ひかれた和明の手の暖かさを今でも覚えている。あのとき、和明がついてきてくれなかったらピアノもやめていたかもしれないと美咲は思った。

美咲達の大好きな祖父が病気で亡くなったとき、五年生になっていた。祖父のバイオリンの伴奏も難なく弾けるようになっていた美咲にとっては、とても寂しいものだった。身近にあたりまえにいた人がいなくなるということがどんなに寂しいことか、理解するのもそんなに難しくなかった。祖父の隣でいつもにこにことしていた祖母もいつ消えるかわからない状態になっている。底の見えない暗闇の中を落ちていくようなそこはかとない気分に打ちのめされていた。

「和ちゃん、どうして人は死ぬんだろう。おじいちゃんが死んで、今度はおばあちゃんまで危ないって言ってた。おじいちゃんのバイ

オリンは二度と聞けないし、おばあちゃんのケーキも二度と食べられなくなってしまう。そんなことって・・・。」

美咲の頬をいく筋も涙が伝っていく。隣で正樹も目頭を真っ赤にさせていた。家中が暗い雰囲気に包まれ、両親たちは忙しく家の中を片付けていた。兄の修司も部屋にこもっている。美咲達の気をそらすようにと呼ばれた和明もなんと声をかければいいかと途方にくれた。二人のあまりの落ち込みように二人にとって祖父母の存在がどれだけ大きかったかよくわかる。

和明は、努めて明るく声をかけた。

「僕は、おじいちゃんもおばあちゃんも知らないんだ。僕のおじいちゃんもおばあちゃんも小さい頃に死んでるから顔も覚えていないんだ。正樹も美咲もいいほうだよ。顔ももちろん知ってるし、一緒にずっといてくれたんだから。それに、うちの母さんが言ってたけど体はなくなっても心はずっと生き続けるんだよ。美咲が覚えている限り、ほんとうにさよならするわけじゃないんた゛。」

「それほんとうなの？」美咲は大きく目を見開いて聞き返した。

「もちろん、本当だよ。僕のおじいちゃんとおばあちゃんも僕のことをずっと見守っていると母さんが言ってた。」

「それじゃあ、私が覚えているとおじいちゃんも私のことをずっと覚えているの？」

「そうだよ。美咲が困った時に必ず助けに来てくれるよ。姿は見えなくても美咲の隣でいつもバイオリンを弾いているんだよ。」

「おばあちゃんもおじいちゃんと一緒にいられて嬉しいかな？」

「二人一緒に並んで正樹と美咲を見ててくれると思うよ・。」

和明は淡々と二人に言い聞かせた。泣く必要なんかどこにもない。会おうと思えばいつでも会える。心のアルバムはいつでも開けられるのだから。

美咲と正樹は顔を見合わせ、一筋の光を見出した。

寒い冬の夜、祖母と永遠の別れをし、子供たちはまた、一回り大きくなっていった。

第五話　思い出の中で　2

季節はめまぐるしく変わっていった。桜の花が満開を迎える頃になり、美咲達は小学校最終学年の六年生になった。美咲は初めて和明と一緒のクラスになり、とても嬉しかった。相変わらず正樹と和明のそばで一緒に遊んだりしていたが、高学年になるにつれ、周りの目を気にするようになり三人の関係も次第に変わっていった。女子は女子で固まり、男子は男子で固まっている。その中で美咲と和明の関係も同じクラスといえども、気軽に話しはできにくくなっている。せっかく同じクラスになったのに美咲は少しさびしく感じていた。

「和ちゃん、これ正樹が返しといてくれって言ってたから。」

「ああ、サンキュー。」

美咲は授業が終わった後、正樹に頼まれていた本を和明に手渡した。その様子を見ていた男子生徒が冷やかしたのだ。

「和ちゃん、これ返すわー。明日も一緒に学校行こうねー。ハハハ。」

それを機にほかの生徒まではやしたて、美咲はいたたまれなくなり教室を飛び出していった。

和明は美咲の後を追おうとしたが、ほかの生徒につかまり、仕方なくその場に残った。

「お前ら、ほんとに仲いいよな。将来ケッコンしようとかいってんのか。」

「うるさい。そんなこと、どうでもいいだろ。」

「よくない。気になるもんなー。昔からずっと一緒にいるんだろ。そんなに沢中のことが好きなのか。」

「・・・。Ｏｈ，ｙｅｓ．Ｉｔ ｉｓ ｔｈｅ ｇｉｒｌ ｗｈｏ ｉｓ ｔｈｅ ｍｏｓｔ ｉｍｐｏｒｔａｎｔ ｆｏｒ ｍｅ．（ああ、すきだよ。僕にとって一番大切な女の子だ）」

「えっ、なんていったんだ？」

和明はみんなのわからない得意の英語で切返した。あっけにとられた男子生徒の間を走りぬけ、急いで美咲を追いかけたがどこにも姿は見当たらなかった。

次の日、和明はいつものように三人で学校に行こうと公園で待っていたが、現れたのは正樹一人だった。正樹は怖い顔をして和明をにらみつけ、話し出した。

「美咲が昨日泣いて帰ってきた。今日は和明に会いたくないから先に行くと言ってた。おまえ、美咲になにをした？」

和明はびっくりしてすぐになにも返事ができなかった。からかったのは他の男子生徒で自分はなにもしていない。なぜ美咲が自分に会いたくないといっているのか皆目検討もつかなかった。和明は昨日のことを正樹に話したが正樹は本当にそれだけかと疑ってきた。学校について、一足先に教室にいた美咲を見つけ教室から連れ出した。

「美咲、大丈夫か。昨日のことなんか気にするな。言いたいやつは

言わせとけばいい。俺は全然気にしてないよ。」

「・・私と一緒にいると和ちゃんまで笑われる。これからあんまり一緒にいないほうがいいと思う。私、明日から美紀ちゃんと一緒に登校するから。」

美咲はうつむいたままで早口に和明にそう告げて、教室に戻った。

それからは和明が話しかけようとしても、美咲の方がからかわれるのを恐れて避け続け、次第に二人の仲も離れていった。

秋になり、小学校最後の運動会がやってきた。運動の苦手な美咲はとても憂鬱な時期である。

リレーの練習するのもみんなの足手まといになっていると感じ、毎日学校にいくのも嫌だった。

「どうして正樹は走るのが速いのかな。私は遅いのに。不公平だ。」

「美咲は母さんに似たんだろ。ドンくさいところそっくりだ。」

正樹の憎まれ口についつい応戦してしまう。

「正樹の口の悪いところは誰に似たの？」

「口は悪くないよ。本当のことを言っただけだ。それより、最近和明と話もしないんだろ？

和明が寂しがってたぞ。何言われたか知らないけど、いいかげん許してやれよ。」

「別にけんかしたわけじゃないよ。和ちゃんと話す機会がないだけ

で・・・。」

美咲も昔のように仲良くしたかったが周りのことばかり気になって、和明の気持ちにまで気づく余裕がなかった。

運動会はとてもいい天気で、プログラムも順調に進んでいった。沢中家の両親も二人のためにお弁当を用意し、応援に力が入っている。となりの席には和明の両親も並んで座っていた。

綱引き、玉いれ、組体操と次々に競技をこなし、最後にリレーがやってきた。正樹は得意な足で先頭を走り、そのままバトンをつないでいた。反対に美咲は走り出すと一人、二人と追い越されていく。対照的な二人に両親もため息をついていた。

「ごめんなさい。私のせいで一等になれなかった。」

美咲はクラスメイトに謝った。口の悪い子に散々けなされショックを受けた美咲は教室に一人戻っていた。その時、和明が教室に入ってきて、美咲のそばのいすに座った。

「気にするなよ。遅くても頑張ったんだから。大丈夫だ。」

和明は美咲の頭をくしゃっと触り、教室を出て行った。

美咲が落ち込んだとき、困った時、必ず和明が駆けつけて助けてくれた。昔からやさしい和明に美咲はどれだけ救われてきたかわからない。別に親しく話しができなくても、すぐそばに和明がいてくれることが美咲にはとても嬉しかった。

第六話　思い出の中で　3

四月、桜が満開の中で美咲達は中学に入学した。ほとんどが小学校からの持ち上がりで見慣れた顔が並んでいる。美咲は校庭に張られたクラス名簿を見上げ、自分の名前を探した。正樹が一組なのを確認して、また自分の名前を探し始める。その途中で和明の名前が目に留まり、思わず急いでそのクラスを確認した。自分の名前がないことに安堵し、また寂しくも感じていた。

「美咲ちゃん、同じクラスだよ。よかったー。なかよくしようね。」

小学校の時からの友達の美紀ちゃんだった。二人は真新しいセーラー服を翻し、教室へと向かった。毎日の生活にも慣れ、吹奏楽部に入った美咲はクラリネットに夢中になっていた。

あいかわらずピアノ教室にも通い続け、かなり難しい曲も弾きこなしていた。正樹と和明はバスケット部に入部し、持ち前の運動神経を活かしてそれぞれチームの中で活躍していた。

いつも一緒だった三人も、それぞれが勉強にクラブにと忙しく、一緒になることはまれになっていた。和明とクラスが離れてからは、ほとんど顔を合わすこともなく、正樹の口から出てくる話で近況を知る程度になっていた。たまに見かける和明の姿がとても遠くに感じられた。

慌しく時間はすぎて、美咲達は中学三年生になった。高校受験を控え、自分の進路を決めなくてはならない。ある夏休み前の放課後、美咲は教室で進路調査票を前に思案していたその時、廊下から聞こえてきた女子生徒の話にくぎづけになった。和明の名前が出てきたのだ。

「四組の寺西君、ほんとにかっこよかったねー。何回もゴールして私一目で好きになっちゃった。」

「そうだね、頭もすごくいいんだって。この間の中間テスト学年一番だって言ってたよ。それに、昔アメリカに住んでたから英語もぺらぺらだそうだよ。」

「へぇー。すごいねー。この間、四組の岡田さんが告白したらしいけど断られたっていってたよ。何人目かな。絶対うんって言わないらしいよ。好きな人でもいるのかな。」

二人は和明の話を夢中でしていた。美咲は久しぶりに聞いた幼馴染のうわさ話に驚いた。最近は、正樹も和明の名前を出すことが少なくなっていて、美咲は和明の近況もほとんど知らなかったのだ。そんなに勉強ができることも初めて知り、同じ高校にいけるのかと急に思い悩むようになった。

「正樹、和ちゃん元気にしてるのかな。」

お風呂から出てきた正樹を捕まえて、思いきって和明のことを聞いてみた。

正樹はびっくりした顔で美咲の顔をのぞきこんだ。

「急にどうしたんだ？あんなに嫌って避けてたくせに。」

「別に避けてなんかないよ。クラスが離れてるから顔を合わさなくなったのよ。でも、すごいね。この間のテスト、一番だって聞いた。びっくりした。」

「前からそうだよ。あいつ、頭いいからな。バスケもうまいし、女

の子がキャアキャア言ってる。あいつがいるから俺がかすんで見えるんだ。」

「はぁ？よく言うわね。・・和ちゃん、どこの高校いくのかな。」

「美咲、おまえ・・。」

「ん？」

「・・直接和明に聞くんだな。俺はてっきり逆だと思ってた。だから、和明の話もしなかったのに・・。」

「何の話してるの？」

美咲は訳がわからないという顔をして正樹の返事を待った。けれども正樹は何も言わずそのまま部屋に入ってしまった。

美咲はこの間の和明の噂話を聞いてから、どうしても和明と同じ高校に進学したいと思うようになっていた。今でも雲の上の人なのに、学校が違えばますます離れていってしまう。昔のような関係にはもどれなくても、手の届く距離にいたかった。小学校の時にやさしく話しかけてくれた和明に冷たくしていた自分がとてもひどい人間のように思われた。けれども、いまさら自分からどこの高校に行くのかと聞きにいく勇気もでてこない。どうしようかと思っていた矢先にそのチャンスは突然やってきたのだ。

図書委員をしていた美咲はいつものように、当番である水曜日の放課後、図書室にやってきた。その日はたまたま人が来ず、カウンターでくつろいでいたが返却された山のような本が気になり、一冊ず

つ本棚に直していく作業を始めた。。その中の一冊がかなり高い場所に直さないといけないもので美咲は仕方なくできるだけ背伸びをし、戻そうとした。もう少しで入るかと思ったその時、後ろから手が伸びてきて、本が手から離れていった。びっくりした美咲が振り返ると、そこに和明が立っていたのだ。

第七話　思い出の中で　４

「か・ずちゃん・・。」

久しぶりに見る和明の顔がかなりの至近距離にあり美咲はびっくりして、左脇に抱えていた本を思わず落としてしまった。あわてて拾おうとした美咲に先立ち、和明が本を拾い上げた。

「ごめん、びっくりさせたみたいだ。」

美咲は本を受け取ったが、あまりの突然の出会いにお礼のひとつも返せずうつむいたままだった。和明は昔と変わらないやさしい眼差しで美咲を見つめていたが、なにも話さない美咲にいたたまれなくなったのか「それじゃ」と声をかけると踵をかえし、離れていこうとした。

美咲はあわてて和明の背中に声をかけた。

「和ちゃん、ありがとう。あ、あの、わたし・・。」

和明は、先の言葉を促すように首をかしげまっすぐに美咲を見つめていた。美咲は何か話さなくてはとあせりだし、支離滅裂なことを言い出した。

「和ちゃん、すごいね。この間のテスト一番だって聞いた。うちのクラスの子がかっこいいって連発してたし、すごいもててるんでしょう。何で、彼女作らないの？ふられつづけてる女の子がかわいそうだよ。」

和明は美咲の言葉に一瞬瞠目し、悲しい色の瞳が揺らいでいた．美

咲も進学先の高校名を聞きだすはずが突拍子もない発言に自分自身が驚いている。なんでこんなことを言ってしまったのかと後悔している美咲に和明が話しかけた。

「ひとりなのか？」

「え・・・。」

「ひとりじゃ大変だろう。それ全部かたづけるの。」

和明の視線は美咲の隣にある台車の上の本の山に注がれていた。

「違うの。別に今全部かたづけないといけないわけじゃないし・・・。」

「そうか、頑張ってな。俺、もう行くよ。」

和明はまた背中を向けたが、もう一度美咲に向き直った。

「ずっと気になってたんだけど・・・。昔、何か気に障ることといったのかな。もし、そうなら謝っとこうと思って・・・。それじゃ。」

和明は、駆け足で美咲のそばを離れていった。美咲がわれに返った時には和明の姿はすでになかった。なんで和ちゃんが謝るの。謝らなくてはならないのは自分の方だ。美咲は激しい自己嫌悪におちいっていた。

和明はたまたま借りた本を図書室に返しにいったところで美咲に出くわしたのだ。だれもいない図書室で声をかけようかと逡巡していた時、高い棚に無理に手を伸ばす美咲を見て思わず本を手に取って

いた。相変わらず目も合わせようとしない美咲にやはり嫌われていると思った和明はすぐに離れようとした。けれども、引き止める美咲がなにを話すのかと一瞬期待したがその内容はとてもショックなものだった。
和明はバスケットの練習に出ようと部室に向かったが、やはり今日はこのまま家に帰ろうと教室に戻りかけた。その時聞きなれた声が背中にかかった。

「こら、和明、遅いぞって、お前どこに行くんだ。」

和明がクラブに来るのを待っていた正樹だった。いつもと様子の違う和明を見て正樹がいぶかしげに尋ねる。

「どうした、なにかあったのか。元気ないぞ。」

「・・いや、今日は何かもういい。バスケ休むわ。」

今まで元気にしていた和明がこんなに落ち込んでいるのは、何かあったに違いない。正樹は必死になって考えた。

「何か失恋でもしたみたいだぞ。まあ、お前にはありえない話だろうけど。お前がさぼるってんなら付き合うよ。ゲーセンでも寄ってく？」

「いいよ。ひとりで帰る・・。お前はいいよな。何かすごいうらやましいよ。」

正樹は力強く和明の肩をたたいた。

「はぁ？当たり前だろう。天下無敵の正樹様だぞ。何かあったんな

ら、話せよ。俺にできることなら力になるぞ。・・・って、もしかして美咲のことか？」

「えっ」

和明は、はっとしたように正樹の顔を見た。

「図星か。お前らほんとにどうしようもないな。なあ、和明お前高校どこにするんだ？」

「高校？・・旭ヶ丘に行こうと思ってるけど・・・。」

「やっぱりな。ちょっときついな・・けどなんとかなるか。」

「はぁ？」

和明は正樹の急な脈絡のない話に面食らった。

「大丈夫だよ。そんなに落ち込む必要なんかないさ。時間がたてばそのうち事態も変わっていくだろうし。それより、今は勉強だな。お前のその出来のよさに大変な苦労を強いられそうだ。ははは」

正樹は大きな笑い声をあげて和明の肩をもう一度たたいた。

正樹が家に帰ると今度は美咲がふさぎこんでいた。正樹は大きなため息をついて美咲の顔をのぞきこんだ。

「あんまり悩むとはげるぞ。」

「失礼ね。今帰ってきたの？今日は早いじゃない。」

「だれかさんのせいでだれかさんが落ち込んで関係のない俺までまきぞえをくったのさ。何か腹へったな。美咲、何か作ってくれよ。」

「何でわたしが・・。それに今日はだめ。なにもする気がおこらない。」

正樹はいたずらっぽく口の端をあげて言った。

「いいこと教えてやろうと思ったんだけどな。まあ、いいか。」

「何よ、いいことって。」

「和明、旭ヶ丘にいくって言ってた。もちろん、俺も目指すよ。お前も数学相当頑張らんとな。」

「私も旭ヶ丘に行くの?」

「当たり前だろう。そのために聞いたんじゃないのか?今日から二人とも猛勉強だ。それと、腹減った。ナポリタン食いたい。美咲、早くしてくれ。」

美咲は、仕方なく席をたち、台所に立った。今日は久しぶりに和明と話すチャンスだったのに心にもないことを口走ったうえに、ろくな話もできぬまま終わってしまった。けれども和明が目指す高校の名前がわかり、ひとつの目標が美咲のなかで出来上がっていた。また、昔のように一緒に仲良く登校したい。美咲はとりあえず勉強に励もうと心に誓った。

第八話　思い出の中で　5

それからは和明と同じ高校に入るため、ひたすら勉強の毎日が続いた。県内でも有数の進学校が目標でかなり厳しい受験になってしまった。和明の志望校がわかってから、夏休みからずっとクリスマス、お正月とすべておあずけ状態でもう少しの辛抱だと頑張った。そして、見事ふたりとも旭ヶ丘高校への進学を果たしたのだ。合格発表の日、張り出された自分の受験番号を見つけた時の感動は忘れられない。正樹まで嬉し涙を流していた。

入学式の日、美咲は真新しいブレザーに腕を通し、乗り慣れない電車の改札を通って少し早めに高校の門をくぐった。ぐずぐずしていた正樹を待ちきれずに一人で講堂に向かおうとした。その途中に大きな桜の木があり強い風が吹いた途端、満開の桜の花びらが宙に舞う。美咲は空を仰ぎ、桜の木を見上げていた。その時、なぜか誰かの視線を感じその方に顔を向けると同じように真新しい学生服に身を包んだ和明が立ちすくんでいた。前に会った時よりも身長も伸びて、ますますたくましくなっているようだ。美咲は桜吹雪の中、自分を見つめている整った顔の薄茶色の瞳につかまった。

「・・美咲もこの高校に？」

「そう。なんとか受かった。和ちゃ・・、寺西君もさすがだね。かなりの上位で受かったって聞いたよ。」

「・・。また、一緒に通えるな。なんか、久しぶりだ。今度、・・」

「私、行かなくちゃ、正樹が待ってるから。」

美咲は和明の言葉も途中に駆け出した。久しぶりに和明の顔を見ただけで胸がどきどきしてその場から早く立ち去りたかった。あんなにそばにいたくて、同じ高校に進学したのに会えば話もできない状態で美咲は気持ちを持て余していた。

「あれ、和明だけか。美咲こなかったか？」

正樹が二人と待ち合わせをしていたところへ遅れて現れた。

「お前、なんで黙ってたんだ？俺が何回きいてもはぐらかしやがって。」

「ああ、お前をびっくりさせようと思って。よかったな、また三年は一緒にいられるな。」

和明は苦い顔をして正樹に言った。

「もういいよ。あれだけ嫌われてたら望みはないよ。きっと顔を合わすのも嫌かもしれない。お前にも気を使わせて悪かったな。」

「はぁ？それ本気でいってんのか。お前ら、ほんとにばかだなあ。美咲も不器用だし・・。俺がせっかくチャンスを作ってやったのに・・・。仕方ないな、まあ時間はあるんだし、ゆっくりやるか。さあ、行こうぜ。」

正樹は和明の腕をつかみ、入学式の行われる講堂へと向かった。

美咲は中学とは違う高校の規模の大きさに圧倒された。広い地域から集まってきたたくさんの生徒達の中で自分だけが場違いのような

気がしてくる。部活の勧誘をみて自分はなにがしたいのかと考えたが、すぐに答えが出てこない。中学の時と同じ吹奏楽をしようかと思ったが、なぜか気が進まなかった。ふと、立てかけてあった弓道の看板をみて勢いだけで入部を決めてしまった。昔から運動神経の鈍い美咲が運動部の入部を決めてきたことに正樹をはじめ、両親もあっけにとられていた。

「美咲、俺も決めた。バスケに入ろうと思ってたけどやめる。せっかくだから新しいことに挑戦するぞ。」

正樹は美咲の選択になにを思ったかひどく賞賛し、次の日美術部の入部を決めてきたのだ。

こうして二人の新しい高校生活が始まっていった。

勉強に部活にとますます忙しくなった美咲は、和明と顔を合わす機会もますますなくなり、気がつくと高校二年の五月の誕生日を迎えていたのだ。

第九話　バレーボール大会で

今日はクラス対抗のバレーボール大会の日だ。毎年恒例で五月に行われる。男女別に勝ち抜きのトーナメントになっていた。男子の試合はやはり迫力があり、クラスのみんなが応援するようになっている。旭ヶ丘高校は進学校のわりに行事が多く、勉強以外の催し物もつまっていた。美咲は相変わらずバレーボールも苦手でサーブひとつもなかなか入らない。それが他のメンバーがよかったのか美咲のチームはどんどん駒を進めて、準決勝までやってきた。

「美咲、すごいじゃないか。優勝までがんばれよ。」

試合の合間に正樹に会い、声をかけられた。

「違う。どうしよう、私ひとり足ひっぱってるのに・・。何か、家に帰りたい。」

美咲は情けない声で正樹に言った。正樹は笑いながら平気な顔をしてとんでもないことを言い出す。

「後で和明と一緒に応援しにいくからな。しっかりやれよ。」

「やめて、絶対こないで！」

美咲は友達の久子と一緒にクラスの男子の応援をしに行った。コートの周りは女子が大勢駆けつけて接戦なのかとても白熱していた。ふと隣のコートを見るとちょうど和明がサーブを打つところで美咲は目を瞠った。

「美咲、どこみてるの？うちのクラスはこっちよ。」

「えっ、ああごめん。」

美咲はあわてて和明から視線をはずしクラスの方に向き直った。長いラリーが続き手に汗握る試合になっている。美咲はクラスの応援をしなければと思いつつ、ボールが和明の方に向かうとついつい和明の応援をしている自分に気づいた。昔からなんでも器用にこなす和明は難しいボールも危なげなくつなぎ、クラスの女子の黄色い声援に応えていた。小学校の時の運動会でリレーを応援していた自分と重なってくる。あの時は大声で応援できたが、今は心の中でエールを送った。

「美咲、見て。向こうのクラスのあの男の子すごいかっこいいね。さっきから向こうのクラスの女子の声援すごいよ。」

「・・そうだね。」

久子は和明を指して美咲に言った。中学でも人気があったが、高校でも女の子に注目されているのがよくわかる。自分にはつりあわない人だと美咲は思った。試合は結局和明のクラスが勝ち、美咲のクラスは負けてしまった。男子が肩を落としている。美咲の隣の席に座っている男子が美咲に声をかけてきた。

「沢中、負けちまったよ。ちゃんと応援してくれてたか？おまえも向こうの寺西にみとれてたんじゃないだろうな。」

クラスでも人気のある気さくな感じの相田卓真だ。相田はバスケット部に所属し、和明のことをよく知っていた。

「あのすごいかっこよかった人が寺西君って言うの？知らなかった。」

久子は和明の名前を聞いて感心していた。

「残念だったね。もう少しで勝てたのに。」

「あたりが悪かったな。寺西のいるクラスじゃなかったらもっと上までいけたはずなんだけど、くそう、悔しいな。」

美咲が相田と親しそうに話しているのを和明もじっと見つめていた。その視線を感じたのか相田が和明に話しかけた。

「おーい、寺西。お前、もう少し手えぬけよ。バスケだけでなくバレーも得意なのか？嫌味なやつだな。」

相田は美咲と離れ、和明のそばへ寄っていった。その隙に美咲は久子と一緒にコートを離れた。

「美咲、さっきの寺西君と知り合いなの？」

「え？」美咲は久子に和明の話を突然ふられ、びっくりした。

「なんか、寺西君、ずっと美咲の方見てたみたいだったから。知り合いなのかと思って。」

「・・同じ中学だったの。中学では一緒のクラスになったことないけど・・。」

「へぇ、そうなんだ。寺西君、すごく人気あるみたいだよ。私の友

達が同じクラスで、なんでもできてやさしいから女の子の呼び出ししょっちゅうって言ってた。でも確かにかっこよかったね。名前だけ聞いて知ってたんだけど。中学でもすごかったでしょ？」

「そうね、すごかったな。」

「寺西君、美咲のこと好きなんじゃない？」

「はぁ？なんでそうなるのよ。」

「だって美咲が相田君と話してるのすごい顔して見てたよ。私、たまたま寺西君の方見て気づいたんだけどあれはちょっと・・」

「久子の思いすごしよ。それより今度私らの番じゃない。どうしよう、久子はバレー得意だからいいけど私嫌だなあ、出るの。逃げたくなってきた。」

「大丈夫よ。勝っても負けてもどうってことないんだから。気楽にいこう。」

久子は美咲を励ました。美咲はさっき正樹が言っていたせりふを思い出し、ますますコートに向かうのが憂鬱になっていた。

第十話　保健室にて

女子の準決勝の試合が始まった。六人制のチームの中で美咲はどきどきしながら自分の所にボールが飛んでこないようひたすら願った。視界の隅に見に行くと言っていた正樹と和明の姿も映る。来ないでと言ったのに・・。美咲はますます緊張していた。相手のクラスも勝ち抜いてきただけあって上手にボールをつないでいる。飛んできたボールを美咲はなんとか相手のコートへ打ち返した。正樹がそれを見て「美咲、その調子！」と大きな声を出してきた。はずかしい・・。美咲は顔を真っ赤にしてうつむいた。試合も中盤を差し掛かったところ、美咲とその隣との間ぐらいのボールを拾おうとしたその時、美咲は足をひねりこけてしまった。あっと思った時には、体が地面に打ち付けられていた。

「美咲、大丈夫？！」

久子があわててかけよった。美咲は顔をしかめながら立ち上がろうとしたが足を痛めてしまったのか、なかなか思うように体が動かない。試合は中断し先生が声をかけてきた。

「大丈夫か、誰か保健室に連れて行ってやれ。」

「俺がいきます。妹なんで。」

正樹がすぐに名乗り出た。美咲はすぐに安堵し、かけよってきた正樹にしがみついた。

「やっちゃった。足捻挫してると思うわ。」

「仕方ないな、肩につかまれ。和明、悪いが俺の荷物後で保健室に持ってきてくれないか。」

正樹は振り向いて心配そうに立っていた和明に声をかけた。

「来るなって言ったのに・・。正樹が見に来るから調子くるって転んだのよ。」

美咲は保健室に入るといすに体をあずけて正樹に言った。

「なにぃ?!保健室までつれてきてやったのに。・・ああ、そうか、和明につれてきてほしかったのか、悪かったな。帰りは和明に送ってもらえよ。もうすぐ来るだろうから。」

「な、何言ってるのよ・・。正樹、今日は一緒に帰ってよ。かわいい妹がけがをして困ってるのに見捨てる気なの?そんな薄情な奴じゃないでしょ」

「いや、俺は冷たいやつだよ。今日バスケの練習に参加する予定なんだ。お前にかまってる暇はないよ。代わりに和明にちゃんと家まで送るよう頼んどくから心配するな。」

保健室には先生がいなかったので、正樹は戸棚をあけて湿布薬を探し出し美咲の足に処置をした。赤くはれ上がった足に冷たい感触が広がっていく。駅まで歩くのも大変だろうなと帰りの道のりがひどく遠く思われた。包帯をほぼ巻き終わる頃、保健室のとびらが開けられた。

試合を終えた久子が心配してやってきたのだ。

「美咲、大丈夫？」

正樹がいることに少しためらわれたのか声のトーンが少し落ちた。

「うん、大丈夫。今、湿布はってもらったから。でも、歩いて帰れるかな。試合どうなったの？」

「負けちゃった。」

美咲はうなずくと足をさすりながら正樹の方を見ると、正樹は知らん顔をして窓の外を見ている。どうしても美咲を送る気はないようだ。その時、久子が正樹に思いを寄せていたことを思い出し何とかうまくいかないかと画策した。

「正樹、こちら私の親友の森野久子さん。いつも本当によくしてくれるの。正樹、私今日、久子と図書室で一緒に勉強する約束してたの。明日、テストだから。私と一緒に帰る気がないんなら久子につきあってあげてよ。数学得意でしょ。」

正樹と久子はびっくりして美咲の顔に注目していた。その一瞬後、保健室の扉が再び開かれた。和明が入ってきたのだ。三人の視線を一身に受けて、和明はとまどってしまった。

「え、えっと、美咲、大丈夫か？」

和明はためらいがちに美咲を心配そうな顔で見つめている。美咲と和明の関係を知らない久子は二人の顔を交互に見比べた。

「和明、遅かったな。美咲の足かなりひどそうだ。お前悪いが美咲を家まで送ってやってくれないか。俺、お前の代わりにバスケの練

習にでてくるわ。」

「今日は練習はないよ。バレーボール大会だったからクラブ活動は今日ないそうだ。」

和明のそのせりふでまた、沈黙が広まった。いったいどうすればいいのだろう。美咲と正樹の頭の中でそれぞれの思いが交錯していた。クラブがないなら美咲を送れない口実がなくなってしまう。美咲の申し出を受けて図書室に行けばいいのだろうか？正樹に家まで送ってもらったら久子と正樹のせっかくの機会がなくなってしまう。和明に送ってもらえばいいの？二人は顔を見合わせた。

「森野さん、一緒に勉強しようか、俺でよければ美咲の代わりに付き合うよ。和明、悪いが美咲のこと頼んだぞ。」

「正樹、わ、わたし・・。」

美咲は心もとない視線を向けたが正樹の言葉でその場がまるくおさまった。

「そ、そんな勉強なんていいです。またいつでも美咲と図書室にいけるし。」

久子も急な展開に慌てていた。話もしたことのなかった正樹と二人で、図書室で勉強するなど思いもよらなかったのだ。あわてている二人に比べ正樹と和明は冷静で、結局美咲は和明と一緒に帰ることになり、正樹は久子と図書室で待ち合わせることになったのだ。

和明は美咲のために自転車を借りてくると保健室を出て行き、正樹は着替えてそのまま図書室に行くと告げ、部屋を後にした。残され

た二人は呆然としていた。

「美咲、いったいどうなってるの？寺西君と美咲ってただの同級生じゃなかったの？」

「お、幼馴染なの。小学校の時からずっと一緒で・・・。」

「ええ？さっきはそんなこと言ってなかったじゃない。・・それに私、正樹君と本当に一緒に図書室で勉強するの？美咲は帰るのに・・・。」

「だってしょうがないでしょ。足こんなんだし・・。正樹、数学得意だから教えてもらえばいいじゃない。それより私の方こそどうしよう。二人で帰るなんて・・・。」

二人は顔を見合わせて思わず吹き出してしまった。そんなに深刻になっても仕方ない。別にとってくわれるわけじゃあるまいし・・。久子は美咲がつくってくれた機会を無駄にしないよう急いで教室に戻り、美咲の荷物を保健室に届けた後、図書室に向かった。まるで夢のような展開に心を躍らせながら・・・。

美咲は何とか着替えを済まし、家が近い和明に家に送ってもらうと先生に申し出た。

「あの、ごめんなさい。こんなことになって・・・。正樹と一緒に帰ればよかったんだけど。」

美咲は迎えに来た和明に謝った。ここのところ顔もあわせてなかった和明に自分の失態を見られて恥ずかしさにうつむいた。すると頭の上に暖かいものが落ちてきて、おどろいて顔を上げると和明の笑

った顔が飛び込んできた。昔のように髪をくしゃっと触ってきたのだ。

「か、かずちゃん?!」

美咲はびっくりして片手を頭にのせ、つい昔の呼び名を叫んでいた。

「はは、やっと名前を呼んでくれたな。・・さあ、帰ろうか。ちょっと距離あるけど歩くのたいへんだろうから自転車で二人乗りして帰ろう。」

美咲は顔を赤くして和明の差し出した手をためらいがちにつかんだ。昔とおなじぬくもりの手のひらの感触が美咲の心も温かくしていった。

第十一話　自転車に乗って

美咲はびっこをひいて和明につかまりながらやっと自転車のところへたどり着いた。自転車の荷台に横座りし、和明の制服の端をつかんだ。昔と違った広い背中がすぐ目の前にあり、離れていた年月がひどく長いものであるように感じる。

「しっかり持っていてくれよ。」

「わかった。」

美咲は遠慮がちにつかんでいた手を大きくしてしっかりと掴みなおした。自転車は静かに滑り出し二人はいつも電車から眺めていた道をゆっくりと北に進んでいった。車の多い国道からそれて河川敷の道を進んでいた。五月のさわやかな風がふたりを包んでいる。

「和ちゃん、久しぶりだね。自転車の二人乗りなんて・・・。学校の女の子が見たら私、明日の放課後絶対呼び出しだね。」

「本当だな。小さい頃はよく後ろに美咲を乗せてたけど。でも・・・」

「でも？」

背中越しに話しているのでどんな顔をしているのかわからないが、ふたりとも気分が浮き立っていた。

「美咲も昔と違って重くなったなあと思って、ははは。」

「もう、ひどいんだから。」

美咲は和明の背中をたたいた。自転車がその拍子に少し傾いた。

「こ、こら。美咲、またひっくり返るぞ。」

和明はあわてて体勢を立て直した。家が近づくにつれ、見慣れた景色が見えてきた。昔三人でよく遊んだ公園もこんなに小さかったかと思った。自分たちが大きくなっただけで周りはなにも変わっていない。いや、美咲自身も和明も何も変わっていないと思いたかった。昨日まで顔も合わさず遠い存在だった和明が今では信じられないほど近くにいた。まだ夢の中にいるような感覚がしている。

家にあっという間に到着してしまった。美咲はもっと和明と一緒にいたかったが仕方がない。

足を引きずりながら玄関を開けるとちょうど母親の佐智子が出てきた。

「あら、どうしたの？」

佐智子はびっくりした顔で美咲の顔をのぞきこんだ。またその隣にいる和明を見てさらに目を瞠った。

「バレーボール大会で転んで捻挫しちゃった。和ちゃんが家まで自転車で送ってくれたの。」

美咲は申し訳なさそうに和明を見上げた。

「まあ、和ちゃんありがとう。本当に久しぶりね、こんなに大きくなって。正樹にたまに話しは聞いてたんだけど・・。さあ、ふたりとも早くあがって。お茶でも淹れるわ。」

佐智子はあわてて奥に入っていった。

「和ちゃん、どうぞあがってって。」

和明は一瞬ためらったが、美咲に伴って部屋の奥へと進んだ。何年も足を踏み入れてなかったが、昔のままの間取りでとても懐かしい空気が和明を歓迎してくれた。広い客間に通された和明は昔と同じように置かれているピアノに目がいった。今はいない美咲の祖父のバイオリンの音まで聞こえてきそうなくらい何もかもが昔のままだった。

「美咲、ピアノを弾いてくれないか。ずっと・・ずっと美咲のピアノが聴きたかったんだ。」

和明のまっすぐの視線から目がそらせない。美咲は困った顔をして両手の指を組んだ。

「私、最近全然練習してないの。高校に入ってから下手くそな弓道に時間をとられて・・。」

美咲はこの間、道場で和明に言われたせりふを思い出し、恨めしそうに和明を見上げた。和明も同じことを思い出したのかばつが悪そうに頭をかいた。

「あの時は悪かったよ。でも、下手くそでもいいんだ。弾いてくれないか。」

美咲はしぶしぶピアノのふたを開けた。いつからだろう、本当に久しぶりの気がする。美咲は昔よく弾いていたエルガーの「愛の挨拶」

を弾き始めた。指が覚えているのか自然と懐かしいメロディーが流れていく。やさしかった祖父母もすぐそばで聞いているような感覚にとらわれた。長い間二人の間を阻んでいた壁が一瞬のうちにとりはらわれた。甘く切ないメロディーが二人の心に染み渡っていき、その瞬間はまさしくふたりだけのものだった。曲が終わってもその余韻から抜け出せずに二人は声を出さず座り込んでいた。佐智子がお盆に紅茶とクッキーをのせて部屋に入ってきた。

「お待たせ。ダージリンでよかったかしら。美咲、ピアノ弾いたの久しぶりね。またはじめてみたらどう？受験だからって中学の時に辞めちゃったから。でも本当に和ちゃんか〝うちに来るのも久しぶりね。昔は毎日のように三人で走り回っていたのに・・。あら、もしかしてあなたたち・・。」

佐智子は二人の顔を見比べた。二人とも佐智子の言葉の意味がわからずきょとんとしている。

一瞬の後、和明は察したのか顔を赤くして否定した。

「ち、違います。そんなんじゃなくて・・。」

「いいのよ、隠さなくても。小さい頃は本当に仲がよかったものね。和ちゃん、この子頼りないけど我慢して大目にみてやってね。和ちゃんが家に来なくなって本当に寂しそうにしてたのよ。」

佐智子はうれしそうに二人を眺めている。美咲もやっと母親のいったことの意味を理解してひどく否定した。

「お母さん、何言ってるのよ。そんなわけないじゃない。私が怪我したから仕方なく家まで送ってくれたのよ。そんなこと、和ちゃんに失礼じゃない。和ちゃんが私なんか相手にするわけないでしょ。

ねぇ。」

美咲は和明にあわてて同意を求めるように顔を向けた。しかし、和明は傷ついたような目を向けるだけでなにも返事をしなかった。とても仲よさそうに帰ってきた二人の姿はどこにもなく、よそよそしい雰囲気が漂っている。佐智子は自分の言ったことが失言だったと気づいて、あわてて話題を変えた。

第十二話　好きな人

「和ちゃん、お父さんとお母さんは元気でいらっしゃる？長い間ごぶさたしてしまって。」

「父は今イギリスにいます。来年の五月までは帰らない予定なんで、母は出版社の編集の仕事が忙しいらしくて帰宅も遅いです。この間の春休みに母とイギリスへ行ってきました。」

「和ちゃん、今も英語話せるの？」

淡々と佐智子の質問に答えている和明の横顔に美咲は思わず問いかけた。

「え？ああ、話せるよ。日本にきてからも母さんが忘れないようにってずっと家では英語でやってきたからね。」

和明は別になんでもないことのように話していた。美咲はさっきまですぐ身近に感じていた和明がまた急に離れて行った様な感覚にとらわれた。

「和ちゃん、成績もトップクラスなんですって？いつも正樹があいつはすごいっていってるから・・。ねぇ、和ちゃん、もしできたら美咲の勉強暇な時でいいからみてあげてくれない？この子この間も数学のテスト赤点とってきて追試受けてたのよ。」

「お母さん、な、何言ってるの！」

「だって本当のことでしょ。正樹に頼んでも、全然あの子みる気な

いし。このままじゃ美咲も困るでしょ。」

美咲はこの間の追試を思い出しうつむいた。でもなにも和明の前でそんなこと言わないでほしい。あまりの恥ずかしさに和明の方をみることも出来なかった。

「いいですよ、僕にわかることなら。」

美咲は、和明の返事に思わず顔を上げた。美咲を見下ろしている和明と目が合い、仕方なしにうなずいた。佐智子は二人の邪魔にならないようそっと部屋を出て行った。ちょうど明日に数列のテストがあることを思い出し、美咲は早速教科書をかばんから取り出した。久子も正樹と一緒にがんばっているに違いない。思わず強力な助っ人が現れて美咲は遠慮なしに和明に質問を繰り返した。学校の授業よりもわかりやすい和明の丁寧な教え方に美咲は感嘆の声をあげた。

「和ちゃん、本当にありがとう。よくわかった、これで明日のテストは大丈夫だと思う。」

とても嬉しそうに話す美咲に和明も微笑み返した。

「いつでも聞きにきたらいいよ。水曜日はクラブがないから水曜日なら放課後空いてるし・・」

「でも、本当にいいの？和ちゃん、いま付き合ってる彼女はいてないの？私なんかがそばにいたら迷惑なんじゃない？」

和明は美咲の言った言葉にびっくりしたように返事した。

「彼女なんかいてない。今までもいたことないし、これからも・・。

」

和明は難しい顔をしてじっと美咲の顔を直視していた。あまりの真剣な表情に美咲は思わず視線を逸らした。

「そっか、和ちゃんすごいもてるもんね。一人にしぼったら泣く子がいっぱいできるし・・。」

「そんなの関係ない。。大勢の女の子が泣こうがどうしようが俺には関係ない。たったひとりの好きな子が側で笑ってくれていたらそれでいいんだ。・・昔、俺に言ったよな。なぜ彼女つくらないのかって、答えは簡単だよ。俺にはその子しか目に入らないのに、向こうにとっては俺なんかどうでもいい存在なんだよ。」

和明はすっと美咲から視線を外し、唇をかんでいた。日頃から温厚な和明の珍しくいらだった声を聞き、美咲は肩をすくめた。

「ご、ごめん。そうだね、和ちゃんも好きな人いてるんだ。その人とうまくいくといいね。」

美咲は和明に好きな人がいることに少しショックを受けたが笑って和明を励ました。

「お前はどうなんだよ。」

「え？」

「お前も好きなやついてるのか？」

「・・うん、いてるよ。でももういいの。」

「それって、もしかして・・・。」

「え？」

二人は顔を見合わせたがお互い話し出すことはもうなかった。

第十二話　好きな人（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
つたない文章ですが最後までお付き合いいただければとても嬉しいです。

第十三話　恋は難しい

和明は美咲に早く医者に行くように告げると、佐智子の夕食の誘いも断り帰っていった。正樹が手早く湿布をはってくれたおかげか美咲の足のはれもだいぶひいてきていた。和明とすごした数時間がまるで夢だったかと思うほど、いつもの日常の時間が流れていた。

「美咲、足はどう？お医者にいかなくてもいいの？」

「うん、大丈夫みたい。痛みも少しましになったわ。」

美咲は佐智子が夕食の用意をしている横でくつろぎ、さっきの和明との話を反芻していた。和明に好きな人がいると知ったのは、やはりショックなことだった。あれほど完璧な和明でも片思いをしているのかと恋愛の難しさを思う。好きな人に振り向いてもらえない切ない思いが美咲の心にもせまっていた。

「ただいま。」

正樹が帰り、美咲のそばへと近づいた、

「足，どうだ？明日学校は行けそうか？」

正樹は心配そうに足を見ている。美咲は正樹の顔をのぞきこみ返事した。

「だめ、歩けない。正樹が帰り送ってくれないからひどくなった。おんぶして二階まで連れて行って。」

「はぁ？和明が送ってくれたんだろう？歩けないのか？」

正樹は仕方なさそうにかがんで背中を向けた。美咲は正樹の背中をみてさっき自転車で送ってくれた和明の背中を思い出した。いつの間にか美咲と違い広い背中に成長している。男女の違いのなかった小さい頃に戻りたいとふと急に思った。

「私も男の子に生まれればよかったかな・・。そうしたら・・。」

「美咲、和明となんかあったのか？」

正樹はかがんでいた体を起こし、美咲の方に振り向いた。怪訝そうにみている正樹に美咲は笑いかけた。

「なんでもない。嘘だよ、歩ける。まだ少し痛いけど・・。それよりどうだった？」

「はぁ？なにが。」正樹はあきれた顔で美咲を見下ろしていた。

「何って、久子と一緒に図書室で勉強したんでしょ。どうだった？」

「・・お前、謀ったな。どうもないよ。明日の数学のテストの勉強しただけなんだから。」

「そっか・・。正樹は久子のこと嫌い？」

「なんでそうなるんだよ。別に好きも嫌いもない。今日はじめて会ったんだから。おまえなぁ、人のことより自分のこともう少し考えたほうがいいんじゃないか。」

「なに、それどういうこと？」

「和明と一緒に帰ったんだろう、どんな話をしたんだ？」

「どんなって・・、別に・・。久しぶりに一緒に帰るなって、で、家について私がピアノを弾いた後三人でお茶飲んで・・。ああ、和ちゃん春休みにお父さんのいるイギリスへ行ってきたんだって。いまでも英語ぺらぺらみたいだね。うらやましいなぁ。」

「それで？」

「ん？それでって・・、何？」

「他には何か言わなかったのか？」

「・・・。勉強教えてもらった。いつでも聞きに来いって・・和ちゃん、すごく好きな人がいるみたい。和ちゃんなら選り取り見どりだろうに片思いみたいだった。」

美咲は少し声のトーンを落として正樹に話した。正樹は大きなため息をついていた。

「おまえ、本当にわかってないんだな。今度の土曜、バスケの試合の助っ人に出るから応援に来てくれ。何なら森野さんも一緒に誘って。」

美咲は反論しようとしたが正樹のいつもと違う強い口調に押されて、うなづくしか出来なかった。

夕飯時、久しぶりに和明が家に来たと母の佐智子が嬉しそうに正樹

に話していた。正樹より背も高いし、頭もいいし、かっこいいと好き放題言っている母親に苦笑しながら、正樹が本当のことだとうなづいていた。その後、また遊びに来るように誘ってくれと正樹に何度も言っていた。その隣で口数少なく夕飯を食べていた美咲はびっこをひきながら早々に部屋へと引き揚げた。

机の上にさっき教えてもらった数学のノートを広げてみた。和明が書いた少し癖のある整った文字が目に入ってくる。難しい公式も教科書を見ずにそらで書いていた和明の聡明さに思わずため息が出てくる。誰なんだろう・・。どんな素敵な女性が和明の心を捉えたんだろう。美咲は和明の澄んだ瞳を思い出した。あのまっすぐな視線が自分以外の人に注がれるのかとひどく落ち込んでいた。けれども、久しぶりに一緒に帰った学校からの帰り道は本当に幸せだった。もう二度とない、つかの間の時だったとしても美咲にとっては十分だった。足の怪我は痛かったが、今日は特別な日だったと美咲はゆっくりと思い返していた。

第十四話　応援してくれ

翌日、美咲は足の怪我のためいつもより早めに家を出た。一晩でだいぶ足の腫れはひいたがやはり歩くのが少しつらい。正樹がまた和明に送ってもらえといっていたがあまりにも悪いので、辞退した。いつもと同じように家から出て、坂道を下り、左に曲がろうとしたその時、後ろから声をかけられた。

「美咲、おはよう。」

振り返ると和明が自転車にまたがり美咲のほうに手招きしていた。美咲はびっくりして和明の顔を見ていたら、早く後ろに乗るようにと側へ来て促してくる。

「和ちゃん、どうして・・。いつから待ってたの？」

「少し前だよ。足、大丈夫か？」

「大丈夫だよ。腫れもだいぶひいたし・・。学校まで送ってくれるの？正樹が無理言ったんでしょう？」

「違うよ。自転車どうせ返さないといけないし、さあ、乗って。」

二人は自転車で、まだ通学時間には少し早い空いた道路を進んでいった。美咲は昨日、一緒に帰ったことも夢みたいだと思っていたのだ。また一緒に学校へ向かっていることが信じられなかった。

「和ちゃん、今度のバスケットの試合、正樹も出るんだってね。私、応援に来るように言われてるの。いっぱい学校の子、観に行くのか

な。」

「ああ、正樹に無理に頼んだんだ。一人怪我で出られなくなったから．．．相田も試合に出るよ。」

「えっ・・・。相田君？ああ、私同じクラスなの。そうか、相田君も出るんだ。」

美咲は知っている人の名前が出てきて、素直にうれしくなって声を上げた。自転車の後ろに乗っている美咲には、その時の和明の顔が沈んだのをうかがい知ることはできなかった。

学校に近づくにつれ、制服姿の人がちらほら見うけられる。美咲は和明の後ろに座っているのを見られるのが恥ずかしくなり、学校の手前で降ろしてもらおうと和明に頼んだが結局、門のところで自転車は止まった。何人もの生徒が不思議そうな視線を二人に投げかけていく。何の接点もなかった二人がいきなり自転車の二人乗りで登校する姿は、日頃から目をひいていた和明だけに学内のうわさにされるだろうことが容易に想像できた。
美咲はあわてて和明に礼を述べ、目を合わすこともなく生徒たちの間に紛れていった。

「おはよう、沢中さん、今日は早いね。さっき二組の寺西君と一緒に登校してたでしょ、いつから付き合ってるの？」

「違うわ。たまたま一緒になって足を痛めてたから送ってもらったたげよ。付き合ってなんかない。」

いつも話しもしたことのない学友から問いただされた。今日一日のうちに何回同じことを聞かれるだろうかと想像すると憂鬱になって

きた。小学校の時にも和明とのことで冷やかされた。高校生になっても和明のすぐ側にいると周りに色々言われるのかと少し落ち込んでくる。

「美咲、おはよう。」

久子が美咲の姿を見つけて声をかけてきた。

「おはよう、久子。昨日はどうだった？正樹、ちゃんと数学教えてくれた？」

「うん、ありがとう。本当に嬉しかった。勉強は私かなり舞い上がっててよく覚えてないの。でも、これで十分。一生の思い出にするわ。」

「そんなオーバーな。また一緒に勉強すればいいじゃない。正樹に言っとくわ。」

「やめて、本当にいいの。正樹君も他に好きな人いてるわよ。私なんか迷惑なだけよ。」

「なんでそう思うの？正樹もまんざらじゃなかったと思うんだけど・・。そうだ、土曜日にバスケの試合があるの。一緒に観においでって正樹が言ってたから。一緒に行こう。」

二人は週末の試合を観にいくのを楽しみにしていた。

土曜日の朝、正樹が家を出るのを見送った後、美咲は久子と連れ立

って隣町の高校へと向かった。体育館の中はたくさんの両校の生徒たちが応援に来ていた。バスケットボール部の面々が体慣らしにドリブルやシュートの練習をしている。その中に和明の姿を見つけた美咲は嬉しくなりとっさに声をかけようとしたが、急に声をひっこめた。おそらくマネージャーであろうか同じユニフォームを着てすらっとしたポニーテールのきれいな女の子が和明の側へと駆け寄ったのだ。美咲は二人から目が離せなくなった。その時、大きな声で美咲を呼ぶ声が聞こえてきた。

「沢中！　沢中、こっちだ。応援にきてくれたのか？」

同じクラスの相田卓真がコート内から大きな声で美咲の方に声をかけていた。その声に近くにいた正樹と和明がびっくりして振り返っている。

「ああ、悪い。おまえも沢中だったなあ。ややこしいな・・。美咲、しっかり応援してくれよ。」

相田は振り返った正樹の顔を見て、口角をあげ美咲の名前を呼び捨てで呼んでいた。あっけにとられた正樹に悪びれもせず笑顔を向けている。

「おまえたち、双子なんだよな。ややこしいから下の名前で呼ばせてもらうよ。美咲とは今隣の席なんだ。よくおまえのこと話にでてきて、一度話してみたかったんだ。」

屈託のない明るい相田に正樹は少し面食らったが悪いやつじゃなさそうだと思った。

「俺は別に呼び捨てでいいけど、美咲はちょっと・・。」

「そうか、なれなれしすぎるかな・・美咲ちゃんにするよ。彼女いい子だよな。結構狙ってるやついてるんだぜ。おまえも結構有名だもんな。今日は頼むぜ、寺西の推薦だから間違いないだろうけど。」

和明は憮然とした顔でコート内へ視線を向けていた。その横顔をチラッと見て正樹は相田に応対した。

「美咲と仲がいいのか？ちょっと鈍くさいだろう、あいつ。俺の妹にしてはキレが悪いな。」

「おまえ、自信家なんだな。同じ兄弟でもだいぶ性格が違うようだ。美咲ちゃんは、あのおっとりしたところがかわいいんだよ。おまえにはわからないのかもしれないが・・。」

正樹と相田がなにを話しているのかと美咲はじっと見ていたが、わからなかった。和明は美咲の方を振り返り二人の視線が一瞬あったが、美咲が手を振ろうとする前に逸らしてしまった。どうしたんだろう。和明の様子がいつもと違うような気がして美咲は落ち着かなかった。相田と話していた正樹も美咲の方を見やると隣にいる久子とも目が合った。正樹は軽く右手を上げると踵を返し、和明の肩をたたいて二人でコートの中央へと進んでいった。

第十五話　和明の誤解

バスケットの試合が始まった。中学の時のように正樹と和明が一緒に同じコートの中を走っている。二人の息は今でもぴったりで、ゴール下までパスをつなぎどんどん点数を重ねていった。昔はあの二人の間に自分も入っていたんだなとふと美咲は思う。昔も鈍くさかった自分のことだ。二人はきっと自分に気をつかって遊んでいたんだとコート内を自由に動き回っている姿を見てそう思った。美咲はぼぅっと試合を見ていると休憩のホイッスルが鳴り、急に我に返った。

「向こうのチームさすがに強いね。どっちが勝つかわからないよ。」

「え、ああ、そうだね。」

少しの休憩を挟んで試合は再開された。バスケットが強いと有名な高校相手に和明達も健闘している。両校の応援も白熱した試合にどんどん力が入っていった。どちらが勝つかわからないほとんど五分五分の試合に応援席も固唾を呑んで見守っている。美咲は和明の姿を追いかけ、頑張れと心の中で何度も繰り返していた。和明の所にボールが回り、正樹にパスしようとするが何人もの選手に阻まれうまくいかない。ドリブルの音が体育館内に響き渡っている。美咲は思わず立ち上がり、他の生徒と同じように叫んでいた。

「和ちゃん、頑張ってー！」

美咲の応援が届いたかどうかわからないが、和明はそのままジャンプしてかなり向こうに見えるバスケットへボールをシュートした。ボールは吸い込まれるようにかごの中へと落ちていった。一瞬の静

寂の後、割れるような歓声が上がる。和明の肩をチームのみんなが叩き、成功を称えた。和明の嬉しそうな顔が美咲の目にも映る。試合を観に来てよかったと美咲は正樹に感謝した。

「結局負けちゃったね、もう少しだったのに・・。」

試合の帰り、美咲と久子はファーストフードのお店でハンバーガーをほおばっていた。

「そうだね、惜しかったね。たったの3ゴール差だもん。インターハイ候補によく健闘してたよ。すごいよ。」

「インターハイ候補？すごいとこと試合してたんだね。」

「美咲、知らなかったの？」

「うん、正樹も何にも言わなかったし。へぇ、すごいね。」

「正樹君、部員じゃないのに上手かったね。バスケやってたらかなりいけたんじゃない？」

「うん、たぶんね。でも今は美術部だから。」

二人はさっきの試合の興奮が冷めず、話に花を咲かせていた。とりとめのない話を繰り返しているうちに店の中へ見知った顔が入ってきた。正樹達が打ち上げのため、店の中へとクラブのみんなと入ってきたのだ。相田がいち早く美咲を見つけて嬉しそうに声をかけてきた。

「沢中、偶然だな。さっきは応援ありがとな。なぁ、ここにすわっ

てもいいかな。」

相田は美咲達と後ろにいる正樹たちとを見合わせた。和明も後ろから入店し、美咲を見て目を見開いた。二年生ばかりバスケ部の男子生徒がどうしようかと立ちすくんでいた。その中に試合が始まる前に和明と話していたポニーテールの女の子の姿もあった。美咲は和明の側に立つその子の方に視線を向ける。正樹は和明の顔をちらっと見てから仕方ないというように美咲の側に立った。

「美咲、少し奥に寄ってくれ。おまえ、もうすぐ帰るんだろう。」

「えっ、ああ、うん。」

美咲は正樹に促されて出口に近いほうへ席を詰めた。

「正樹、美咲ちゃんに邪険にするなよ。まだ帰らないよな。」

相田に名前を呼ばれて美咲はびっくりして顔を向けた。正樹は相田のストレートな表現に苦笑するしかなかった。和明もこれぐらい素直になれば簡単なのに・・。思わずため息がでてきそうだ。和明もじっと相田の顔を直視している。他の部員も正樹に習い、順番に席についた。美咲の隣に正樹が並び、久子の隣に相田が座った。和明も仕方なしに、一番離れた席に座っている。それぞれが注文を決めてきてやっと席に落ち着いた。

「沢中、これから君のこと美咲ちゃんと呼ぶことにしたんだ。ここにいるお兄さんと相談してな。沢中が二人いるとややこしいだろう。」

美咲は相田の言葉にはにかんでうなづいた。確かにややこしいかも

しれない。

「相田君、惜しかったね。もうちょっとだったのに。」

「まぁ、あれだけやりゃ十分だよ、なんせインターハイ候補だったからな。正樹も飛び入りにしちゃ上手かったもんな。なんでバスケに入らなかったんだ？」

「正樹、美術部に入ってるの。またこれがすごい下手くそで・・・。中学の時はバスケやってたんたけどね」

「美咲、もういいよ。おまえ、まだ帰らないのか。」

「そうだね、もう帰ろうか。久子」

「まだいいじゃないか。それより、二人あんまり似てないな。そう思わないか、森野。」

「二卵性だからな。目元が似てるってよく言われるけど、どうかな。」

「うん、似てるよ。やっぱり兄弟だね。」

四人で話がどんどん進んでいった。はじめはその場が白けていたが、相田のいつもの気さくな雰囲気のせいか久子も緊張が解けて楽しく盛り上がっていた。遠めに美咲を見ていた和明は相田と楽しそうに会話している姿にいたたまれなくなったのか先に帰るといって店を後にした。正樹はその様子を見ていたが席も遠かったので、仕方なくその背中を見送った。その後を前の席に座っていたマネージャーの藤井理沙が追いかけた。

「寺西君、急にどうしたの？もう帰るの？」

「藤井さん、悪い。疲れたから先に帰らせてもらうよ。みんなによろしく言っといて。それじゃ。」

和明は走ってその場から離れていった。美咲の姿を体育館の中で見つけたときはとても嬉しかったが、相田と楽しそうに話す姿は見たくなかった。美咲が相田と付き合いだすのも時間の問題かもしれない。和明はスポーツバッグを反対の肩にかけなおし、駅への道を急いだ。

結局、美咲はその後正樹と一緒に家路を進んでいた。相田は名残惜しそうに美咲の方を見ていたが久子に引っ張られるように反対の駅のホームへと入って行った。

「正樹、頑張ってたね。試合観にいってよかった。楽しかったよ。」

「ああ、惜しかったな。もうちょっとだったんだけどな。最後の和明のシュート見たか、あれはすごかったな。美咲が応援に来てたからだな。」

正樹はからかうような視線を美咲に向けたが、いつもの反応は返ってこなかった。

「和ちゃん、何か元気なかったね。私、和ちゃんにこの間のテスト勉強のお礼言おうと思ったんだけど声かけられなかった。何か避けられてたのかな。」

「そんなわけないだろ。試合のことで緊張してたんじゃないか。それより、おまえ相田とえらく仲いいんだな。」

「ええ？　そんなことないよ。席がとなりでよく話しかけられるからかな、全然気を使わないでいい人なの。ただそれだけよ。」

「向こうはそう思ってないみたいだけど。」

「ええ？　何言ってるの、いいかげんにしてよ。」

「ほんとにおまえのその鈍さは筋金入りだな。いい加減どうにかしてほしいんだが・・。」

「正樹、私のことバカにしてるの？」

正樹は大げさにため息をついて睨んでいる美咲の顔を一笑した。

第十六話　美咲の夢

「正樹、見て！　さっきの数学の時間に返ってきたの。私こんな良い点とったの高校に入ってはじめてよ。」

美咲はこの間の平常考査のテストで７５点の答案がかえり、嬉しさのあまり正樹の教室まで押しかけていた。美咲が喜び勇んで入ってきたのに正樹は何事かと思ったが、事がわかると冷ややかに美咲に言った。

「何で俺に見せに来るんだよ。和明の所に行って礼を言うのが筋だろう。」

正樹の言葉に美咲は顔を曇らせて返事した。

「先に和ちゃんの所に行ったんだけど・・・。」

「？」

「たくさん男の子が和ちゃんの側にいたから声かけづらくて・・・。」

「ほんとに世話が焼けるな。ほら、一緒に来い。」

正樹は美咲を連れて少し離れた和明のクラスへと向かった。昼休みのせいか教室にいる生徒はまばらでその中に和明の姿はなかった。正樹は見知った男子生徒をつかまえ、和明の所在を聞いてみた。

「いつもの呼び出しじゃないか、そこの階段を下りていったから。」

体育館に向かう階段を指差して教えてくれた。正樹は美咲の困惑した顔を見て一瞬どうしようかと思ったが、結局そのまま階段を駆け下りて和明を探しに行った。

「ごめん、他に好きな人がいてるから、君の気持ちには応えられない。」

体育館の側の裏庭で和明と女子生徒が向かい合い、話をしていた。美咲はびっくりしてその場を離れようとしたが、正樹に腕をとられそのままその場に立ち尽くしていた。やがて女子生徒は立ち去り、和明が教室に戻りかけた時、正樹が声をかけた。

「和明、今ちょっといいか。美咲がおまえに話しがあるそうだ。」

和明はびっくりして二人の方に視線を向けた。美咲はさっきの二人の会話を思い出し、聞いてしまったことに罪悪感を感じていた。

「いつからそこに？」

「ご、ごめんなさい。立ち聞きするつもりはなかったんだけど・・」

「美咲、気にするな、いつものことだよ。それじゃ、俺は行くから。」

正樹はもと来た道を引き返していった。その場に二人だけが残り、気まずい空気が流れている。美咲はこんなとこまで連れてきた正樹に心の中で怒っていた。和明もばつが悪そうにあらぬ方向を向いている。

「あの、和ちゃん、もしかして怒ってる？」

「え？」

「あの、ううん、いいの。」

「何、話って。」

「あの、この間の試合惜しかったね。最後のロングシュートすごかった。観にいってとても楽しかった。」

「美咲の応援の声、聞こえたよ。ちゃんと届いた。ありがとう。」

和明はやわらかく微笑んで美咲を見つめていた。美咲も頬を赤くして笑った。

「和ちゃんのおかげで数学のテストうまくいったの。そのお礼が言いたくて。本当にありがとう。」

「いや、美咲が頑張ったからだよ。わからないとこあったらいつでも聞きにきて。いや、一緒に勉強しようか。水曜日は空いてないの？」

「い、いいよ、悪いし。和ちゃんの好きな人に一緒にいるところ見られたら、まずいじゃない。」

「別にまずくないよ。美咲、数学できないと困るだろう。理系に進むんだから。」

「へ？」

「違うのか？」

「何で理系に行くって知ってるの？」

「昔言ってたじゃないか。薬の研究して病気の人を助けるんだって。」

昔、祖父母がなくなった時、もっといい薬があれば助かったのではないかと子供心に思ったのだ。あの時、大きくなったら新しい薬を作るといった美咲の言葉を和明は覚えていた。

「覚えてたんだ、私が言ったこと。昔・・おばあちゃんがなくなった時、和ちゃんが言ってくれたでしょう。私が覚えていたらおじいちゃんもおばあちゃんもずっと覚えているって、私今も信じているのよ。」

「ああ、そうだな。今もきっと応援してくれてるよ。薬科に進むんだろう。しっかり数学もやっとかないとな。」

「そう、薬剤師の免許とって薬の研究者になろうと思ってる。和ちゃん、教えてくれるの？私のためにいいの？」

「ああ、一緒に勉強しよう。来年は三年だもんな、しっかりやらないと。」

和明は美咲の顔を優しい眼差しで見つめていた。薬科に進もうと具体的に考え始めたのは最近でまだ誰にも話していなかったのに、和明は昔自分が言ったことを覚えていた。昔から手を差し伸べてくれていた和明が、今でも変わらずにそこにいてくれる。美咲は嬉しさのあまり、目頭が熱くなって一筋の涙がほほを伝った。

「み、美咲、どうしたんだ？　なんで・・・。」

和明は急に泣き出した美咲に驚いて慌てた。いったいどうしたというんだ。

「ううん、なんでもない。和ちゃん、本当に昔と全然変わってないんだ。なんか、嬉しくて。もし、迷惑だったらすぐに言ってね。もし、和ちゃんに彼女ができたら私すぐに離れるから。」

「・・俺が好きなのは、・・」

和明は真剣な顔で美咲に何か言いかけたが、ちょうど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、水曜日の放課後に図書室でと慌てて約束を交わした二人はそれぞれの教室へと向かった。

第十七話　行き違う思い

「へぇ、やっと付き合うことになったのか。よかったな。」

正樹は顔色ひとつ変えずに嬉しそうに話す美咲に言ってのけた。

「はぁ？誰が付き合うって言ったのよ。一緒に水曜日の放課後、和ちゃんと勉強するって言ったのよ。」

「だから付き合うことになったんだろう、昼休みにやっとお互い気持ちを伝えたんじゃないのか？」

正樹は怪訝な顔で美咲の顔をのぞきこんだ。昼休みの後、和明と待ち合わせの約束をしたことが嬉しくて、授業そっちのけで舞い上がっていた。美咲は家に帰り、正樹の顔を見るなり和明と交わした約束の話しを聞かせていた。二人を引き合わせた正樹はこれでやっとくっつくだろうとたかをくくっていた。しかし、状況は正樹の想像を遥かに下回っている。お互いあれだけ思いあっているのに上手くいかないのはなぜなのか、見ていてじれったいのにも程がある。

「和ちゃん、他に好きな人がいてるのにわたしなんか相手にするわけないじゃない。」

「じゃあなんでわざわざ自分の時間削ってまでおまえに勉強教えるなんて言うんだよ。和明だってそんな暇なやつじゃないだろう。」

「・・幼馴染のよしみで成績の悪い私をかわいそうだと思ったのかもしれない。だいたい正樹に数学の問題聞いても自分で考えろって言って教えてくれないじゃない。悪いのは正樹よ。」

「はぁ？なんで話がそっちに行くんだよ。・・おまえと話してても埒があかない。」

正樹は美咲と言い合った後、部屋に戻り宿題をはじめた。正樹は高校に入ってからも地道に勉強を続け成績もかなり伸びてきていた。そろそろ将来のことも見据えて進学先も考えなければならない。長男である修司が父親と同じ医師を目指しているため、次男の正樹は別に好きなことをすればいいと堅苦しい束縛は何もなかった。けれども、父親の仕事のせいか病気で苦しんでいる人を助けてあげたいと最近切に思うようになっている。やはり自分も医学の道に進もうかとかなり真剣に考えるようになった。

「まあ、何にせよ、勉強するしかないか。」

正樹は難しい数学の参考書相手に夜更けまで机に向かっていた。

和明と一緒に勉強する水曜日がやってきた。美咲は一年の時から頑張ってきた弓道部をやめようと決めていた。自分なりに精一杯頑張ってきた。次は大学進学という大きな目標が定まったため、それに集中しようと決めたのだ。また、ずっとやめていたピアノを始めようかと思った。この間久しぶりに触れた鍵盤の感触がとても心地よかった。自分の演奏が好きだと言った和明の言葉がとても嬉しかったのだ。

図書館の奥の席に座り、美咲は今日習った数学の公式をノートに書き出していった。レベルの高い授業で、美咲は毎回当てられやしないかとひやひやしながら数学の授業を受けていた。難しい問題を前にして知らず知らず大きなため息が出てしまう。

「どうしたんだ？」

端正な顔の薄茶色の瞳が美咲の顔を覗き込んだ。

「う、うわぁ、びっくりした。突然現れないで。」

「約束してただろ、少し遅れたかな、ごめん。」

和明は美咲の隣のいすを引き、座った。すらりとした手足が美咲とは全然違うものだと距離が近いせいか妙に意識してしまう。和明はかばんから筆箱とノートを出し、ペンで何か書き付けていった。男の子の大きな節くれだった手に美咲の視線が集中した。

「？」

和明はノートに落としていた視線を美咲の方に向けていった。

「美咲、俺なんか変かな。」

美咲ははっとして、目を逸らした。

「ご、ごめん。和ちゃんの手、きれいだなと思って・・。」

「きれい？・・どこが・・」

和明は不思議そうな顔で手を上に掲げ開いてみた。別に普通の男の手だ。

「なんかペン持ってるところがきれい。」

「美咲、面白いこと言うな。きれいだなんてはじめて言われた。」

人気の少ない図書室で二人はひと時の楽しい時間を過ごしていた。美咲はわからない問題を指し示し、和明は難なく解いてわかりやすく説明していった。小学生の頃、夏休みの宿題をなかなか終わらせなかった美咲と正樹に親身に教えていた子供の頃の和明と重なってくる。そういえば昔から優等生だったなあと和明のことを思い出した。

「和ちゃん、本当に頭いいね。大人になったらどんなことしてるんだろうね。」

ふと、和明の将来はどうなのかと気になった。自分の夢は定まったが、和明の夢はなんだろうと興味がわいてきた。

「さあ、まだわからないな。やりたいことはたくさんあるけど、まだはっきり決められないんだ。」

和明は笑いながら、また違う問題を解くように美咲に提示してきた。放課後の図書室は静かで、話し声もほとんど聞こえない。あっという間に時間は過ぎて窓から西日が差し込んできた。

「そろそろ、帰ろうか。俺、ちょっと用事があって・・。美咲、悪いけど気をつけて帰れよ。」

一緒に帰れると思っていた美咲は少し落ち込んだが、自分のために時間を割いてくれた和明に礼をいい、図書室前で別れた。美咲は下校しようと人気のない階段を下りて、正門に続く廊下を進んでいった。その時、たまたま忘れ物に気づき、どうしようか一瞬悩んだが、やはり取りに行こうと自分の教室に向かって歩き出した。だれもい

ない教室は少し不気味で早く帰ろうと足は自然に早足になっていく。その時、ある教室のほうから話し声が聞こえてきた。美咲は無視して通り過ぎようとしたが、その一人が和明だとわかり美咲はびっくりして教室の中に視線を向けた。向かい合っているため、相手の女子生徒の顔はわからない。

「これだけ言っても聞いてくれないの、やっぱりあの子のことが好きなんでしょう。」

「ごめん、本当に今はだれとも付き合う気はないんだ。」

「じゃあ、なんであの子とは一緒にいてるの？この間も自転車で一緒に登校してたじゃない。」

「違う、そんなんじゃない。美咲は全然そんな関係じゃないんだ。」

和明のはっきりとした否定の声を聞き、美咲はショックで立ち尽くした。さっきまで一緒にいた楽しい時間で、もしかしたらとかすかな期待があったのが打ち砕かれた。美咲は気づかれないようにゆっくりとその場を離れ、家に帰った。

「でもこの間会った時もずっと沢中さんの方見てたでしょ。」

「君には関係のないことだ。だいたい美咲には別に好きな人がいてるし、どっちにしても君とは付き合えない。いいクラブの仲間のままやって行きたいんだ。ごめん。」

前からずっと言い寄られていたマネージャーの藤井理沙だった。勝気な性格でなんとしても和明の心を射止めようと頑張ってきたが、どうしても「うん」と言わない和明にしびれを切らし、呼び出した

のだ。理沙は泣きながら教室を出て行った。

美咲はとぼとぼと校門を潜り抜けたところで走ってきた理沙に出くわした。泣いていたのか真っ赤になった目を見開いて美咲の顔をじっと見ている。

「あなたのせいよ。あなたがいるから・・」

理沙は美咲にそういい捨てると走っていってしまった。美咲はいきなりのことで訳がわからず呆然としていた。教室で和明と話していたのはこの間ハンバーガー店で会ったマネージャーの人だったのかとなんとなくそう思った。私のせいとはどういうことなんだろう。いくら考えても答えは出てこなかった。

第十八話　相田の告白

美咲は弓道部に退部届けを出した。今まで頑張ってきたので多少の未練はあったが、自分にはあれが限界だったと思う。部長も仕方ないなと届けを受け取ってくれた。季節はもうすぐ夏を迎えようとしている。高校生活も半分過ぎようかという所だ。将来の目標が見えた美咲は後悔の残らないようとりあえず勉強を頑張ろうと気を引き締めた。和明と過ごす水曜日の放課後も慣れてきて、当たり前の日常になってきている。和明とのつかず離れずの距離が心地よくて、美咲はひとときの幸せを感じていた。

「和ちゃん、もうすぐ夏休みだね。どっか旅行とか行かないの？」

美咲はいつもと同じように水曜日の放課後和明と一緒に図書室で過ごしていた。和明は難しい数学の問題から目を離して美咲の方へ顔を向ける。

「イギリスへ父さんに会いに行ってくる。二週間ほど向こうにいる予定なんだけど・・。」

「わぁ、いいなあ。イギリスか、私も行ってみたいな。」

「美咲はどこか行かないのか？」

「夏休みは修ちゃんが帰ってくるの。もしかするとみんなでどこか行くかもしれないけど・・。」

「へぇ、修兄ちゃん帰ってくるのか。俺、長い間会ってないなぁ。」

「そうだろうね、私も会うの半年振りだもん。」

「まぁ、楽しい夏休みの前にテストがあるけどな。」

和明はいたずらそうな目をして笑った。美咲は和明の指導のおかげで数学嫌いがだいぶましになってきていた。今度のテストも以前に比べるとかなり期待できるだろう。和明はまたノートに視線を戻し問題を解き始める。二人が仲良くならんで座っているところに美咲と同じクラスの相田が入ってきた。二人を見るとびっくりした顔をして側によってきた。

「・・美咲ちゃん、いつから寺西と・・・。」

「ち、違うの。私数学苦手だから教えてもらってたの。」

「でもなんで寺西と・・・。おまえらいつからそんな・・・。」

「落ち着けよ。俺達、小学校の時からの付き合いなんだ。正樹と一緒のな。おまえが思ってるような仲じゃないよ。」

和明はなんの感情も含まれていないような冷めた口調で答えていた。相田はそれでも疑わしい目で二人を睨んでいた。

「なんで二人なんだよ。つきあってるんじゃないんなら別に俺が入っても良いよな。」

相田は機嫌の悪そうな声をあげて二人の向かいに腰を下ろした。きまずい空気が流れている。美咲の好きなのは相田だと勘違いしている和明は、自分が邪魔だと思いこみ急に用事を思い出したと席を立った。

「美咲、ごめん。今日は先に帰るよ。相田も数学は得意だから続きを教えてもらえばいい。それじゃ。」

和明は足早に図書室を後にした。美咲は和明の背中を目で追いかけたが、すぐに姿は扉の向こうに消えて行った。

「もしかして、俺邪魔したかな。」

「え、ううん、そんなことないよ。」

「・・・美咲ちゃん、もうわかってると思うけど・・、俺、君の事が好きなんだ。もしよければ付き合ってほしいんだけど。」

相田の突然の告白に美咲は呆然としていた。以前隣の席で気安く声をかけられ、仲良くなったクラスメートにそんな対象として見られていたことにひどく驚いた。

「ごめん、驚かしたかな。俺の気持ちはわかっていたと思うんだけど。・・できれば今返事がほしいんだが。」

いつもふざけたように話す相田が真剣に美咲の顔をじっと見つめている。目を逸らすことはできなかった。かたく結んでいた口を開いて声を出そうとしたがその前に相田にさえぎられた。

「ごめん、やっぱいい。答えはわかってるんだ。」

相田は肩を落として視線を天井へと向けた。以前に偶然町で出くわした正樹と話した会話が頭の中に浮かんでくる。

＊

「俺、おまえと双子の美咲ちゃんが好きなんだ。できたらおまえにも協力してほしいんだが・・・。」

「・・・。やめとけ、無駄だよ。美咲には和明がいてるから。あいつらの間には誰も入り込めない。」

「なんでそう言い切れるんだよ。別につきあってるわけじゃないんだろう。この間もそんなに仲がいいようには見えなかったぞ。」

「和明とは七歳の時からの付き合いなんだ。おまえに入り込める隙はないよ。」

「そんなことやってみないとわからないじゃないか。俺は真剣なんだ。そんな水をさすなよ。」

「おまえのためにいってるんだよ。・・十歳の時、美咲が階段から落ちかけた時があったんだが、和明が美咲をかばって大怪我した。美咲は気を失って覚えてないと思うが和明は大変な目にあっている。それでも美咲が無事でよかったと喜んでいたんだ。ずっと和明は美咲だけを見てきているんだ。それに、美咲も同じだよ。何でか今はお互い一線を引いているけど、あの二人の間に入る隙はないよ。あきらめたほうがいい。」

「あの寺西が・・・。」

「ああ、あいつも不器用だからな。いつも澄まして勉強も運動もそ

つなくこなすくせに、美咲のことになるとどうもだめらしい。・・・おまえが何が何でも美咲にって言うんなら、俺に止める権利はないが・・・。」

相田はつらそうな顔をして正樹の方を向いて言った。

「すぐには、あきらめられない。でも相手が寺西じゃ普通でも厳しいのにそんな昔のことまでもちだされちゃ・・・・。」

＊

「わかっていたんだ。でも君と寺西が一緒にいるところを見て我慢できなかった。」

「相田君・・、ごめんなさい。」

「寺西が好きなんだろう。なんで付き合わないの？」

「和ちゃんには好きな人がいてるのよ、わたしなんか眼中にないわ。それに、わたしじゃ役不足。とてもつりあわない。」

「そんなことない。美咲ちゃんはとても素敵な女の子だよ。この俺が好きになったんだから。そんなに卑下する必要なんかない。もっと素直になったらいいんだよ。寺西もきっと待ってるんじゃないか。」

「ううん、ほんとに違うのよ。」

「まあ、俺は美咲ちゃんの味方だからね。きみには振られたけど、ちゃんと気持ちも伝えたしこれで前に進めるよ。はっきり振ってくれてよかった。ありがとう。」

相田はそのまま席を立ち美咲から離れていった。美術室にいるだろう正樹を探して三階へと続く階段を上っていく。部屋の奥でキャンバスに向かっていた正樹に声をかけた。

「よう、正樹。おまえ、ほんとに美術部にいたんだな。・・・それ、何の絵だ？」

正樹はびっくりして振り返った。最近は顔も見ていない珍客に驚いていぶかしげな視線を送っている。

「何か用か？」

「別に、急におまえと話がしたくなってな。」

「・・・・」

二人は廊下に出た。とても静かで何の音も聞こえてこない。

「寺西と美咲ちゃんが図書室にいるところに出くわした。お前知ってたんだろう、前からなのか。」

「ああ、美咲が和明に勉強教えてもらうって喜んで話してた。」

「そうか・・。俺、告白したんだ。」

正樹は驚いて相田の顔を見た。相田は苦笑いしながら続けていった。

「でもあっさり振られたよ。・・ほんとに寺西には何やっても適わないな。バスケもそうだし俺の得意な数学でもあいつには勝てない。そうだ、この間のバレーボール大会でも負けちまった。あげくに本気になった女の子も寺西の大切な子だったんだ。あいつ、俺になんか恨みでもあんのかって言ってやりたいよ。」

「そうだな。お前の気持ちはわかるよ。でも和明も同じ様に思ってんじゃないか。ずっと見てきた子が他の奴に横取りされそうだったんだから。」

「まぁ、そうだな。でも、お前の言ったとおりだ。あの二人の仲は割かれないよ。二人でいるところ見てわかった。同じ空気がしている。ほんとにお似合いだと思ったよ。さっき図書室では意地悪したが、これからは応援してやりたい。美咲ちゃんのためにも・・・。」

「大丈夫か？」

「まぁ、ちょっとつらいけど仕方ないな。・・お前には一言言っとこうと思って。」

相田は正樹の邪魔をしたと一言わびると廊下を反対の方へと歩き出したが、振り返って言った。

「おまえ、絵の才能はないな。早めにやめたほうがいいんじゃないか。」

「・・大きなお世話だ。」

正樹は力なく去っていった相田の背中を消えるまで見送っていた。

第十九話　重なる思い

期末テストが終わり、夏休みを迎えるだけの一番楽しい時だった。美咲も和明のおかげでかなり成績が上がり、ほっと胸をなでおろした。正樹の成績もなかなかのものでいつ勉強しているのかと不思議に思う。高校入学時はほとんどおなじだったはずなのに・・・。廊下に張り出された上位成績者の名前を見てため息をついた。和明は相変わらず学年十位以内をキープしている。美咲とは雲泥の差だ。でも少しでも成績が上がったのは和明のおかげだと、何かお礼がしたいと美咲は考えていた。

「和明、相変わらずすごい成績だな。いったいどれだけ勉強してるんだよ。」

正樹は掲示板を見ながら横にいる和明に言った。

「別に普通だよ。でも美咲と勉強するようになって数学の成績ががったかな。教えているうちに自分の勉強にもなるから。」

「それじゃあ、俺にも教えてくれ。」

「ああ、いいよ。三人で水曜日、集まるか。」

「・・おまえ、ばかか。冗談だよ。それよりいいかげん告白したらどうだ。あの鈍い美咲にははっきり言わないと絶対伝わらないぞ。」

「いいんだ。いままで話もろくにしてなかったんだ。それに比べればすごい進展だ。昔みたいにそばにいられるだけで十分だよ。」

「おまえなぁ・・。他の奴にとられても知らないぞ。この間、相田が美咲に告白したそうだ。」

「えっ」

和明の顔色が変わり、唇をかたく結ぶ。正樹はその様子を見て大きくため息をついた。

「そんな顔をするなら、なんでさっさと自分の側につかまえて置かないんだよ。」

「・・・」

「安心しろ、相田は振られたそうだ。美咲はなにも言わないけど。」

和明は驚いた顔をして正樹に詰め寄った。

「美咲は相田のことが好きだったんじゃないのか？何で相田が振られるんだよ。」

「美咲もそうだけどおまえの思い込みも相当だな。なんでそんなこと思ってたのか知らんが、美咲が好きなのはお前だよ。それは間違いない。いいかげん素直になったらどうだ。」

和明は何か考えてじっと黙っていたが、おもむろに口を開き言った。

「・・告白するよ。美咲が好きなんだ。あたって砕けろだ。」

和明は覚悟を決めたのか笑って正樹の顔を見た。それを見た正樹も笑い返し、和明の肩を叩いた。

水曜日、いつものように美咲と和明は図書室で待ち合わせていた。美咲は今までのお礼にと和明にプレゼントを用意していたのだが、どうやって渡そうかと考えあぐねていた。話しかけても上の空の美咲に和明は苦笑して言った。

「美咲、今日はもう帰ろうか。あまりやる気なさそうだし・・・。」

正樹に告白すると言ったもののどう切り出したものか和明も悩んでいた。

二人は図書室を出て、ゆっくりと家に帰るべく駅のほうへと向かった。いつもは、たわいのない話をしながらすぐに駅に着いてしまうのに今日はふたりとも気もそぞろで落ち着かなかった。

美咲はしばらく黙って和明の後ろを歩いていたがおもむろに切り出した。

「和ちゃん、これ。」

美咲はおずおずと封筒を差し出した。和明は美咲と封筒を往復して見つめた後、問いかける。

「何？」

「この間のテスト、和ちゃんのおかげでかなり成績上がった。本当にありがとう。貴重な時間割いて本当にごめんなさい。これ、私からほんの気持ちだけ。和ちゃん、あの、好きな人誘って行ってきたらと思って・・・。」

「・・・・。」

封筒から中身を取り出すと、遊園地のチケットが二枚入っていた。。美咲は片思いをしている和明のためにいいきっかけになるかとデートの誘い用に用意したのだ。和明は一瞬目を見開いてチケットを見ていたが、その後ゆっくりと美咲に微笑んだ。

「いいのか、もらっても？」

「う、うん。うまくいくといいね。ううん、大丈夫よ。和ちゃんの誘いを断る女の子なんかいてない。」

美咲はうれしそうな顔をしている和明を見て胸が痛んだ。誰を誘うんだろう。いや、それは自分には関係ないことだ。美咲は胸のうちを隠して笑顔を向けた。その時、信じられない言葉を耳にしたのだ。

「いつにする？俺、なるべく早く行きたいんだけど・・・。」

「へ？」

「だから、いつ行く？美咲の都合のいい日にしよう。」

美咲はすぐに和明の言っている言葉の意味がわからなかった。和明の顔を見つめるばかりで声も出てこない。和明は少し困った顔をして美咲の右手を掴み引き寄せた。

「美咲と一緒に行きたい。俺の誘いはだれも断らないんだろう。・・・好きだ。・・美咲は俺と一緒に行くの嫌か？」

すぐ側で聞こえる和明の不安そうな声に美咲は夢の中にいるのかと錯覚した。和ちゃんが私を好き？美咲は驚いて和明の側を離れようとしたがつかんだ手を離そうとはしなかった。

「ち、違う。和ちゃん、好きな人がいてるって・・・。」

「そうだよ、美咲が好きだ。俺には美咲しかいてない。・・小さい頃、日本に来た時言葉もよくわからず心細かった俺を励ましてくれた。どれだけ心強かったか・・・。お前と正樹には本当に感謝してるんだ。」

「和ちゃん・・・。私も、私も和ちゃんが好き。ずっと、ずっと昔から・・・。」

二人は見つめあい、お互いの瞳に映っている姿の中に幼い頃の自分達も映し出した。離れていても思いは同じだったのだ。これからも共通の思い出を作り上げていける。美咲は掴んだ手に自分の手を重ねた。お互いのぬくもりが長かった離れていた時間を取り戻そうとしている。

「Ｉ ｌｏｖｅ ｙｏｕ． Ｔｈｅｒｅ ｗｉｌｌ ｂｅ ｉｔ ｍｕｃｈ ｔｏｇｅｔｈｅｒ ｆｒｏｍ ｎｏｗ ｏｎ． Ｙｏｕ ａｒｅ ｍｙ ｓｕｎ．」

（きみを愛してる。これからもずっと一緒にいよう。きみは僕の太陽だ。）

「？ ！ 和ちゃん、なんて言ったの？ 何で英語なの？」

和明は笑いながら、困惑している美咲に言った。

「これからもずっと一緒にいよう。おまえ、頼りないから俺がいないと困るだろ。」

「か、和ちゃん！？　」

和明はいつもと同じにいたずらそうな目を向けて美咲に言ったが、顔は少し赤らんでいた。

「Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｄｏｅｓ　ｎｏｔ　ｃｏｍｅ　ｏｕｔ　ｆｏｒ　ｊｏｙ　ｖｅｒｙ　ｍｕｃｈ．　Ｉｔ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｂｅ　ａ　ｄｒｅａｍ．　Ｉ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｒｅａｌｌｙ　ｄｒｅａｍ．（あんまり嬉しくて日本語が出てこない。夢みたいだ。本当に夢みたいだ。）」

「和ちゃん、日本語で話して。何言ってるのか早すぎて聞き取れない。」

「ははは、Ｉ　ａｍ　ｓｏｒｒｙ．ごめん、ごめん。つい嬉しくて・・。もう、昔のように俺から離れていくなよ。ていうか、離さない。美咲、Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ　ｓｏ　ｍｕｃｈ・・」

和明は愛しそうに美咲を目を細めて見つめている。

「僕はこんなに君を愛している。」

ゆっくり言った和明の最後の言葉に美咲は恥ずかしそうに顔を赤らめてうつむいた。夏の西日はゆっくりと傾き、いつまでも二人を照らしていた。

第二十話　素直じゃない

美咲は家に帰ると家族と顔をあわせるのも気恥ずかしくなり、急いで自分の部屋へと駆け込んだ。和明と話したさっきのことは本当に現実のことだったのかと思ってしまう。勉強を教えてくれたお礼にと悩んで選んだ遊園地のチケットが、まさか一枚自分のもとへ帰ってくるとは夢にも思っていなかった。美咲はかばんに直したチケットを出して眺めてみた。和明も嬉しそうに大事にかばんになおしていたなと思い返した。ずっと好きだった和明が同じように思ってくれていたことは、素直に嬉しい。でもだれからも一目置かれる和明の隣にいることはどうしても不釣合いのような気がしてきてこれでよかったのかと美咲は不安になっていた。和明は私なんかのどこに魅かれたんだろう。どこをどうとっても和明より劣る自分がひどく情けなく思われた。ついさっきまでは天にも昇るほど嬉しかったのに・・・。

和明は美咲と思いが通じたことに手放しで喜んでいた。後押ししてくれた正樹に一番に報告し、遊園地に行く約束まですべて話していた。正樹は和明のあまりの喜びようにあきれ返ったほどだ。和明は美咲を家まで送った後、駅に戻り、正樹がクラブから帰ってくるのをまちぶせていたのだ。

「正樹、聞いてくれ。美咲に告白したんだ。うまくいった、夢みたいだ。いや、現実だよな。」

「おまえ、いつからここにいるんだよ。メールで知らせてくれれば良いだろう。」

「いや、おまえのおかげだ。会って礼が言いたかったんだ。今度、

遊園地に行く約束までしたんだ。」

まるで子供の様に喜んでいる和明の姿に正樹はあきれ返った。

「おまえなぁ、嬉しいのはわかるけど・・、まぁ仕方ないか。よかったな。いつも澄ましてるおまえがこんなになるなんて、学校のみんなに見せてやりたいな。」

正樹は苦笑しながら和明の嬉しそうな顔を見やった。小さい頃、引っ越してきた和明に初めて会った時をふと思い出した。兄弟もいない和明が公園で正樹と美咲がじゃれあうように遊んでいた所にじっと木の陰から様子を伺っていたのだ。その姿に気づいた正樹は一緒に遊ぼうと声をかけた。しかし、和明はどうしようかとしり込みしていた。正樹の言葉の意味がわからなかったのだろう。それを見た美咲が和明の手を引っ張って笑いかけたのだ。「一緒にあそぼう。」と。その時の和明の嬉しそうな顔が正樹の脳裏に浮かんできた。

「一緒だな。」

「え？」

「あの時と一緒だ。初めて会った公園で一緒に遊んだ時と・・・。おまえ、すごいうれしそうだったよな。久しぶりに見たな、その顔。」

「いつのことだよ・・・。」

和明は正樹の言葉に恥ずかしくなったのか顔を背けてぶっきらぼうに言い放った。正樹はその様子を見て目を細めた。ずっと長い間思い合ってきた二人がやっと心を通い合わせたのだ。自分の大切な妹と親友の幸せが素直に嬉しかった。

正樹は家に帰ると喜んだ美咲の顔が見れると思っていたのに、ふさぎこんだ美咲の様子に驚いた。どうしたんだ？和明と対照的な雰囲気に思わず顔をしかめた。

「美咲、なんなんだよ、その顔。和明と遊園地に行く約束したんだろう。嬉しくないのか？」

美咲は、はっとした表情を浮かべ正樹の顔をじっと見ている。

「何で知ってるの？」

「和明は嬉しそうな顔で報告してくれた。やっと付き合うんだろう。嬉しくないのか？」

「・・・・」

「どうしたんだよ。やっと夢がかなったんだろう。何か不満でもあるのか。」

「違う。・・私やっぱり和ちゃんの側にいないほうが良いんじゃないかな。」

「はぁ？何言ってるんだ、そんなこと和明にいったらあいつ泣くぞ。」

「何か，自信なくなってきて。私なんかが和ちゃんの側にいたら昔と同じで足手まといになるだけなんじゃないかな。何かそんなの嫌

だと思って・・・。」

「美咲、和明のことが嫌いなのか？」

正樹は大きなため息をついて問いかける。それに対して美咲は大きく頭を振った。

「そんなわけない。和ちゃんも私のこと好きだと言ってくれて本当に嬉しかった。でも、和ちゃんにはもっとふさわしい子がいてる様な気がして・・・。私じゃ釣り合わないかも・・・。」

「そんなことお前が気に病むことじゃないだろう。ふさわしいかどうかなんか和明が決めることだ。和明、めちゃくちゃ喜んでたぞ。あいつを落ち込ませるようなこと言うな。素直になれよ。お前が笑ってるだけであいつは幸せなんだから。」

美咲のあまりに後ろ向きな発言にほとほとあきれ返った。ここまで屈折した感情はどこから来るのか想像もできない。やっと思いが通じて手放しで喜ぶ和明に対し、自信がなくすぐにでも逃げ出しそうな美咲に正樹は頭を抱えた。しかし、小さい頃からなんでも完璧にこなす幼馴染に気後れしていても仕方ないかとも思ってしまう。和明の喜んだ顔を思い浮かべて正樹は言った。

「とにかく、付き合うって決めたんなら相手のことも考えて頑張れ。」

「うん・・そうだね。ごめん、変なこと言った。ねぇ、正樹。正樹も一緒に遊園地行かない？人数多いほうが楽しいよ。」

「誰が行くか。初めてのデートだろ、二人で楽しんで来いよ。」

「そっか、デートだよね。・・・何着てこう・・・。」

美咲はやっと嬉しそうな顔を浮かべて自分の部屋に入り、約束の日はまだ大分先なのにクローゼットを開けて洋服を探し始めた。

第二十一話　初めてのデート

長い夏休みに入ってから三回目の日曜日、和明との遊園地へ行く約束の日だった。美咲は塾の夏季講習に申し込んでいたので毎日それに追われ、和明はバスケ部の練習に毎日励んでいた。二人ともやっと開放され待ちに待った日曜日だ。終業式から一度も顔をあわせていないのでほとんど三週間ぶりだった。付き合うといってもお互い忙しい状況はなにも変わらない。それでもたまに送られてくるメールの着信メロディを聞くと美咲は胸をときめかせていた。いま、どこにいるの？いま、なにしてるの？頭をよぎる焦燥感は会えない日が重なる度に美咲の心に迫ってきた。気持ちが通じることで相手への要求が当たり前になってしまうのかもしれない。和ちゃんは私に会えなくても平気なのかな、それともっと別の女の子が側に・・・。学校でしょっちゅう呼び出されていた和明が思い出される。この間はちあわせしてしまった時の和明の困った顔が浮かんできた。やめよう・・。せっかくのデートなのに・・。美咲は鏡に映る不安そうな自分の顔を見つめ、無理やり笑顔を作った。

「お、出かけるのか？・・ズボンで行くのか？スカートにしろよ。」

部屋から出てきた正樹とちょうど鉢合わせしてしまった。頭の上から順番に視線を下ろしている。美咲は露骨に嫌そうな返事を返した。

「なによ、ズボンのどこが悪いの？遊園地に行くのよ、スカートじゃ動きにくいじゃない。」

「あのなぁ、初めてのデートだろ。もっとおしゃれして行けよ。和明がっかりするぞ。」

「・・・・」

正樹の言葉に美咲は自分の服を見直した。なにを着ていくかさんざん悩んだわりにはいつもの普段着のジーパンにTシャツ姿になっていた。やっぱりだめか・・。

「これじゃだめかな？」

着替えようかと思ったがいまさら違う服も決められないだろう。待ち合わせの時間が迫っていた。正樹は仕方ないという顔をして急いで階段を駆け下りていった。しばらく美咲が呆然としていると母親の佐智子が顔を出した。

「美咲、デートならなんではやく言わないの、早く着替えるわよ。」

佐智子は急いで部屋に引き入れ、服を着替えさせた。頭もリボンを使い、器用に束ねてアップに仕上げた。あっという間に鏡の前には普段とは違う美咲が映し出されていた。

「これでよしと。和ちゃんと行くんでしょ？大丈夫と思うけど帰りの時間遅くなりそうなら、かならず連絡いれるのよ。」

佐智子は目を細めて美咲を見やった。正樹も部屋から出てきた美咲を見ると一瞬目を見開いて見ていたがすぐにいつもの口調で声をかけてきた。

「馬子にも衣装だな、頑張れよ」と。

待ち合わせは小学校の時に毎日待ち合わせていた公園の前だった。最後の待ち合わせから五年が経っていた。家の門をくぐり、坂道を

下って公園へと急いで向かった。公園の入り口近くに背の高い男の子がこっちのほうに向かって手を振っているのが見えた。和明だ。美咲は小走りに和明の側へと近づいていった。和明は茶色の綿パンをはき、細身のシャツをはおっただけの姿だったが最近は制服姿しか見てなかった美咲は整った和明の姿についみとれてしまった。反対に和明も美咲のいつもと違ういでたちに目を見開いて声を失っていた。リボンをあしらった女の子らしいブラウスに白いキュロットスカートが美咲によく映えている。いつも肩に下ろしている髪も上にまとめられてとても涼しげだ。和明は眩しそうに美咲に目を向けていた。

「和ちゃん、ごめん。待ったかな？」

「いや、俺も今来たとこだよ。…行こうか。」

二人は一瞬の後、ぎこちない会話を交わして駅へと向かって行った。

「美咲、何かいつもと違うから緊張するな。」

「おかしい？」

「いや、すごくかわいい。」

和明は視線をそらし少し頬を赤らめていた。それを見た美咲も胸の奥がかーっと熱くなってくるのを感じた。二人はぎこちなく視線を絡ませてお互いの瞳を覗き込んだ。

「和ちゃんもすごくかっこいいよ。いつの間にか背もすごく高くなったね。」

和明は美咲の言葉にはにかんで笑った。ぎこちなかった空気がやわらかくなっていく。二人の距離はだんだん近くなり、昔と同じ懐かしい雰囲気が心地よかった。

遊園地では二人ともはしゃいで遊びまわり、あっという間に時間が過ぎていく。お昼に二人でハンバーガーをかじりながら次はどの乗り物に乗るかと言い合いをしていた。その時、美咲は手前にあった飲み物を何気なく手にとって口をつけると、思ったのと違う味が口の中に広がっていく。オレンジジュースと思っていたのが、和明の頼んだアイスコーヒーだったのだ。美咲はびっくりしてカップを机に慌てて戻した。

「ご、ごめん。和ちゃんの間違って飲んじゃった。」

「いいよ、美咲のオレンジジュース返してもらうから。」

和明はなんでもないことのように反対のカップを手に取りストローに口をつける。美咲はあっけにとられてその様子に釘付けになった。間接キスだ・・・。美咲は見る見るうちに顔を赤くした。和明は美咲の顔を見て驚き自分の持っていたカップに視線を移してから慌てて言った。

「ごめん、嫌だったかな。新しいのもらってこようか？」

「う、ううん。違う、はじめに間違った私が悪いの。ごめん。」

慌てて謝る美咲を見て安心したのか和明はいたずらそうな眼差しを向けて美咲に言った。

「俺は得したかな。美咲と間接キス、ごちそうさま。」

「へ？・・・か、和ちゃん！？　」

美咲はますます顔を赤くして、笑い続けている和明の腕をひっぱった。和明はためらいなく自分のカップのコーヒーを飲み干すと、

「今更だよ。昔はよく一緒のコップでジュース飲んでただろう。・・・さぁ、次ジェットコースター行こう。」

和明はさらっとなんでもないふうに美咲の手をとり次の乗り物へと導いた。

二人は次から次へと乗り物に乗って、あっという間に夕方を迎えていた。楽しい時間はすぐに経ってしまう。最後に観覧車から降りると二人とも満足そうに帰りの道へと向かっていた。久しぶりに思い切り遊んだ気がする。何か帰るのが惜しくなってきた。昔も五時になると家に帰らなければいけないと名残惜しく公園から帰った時のことが思い出される。あの時は正樹も一緒だったけど・・。家に続く坂道を和明と別れた後、いつも正樹と競争するように駆け上がった。今はまだ八月のせいか日はまだ高い。和明も美咲とおなじことを思い出しているのかもしれない。ふと美咲は和明の顔を見上げた。和明は美咲の視線を感じたのか笑って見下ろした。

「楽しかったな。今度は正樹も誘って来ようか。」

「うん、そうだね。」

二人はどちらともなく手を絡め、ゆっくりと家路を進んだ。別れが近くなり美咲はとても寂しい気持ちが迫ってくる。家は近いがクラブに勉強にと全力投球の和明はとても忙しい。今度会えるのはいつ

になるかと美咲は思いをめぐらせていた。ついこの間までは顔もろくに合わせなかったのが今ではこんなに距離が近い。離れていた時はなんとも思っていなかったのが、今では離れてしまうのがとても寂しく思ってしまう。美咲はつないでいた手に思わず力が入っていた。和明は美咲の気持ちを知ってか知らずか声のトーンを少し落として話した。

「美咲、俺来週からイギリスへ行ってくる。三週間は向こうにいてるから今度会えるの、新学期になってしまう。・・・ごめんな。」

和明は申し訳なさそうにつぶやいた。美咲は驚いて顔を上げたが心配そうに見ている和明を見てあわてて返事した。

「うん、わかった。気をつけて行ってきてね。おみやげはチョコレートがいいな。」

「ああ、わかったよ。美咲も勉強頑張ってな。俺も頑張って勉強するよ。」

「和ちゃんは頑張らなくてもできるでしょ。・・・私本当に頑張らないとやばいけど。」

「また、一緒に勉強しよう。」

「うん、ありがとう。」

二人は仲良く連れ立って家の近くまで帰ってきていた。和明と別れる坂道までたどり着き、そこでいつもと同じように別れを告げようとしたその時、後ろからクラクションが響いてきた。青い車の中から下りてきたサングラスをかけた男性が振り返った二人の前に立っ

ている。和明は美咲を庇うように後ろへと追いやった。背の高い和明の背中から美咲は様子を伺うがサングラスのせいで顔がよく見えない。一体、誰だろう・・。二人は緊張したまま、言葉もなくその男性に視線を向けていた。一歩ずつ近づくその人がやっと声を発した。

「驚いたな、久しぶりに会ってこんな場面に遭遇するとは・・。」

第二十二話　真剣勝負

落ち着いた懐かしい声が美咲の耳に届いた。黒の綿パンにチェックの半そでのシャツをはおり、平均的な均整のとれた姿態にやわらかそうなこげ茶色の髪が額にかかっている。サングラスを外した瞳からやさしい色の光が見てとれた。

「修ちゃん！　どうしたの急に、びっくりした。」

「美咲、元気だったか？久しぶりだな。」

美咲は急いでその男性に駆け寄った。和明は驚いてその様子をただ眺めていた。はじめは誰だか全然わからなかったが、美咲の嬉しそうな顔と相手の顔を見比べているうちに和明はやっと人物を特定した。昔、美咲の家に遊びに行って、いつも離れたところからにこにこしながら見ていた年上の男の子の顔が浮かんできた。年の離れた兄の修司が帰省で我が家に帰ってきたのだ。修司は母親似の穏やかな性格で、勝気な正樹とは対照的に、昔はよくけんかしていた正樹と美咲の間にはいり、二人の仲裁をするやさしい兄だった。控えめな性格のせいか地味な印象は否めないが、美咲にとっては優しくて頭のいい自慢の兄だ。はじめ美咲を嬉しそうに見ていた修司は、視線を和明の方に向けて同じように微笑んだ。

「君は、和明だよな。大きくなったな・・前に会った時は、まだ小学生だったかな、見違えたよ。」

「修兄ちゃん、久しぶりです。お元気そうで・・・。」

「ははは、そんなに丁寧に挨拶しなくていいよ。でも本当に驚いた

な、あの和明がこんな男前になって美咲とまた一緒にいるなんて・・・。」

修司は和明のかしこまった挨拶にきょとんとした顔をしたがすぐに目を細めて二人を見やった。美咲と和明は二人で顔を見合わせ、頬を赤らめた。

「修ちゃん、今日帰ってくるって言ってた？私、何も聞いてなかったけど・・・。」

「いや、みんなを驚かせようと思って・・・。さぁ、我が家へ帰ろうか。和明、君も一緒に来ないか？もし、よければ、美咲との話でも聞かせてくれ。」

修司は遠慮して断ろうとした和明を強引に誘い、三人で沢中家へと向かった。坂道で和明と別れようとした美咲は一緒に家に帰れることになり、心の中で修司にお礼を言っていた。修司は二人を車に乗せて、ゆっくりと坂道を登っていった。空は茜色に染まり、修司は久しぶりに見る我が家のたたずまいにほっと息をついた。美咲は大好きな修司と和明の間に入り、玄関の扉に手をかけて修司に声をかけた。

「お母さん、きっと喜ぶよ。いつも修ちゃんいつ帰ってくるかって言ってたから。」

「そうか、びっくりするかな。」

「和ちゃんもいてるし、きっと大喜びね。」

美咲は嬉しそうに二人に微笑み、修司も笑って返した。右手に大き

なボストンバックを下げ、左手にはお土産でもはいっているのか紙袋の手がすぐにもちぎれそうだった。和明の手にも荷物が持たされていた。美咲は先に家に入り、奥の方へと進んでいった。しばらくすると美咲と共に驚いた顔をした母親の佐智子が現れた。

「ただいま、母さん。」

「修ちゃん、お帰り。・・もう、急に帰ってきて・・。さあ、早くあがって。あら、和ちゃんも・・どうぞ早く上がって。」

佐智子は修司を見て顔をほころばせ急いで荷物に手をかけたが、修司は重いからとその手を避けた。和明はせっかくの家族の団欒に水を差すようでやっぱり帰ればよかったと思っていたか ゛、美咲に手を引かれ部屋に足を踏み入れた。

「やっぱり家は落ち着くなあ、ほっとするよ。」

修司はコーヒーを飲みながらソファでくつろいでいた。美咲と和明もその横に並んで腰掛けている。半年ぶりに会う兄に話したいことはたくさんあったが、隣にいる和明の手前恥ずかしさから美咲は口をつぐんでいた。その時応接間の扉が開かれ、正樹が部屋に現れた。

「兄貴、おかえり。あれ、二人とも・・。」

部屋に修司だけだと思って入ってきた正樹は、美咲と和明の姿を捉え驚いて声をあげた。

「もう帰ってきてたのか・・。ええと・・。」

デート楽しかったかと聞こうとしたが修司の手前、遠慮していると

修司が軽く返した。

「ちょうど坂の下で会ったんだ。デートの帰りかな？美咲、水臭いぞ。いつから和明とその・・・。」

修司は楽しそうに二人の顔を見た。正樹もなんと答えようかと考えている美咲の顔を眺めている。美咲は困った顔をしてうつむいた。何も言わない美咲の代わりに正樹が口を開いた。

「ついこの間さ。二人とも長い片思いにやっと終止符を打ったんだ。じれったいったらなかったな。兄貴は全然家にいてないから何も知らないだろうけど・・・。」

「正樹、うるさい。」

「はぁ？」

「余計なこと言わないで」

「あのなぁ、俺がどんだけ気ぃつかって・・・。」

美咲は顔を赤くして正樹を睨んだ。隣で和明が苦笑している。修司は興味深そうに二人を見やった。

「へぇ。小学校の時からだもんな。昔、美咲が泣いて学校から帰ってきた時のこと思い出すなぁ。和明、必死で玄関先で美咲が出てくるの待ってたのに美咲、結局部屋から出なかっただろう。あの時、たしか俺高校から帰ってきたとこに和明がずっと前で待ってたんだよな。・・・たしかあれ以来だよな、顔合わすの。そうか、初恋が実ったんだなぁ。よかったな、二人とも。」

修司は感心するように一人うなづいていた。美咲と和明は修司の言葉に驚いて顔を見合わせ、うつむいた。

「兄貴、和明めちゃめちゃもてるんだぜ。成績はトップクラス、運動神経抜群でそのせいで俺の存在がかすんで見えるんだよ。」

「へぇ、そうなのか？」

「正樹、お前変なこと言うなよ。修兄ちゃんが誤解するだろう。」

和明はあわてて否定したが修司は興味深そうに正樹にその続きを促した。

「和明はスポーツなにやってるんだ？」

「バスケだよ、中学からずっと。」

「ふうん。・・・和明、俺と勝負しようか。」

「へ？」

「将棋だよ、昔教えてやっただろ。今の和明とやってみたくなった。昔は相手して負かしたらすごい悔しそうな顔してたよな。何度も何度も勝負して、懐かしいな。」

なにを急に言い出すのかと三人は顔を見合わせた。昔小学生の時に三人とも修司に将棋を教わった。三人とも夢中になりよく相手していたが和明がダントツに強かった。頭のきれる二人の勝負はどちらが勝つのか見物だと正樹は楽しそうに将棋盤を持ってきた。

〝測られている〟和明は口元は笑っているが目は真剣な修司の顔を見てそう思った。おかしなことになったと和明は面食らっていたが修司の「俺に負けるぐらいの奴に美咲はやれない」と言った言葉に乗せられ、真剣な面持ちで駒を進めることとなってしまった。

「昔はハンデつけてたけど今はもう必要ないよな。」

「俺将棋するのかなり久しぶりなんだけど勝てるかな・・。」

二人は笑いながら駒を並べた。穏やかだった部屋は急に緊張感が沸き、修司の急な提案に美咲も固唾をのんで見守っている。取っては取られるの繰り返しが続き、ほぼ互角の戦いが続いていた。いつのまにか時間もかなりたっていたのか、佐智子が部屋をのぞきにきたがそのまま出て行ってしまった。和明は真剣な表情で盤の隅々まで視線を走らせている。ふと心配そうな美咲の方に目を向けるとわずかに口角を上げ微笑んだ。その時なぜか美咲は和明の勝利を確信した。その後も黙々と二人とも駒を進めていたが、一見修司の方が優勢かと思われていたのに和明の一手でがらっと形勢が逆転してしまった。修司は余裕で指していた状態から一転し、驚いて和明の顔を見た。先ほどと何ら変わらない状態で盤の上に視線を落としている和明がいる。修司はあわてて盤の上に目を走らせたが、このまま続けても結果が変わらないことに気づき大きなため息を落とした。

「・・・俺の負けだ。お前、強くなったなぁ。」

修司は感心して嬉しそうに笑っている和明の顔を眺めていた。

第二十三話　秋の訪れ

美咲は夕食の用意の為、部屋を出て行った。残された三人はそれぞれ考えることがあるのか静かだった。空調の音が少し耳障りだ。

「美咲はきれいになったな・・。半年会わなかっただけでも違うな。」

「まあ、俺の妹なんだからそれなりにね。」

「お前、相変わらずだな。まあ、俺の妹でもあるけど・・。」

修司は苦笑しながら和明に視線を向けた。

「和明なら大丈夫だと思うけど、泣かすなよ。」

和明は修司の目を見て頷いた。

四人は夕食の後、庭で花火をすることにした。小学生の時以来の花火だった。小さい頃はしゃいで花火をしていた自分たちの姿と重なってくる。正樹が振り回した花火から怖がって逃げていた美咲をかばっていた和明がいた。美咲は久しぶりに童心に還り楽しんでいた。暗闇の中で花火の華やかな音が響き、光があたりを照らした。次々と新しい花火に火をつけていった。美咲は最後に線香花火に火をつけて座り込んだ。その隣に和明もかがんだ。正樹と修司は顔を見合わせゆっくりと二人から離れて家の中へと戻っていった。

「和ちゃん、きれいだね。」

「・・ああ、きれいだな。」

二人は静かに花火を見つめていた。朝から遊園地に行き、帰ってきて兄と久し振りに顔を会わせて、今はもう夜の九時前。一日の大半を和明と一緒に過ごすことができた。とても幸せな一日だった。ずっとこんな毎日が続けばいいのにと思ってしまう。

「美咲、今日は本当に楽しかったよ。ありがとう。」

和明はやわらかく微笑んで美咲のほうに笑顔を向けた。線香花火の明かりの中で和明の端正な顔が浮かび上がっている。美咲は急に恥ずかしくなり顔を俯かせた。

「ううん、私もすごく楽しかった。」

「・・・なんかほんとに夢みたいだ。美咲のそばで花火してるなんて・・・。俺、ずっと嫌われてると思ってたから。」

「え?」美咲はびっくりした顔で聞き返した。

「小学校の六年ぐらいから俺のこと避けてただろう?話しかけてもすぐ逃げるし・・・。こんな風にまた話せるようになるとは思わなかった。」

「・・・・・」

線香花火がゆっくりと燃え尽き、あたりは家からもれてくる明かりだけでやっと近くのお互いの顔がわかる程度だった。

「和ちゃん、ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

「謝ることないよ。俺、本当に嬉しいんだ。美咲が昔と同じようにそばにいてくれるんだから。なにか少しでも気になることがあったら言ってほしい。美咲には嫌われたくないんだ。」

「和ちゃん、私嫌ったりしないよ。ずっと好きだったんだから。小学校の時はクラスの子にからかわれて恥ずかしかったから・・。高校も和ちゃんと同じ所に行きたくて猛勉強したの。本当よ。ずっと何年も和ちゃんだけを見てきたの。私・・私ね・・。」

「美咲、これからはずっと一緒にいられるよ。いままで離れてた分、取り返そうな。」

和明は愛しそうな目で美咲を見つめ続けていた。

八月の夏休みはあっという間に過ぎて行った。和明はイギリスへと向かい、美咲は塾の講習に追われた。帰省していた修司もアルバイトなどで家にはほとんどいずに美咲たちの夏休みが終わる頃、大学のある自分の寮へと戻って行った。別れ際、修司は美咲に「なにがあっても和明を信じてやれ。」と言い残し、坂道をゆっくりと下りながら道の向こうへと消えていった。修司にも何か思うことがあったのかもしれない。優しい兄に会えるのは今度はいつになるのだろうかと美咲は思った。

新学期が始まった。二年生も中盤に差し掛かりだんだん来年の進路のクラス別の話が出だした。進学校だけに高校生活をゆっくり楽しめるのも二年生の間だけになるだろう。美咲は勉強も頑張り、ピアノの練習ももう少し時間を増やそうと色々考えていた。自分は行き

たい大学の学部も決まっているが和明はどうするのかとふと気になった。まあ、今日の帰りにでも聞けばいいかと次の時間の予習のため、英語の辞書をめくり始めた。その時、久子が美咲のそばに近づいて話しかけた。

「美咲、聞いたよ。寺西君と一緒に登校してきたんてしょ。もしかして付き合ってるの？」

「ごめん、久子にはもっと早く報告すればよかったんだけど、なんか言いにくくて・・・。」

「ううん、いいよ。よかったね。私、バレーボールの試合の時からわかってたから。寺西君、美咲のほうばっかり見てたからすぐにわかったよ。でも、美咲も好きだったとは・・・。早く話してくれればよかったのに・・・。」

「うん、ごめん。久子もうまくいけばいいのにね。」

「私？私はいいよ、・・でも、正樹君、進路文系かな、それとも理系？」

「うん？どうかな、聞いたことないけど・・・。でも私と違って数学の成績いいからな、理系かもね。帰ったら聞いてみるわ。」

「ええ？いいよ、そんな、わかったら教えてくれる？」

「了解。」

秋の風が吹き始めていた。いつもと変わらない毎日なのにふとこの何気ない日々がとても幸せなのかもしれない。砂時計の砂が落ち続

けるように音もなく時間が過ぎて行ってしまう。あの時こうすればよかったと後悔だけはしたくない。美咲はいまやれることを精一杯頑張ろうと自分にはっぱをかけていた。あいかわらず水曜日には和明が美咲のために勉強を手伝っていた。自分のやりたいこともあるだろうにと美咲は最近恐縮していた。和明の足手まといにはなりたくない。和明のために自分はなにかしてあげられることがあるだろうかと考えるようになっていた。

第二十四話　秘密

１１月。秋も深まり、紅葉がとても美しかった。木の葉が風が吹くたびに落ちていく。美咲と和明はいつもと同じように、つかず離れずの距離を保ちながらゆっくりと学校からの帰り道を進んでいた。

「和ちゃん、来年のクラスどうするの？」

「え、ああ、理系クラスに希望してるよ。」

「そうなんだ、よかった。また同じクラスになるかもしれないね。」

「・・・・・・。」

「和ちゃん？」

和明はどこか上の空で美咲の話もあまり耳にはいっていないようだった。いつも笑って美咲の話を相槌を打ちながら聞いてくれるのだが、今日は意識がよそに向かっているようだ。

「和ちゃん、どうしたの？」

「え？」

「何か今日はいつもと違う。・・元気ないみたい。」

和明は、はっとした顔をして美咲の方へ視線を向けた。

「ごめん、何かぼうっとして・・。ええと何の話だっけ。」

「来年同じクラスになったらいいなって言ったの。」

美咲は少し口を尖らせてもう一度同じセリフを言った。和明はその顔を見て、やっといつもと同じ笑顔で美咲の頭をくしゃっと触った。

「・・・そうだな。一緒のクラスだと美咲のバレーボールの試合も堂々と応援できる。」

和明は悪戯そうな瞳を美咲に向けた。

「バレーボール？・・・それって・・・。」

和明はこの間のクラス対抗のバレーボール大会を思い出した。必死にボールを追いかけていた美咲に声をかけてやりたかったが、クラスも違いその時は二人ともとても遠い関係だった。でもあの時転んだおかげで今の二人がいるのだ。

「美咲、あのさ・・・。」

「ん？」

「・・・いや、何でもない。美咲、明日の数学のテスト頑張れよ。微積はずっと難しくなってくから。」

「・・・わかった。和ちゃん、今度の土曜日、空いてない？見たい映画があるんだけど・・・。」

「ごめん、土曜はちょっと・・・。」

「そっか、いいの。和ちゃんも忙しいもんね。久子、誘ってみるから。」

二人はいつもと同じ様に坂道のところで別れた。和明は美咲と別れた後、難しい顔をして足取り重く自宅へと続く道を進んだ。

＊

「寺西君、どうするの？沢中さんにはもう話したの？」

和明はバスケ部の練習の後、マネージャーの藤井理沙に引き留められた。

「・・いや。」

「どうして？もう、時間も少ないんじゃない。」

「・・・・。」

「寺西君が言えないんなら私から話すわ。彼女なのに、寺西君がこんなに悩んでるのに何も知らないなんて許せない。」

「やめてくれ、まだ決まったわけじゃない。美咲には俺から話す。第一君には関係ないだろう。余計なことしないでくれ。」

「関係ないことないわ。私にとっても一大事よ。言ったでしょ、あきらめられないって。沢中さんのこと寺西君がどれだけ好きか知ってる。私もずっとあなただけを見てきたんだもの。ても、わたしだ

けが知ってて彼女が知らないのはフェアじゃないわ。」

「・・・・・。」

「…寺西君、お願いがあるの。一度だけ、一度だけでいいから私に付き合って、それできれいさっぱりあきらめるよう努力するから。もう二度と付きまとったりしないから、お願い。」

「藤井さん、何度も言ってるだろう。美咲に後ろめたいことはしたくないんだ。」

「お願いよ。少しでいいから思い出がほしいの。今度の土曜日、私に付き合って。どうしてもいやっていうなら、沢中さんに全部話すわ。」

「・・・わかった。」

＊

「久子、今度の土曜、映画見に行かない？」

美咲は週末の土曜日に久子と今話題になっている映画を観にいこうと誘った。

「いいけど。寺西君と一緒に行かないの？」

「・・振られちゃった。なんか用事があるみたいで。」

「ふうん、それじゃ何時にする？終わったら買物にも付き合ってね。」

「いいよ。駅前に１０時にしようか？」

「わかった。」

二人が放課後教室で約束を交わしているところへ理沙が現れた。教室の中をぐるりと見回している。美咲は以前図書室から帰る時に投げられた言葉を思い出し、顔を固くした。なるべく目を合わせないでおこうとしたのに理沙は美咲の姿を捕らえるとまっすぐに向かってきた。久子も自分たちに何の用だろうと訝しげな顔をしている。

「沢中さん、相田君知らない？練習に来ないから探しに来たんだけど・・・。」

「え、ううん、知らない。鞄は残ってるからまだ帰ってはいないと思うけど・・・。」

「そう、ありがとう。・・・ところで沢中さん、正樹君はまだ美術部にいてるの？この間の試合ではとても助かったわ。あれだけできるのになんでバスケ部に入らなかったの？彼ならすぐレギュラーに選ばれるでしょうに。」

「ええと、中学では和ちゃ、ううん寺西君と一緒にバスケやってたんだけど急に美術部に入るって言い出して・・・。絵、下手くそなんだけど。」

「ふうん、二人とも仲良さそうだったもんね。沢中さんも寺西君とずっと一緒なの？」

「う、うん。家が近所で幼馴染なの。」

「へぇ、いいわね。幼馴染からそのまま恋人に昇格したのね。」

理沙の険のある言葉に美咲は早くその場を離れたかった。久子も何か感じ取ったのか剣呑な雰囲気が漂っている。

「さっきの話、聞こえたんだけど。週末映画観に行くの？いいわね。・・それじゃ、ごめんなさい。お邪魔して、相田君見かけたらすぐに練習に来るように伝えてくれる？」

理沙は鋭い視線を美咲に向けると踵を返し、教室を出て行った。

「なによ、あれ。言いたいことだけ言って。彼女、バスケ部のマネージャーの・・。」

「藤井さん。きれいな人だね。」

「まぁ、美人だけど、性格きつそう。美咲、顔見知りだったの？」

「ううん、久子と同程度だと思うけど。」

「なんか、美咲のことにらんでたね。なんかあったの？」

「うん、まあ・・。」

美咲は以前、理沙が和明に告白していた現場に出くわしたことを久子に話した。

「へぇ、そうなんだ。それでね・・納得。でも、気にすることないわよ。寺西君が選んだのは美咲なんだもん。堂々としてればいいわ。でも、人気のありすぎる彼の彼女って大変ね。あんな目で見られるんじゃたまらないわ。」

「久子、そんなこと言わないで。気にしてるんだから。」

「ごめん、ごめん。失言だったわ。・・さてと、そろそろ帰ろうよ。」

二人は教室を揃って出て、学校を後にした。美咲はさっきの理沙の表情が頭から離れず、嫌な予感がしていたがそれを振り払うように無理やり笑顔を浮かべ久子と話を続けていた。

第二十五話　土曜日の街角で

土曜日、美咲は久子と待ち合せをしている駅へと向かっていた。朝、台所で顔を合わせた正樹も一緒に行かないかと誘ったが、用事があると断られた。今日はとてもいい天気だ。秋も深まり、冬がもうそこまで来ているせいか風が冷たく感じられる。もう少し厚着をしてくればよかったと美咲は薄手のコートの襟を立てた。来年の今頃は受験真っ只中だろうなと思う。友達と気楽に映画にもきっと行けないに違いない。来年も和明は自分の隣に居てるんだろうか。美咲は漠然とした自分の未来に和明の姿はないんじゃないかとふと思った。美咲に向けられる特別な優しい眼差しは永遠のものではないのかもしれない。美咲はなぜかさびしい思いに囚われていた。

「美咲、おはよう。早く行こう。」

「おはよう、久子。正樹も誘ってみたんだけど用事があるらしくて・・。」

「そうなんだ。・・美咲、私に気を使わなくていいよ。この間ね、私、正樹君に告白したの。クラブの帰りに一緒になって・・。でも、振られちゃった。誰とも今は付き合う気ないって。でも、友達ならって言ってくれたの。美咲の友達は俺にとっても友達だって。私それでも嬉しくて。美咲のおかげね。」

「久子・・。」

「だから、私もあきらめずに頑張るわ。正樹君、医大に行くって言ってた。私も一緒の道に進もうと思うの。動機はかなり不純だけど、頑張る価値はあると思わない？」

「すごいね、久子。そこまで考えてるんだ。正樹も本当に馬鹿ね、久子がここまで思ってるのに断るなんて・・・。」

「美咲、お願い。正樹君には言わないでね。きっと迷惑だと思うし、私もどこまでできるのか全然わからない。お願いだから、絶対言わないでね。」

「わかった。私は久子の味方よ。いつか正樹に久子の思いが伝わるように祈ってる。今の話は聞かなかったことにするわ。」

「ありがとう。」

久子は安心した顔で美咲に微笑んでみせた。

「でも、知らなかった。正樹が医者になるなんて、修ちゃんと同じ道に進むとは思わなかったな。」

「お父さんの跡を継ぐんじゃないの?」

「まあ、どっちが継いでもいいんだろうけど。」

二人は取り留めのないことを話しながら映画館への道を進んでいった。週末の土曜日のせいか街は多くの人でごった返している。行き交う人々の間を二人もゆっくりと進んでいた。もう少しで映画館という交差点の信号待ちをしていた時、美咲は何気なく通りの向こうにある喫茶店の方に視線を向けた。こちらに背中を向けている男性の後姿がなぜか気になった。するとその向こうから見知ったきれいな顔の女性がこちらの方を指差している。美咲はとても嫌な予感がするのを感じていた。それは一瞬のことだったに違いない。でもそ

の男性が後ろを振り向く間の時間がとても長い間に思われた。藤井理沙は和明の腕に自分の腕を絡め、美咲の方に鋭い視線を送っていた。振り返った和明の瞳が、信号待ちをしている美咲の姿を捉えると大きく見開いた。二人の視線が交わり、和明の困惑した顔が美咲の瞳に映し出された。

「土曜日、空いてない？」

「ごめん、用事があるんだ。」

この間和明と交わした会話が頭の中を過ぎて行った。用事ってこのことだったんだ。美咲はなぜかとても冷静な自分に驚いた。やっぱりそうなんだ。和明にとって自分はふさわしくない。あんなにお似合いの人がいてるじゃない。二人は固まったままで交差点をはさんで立っていた。信号がようやく青に変わり、周りの人は次々と渡り始めた。なかなか動こうとしない美咲に久子は訝しげに声をかけた。

「美咲、どうしたの？」

「ごめん、用事思い出した。映画はまた今度にして。」

美咲は急に踵を返し、もと来た道を走って戻って行った。

「美咲、どうしたの！？」

久子は驚いて美咲の後を追おうとしたがすぐに人の波に紛れてしまい、姿は見えなくなっていた。

和明は信号が変わるとすぐに美咲のそばへ行こうとしたが理沙に腕を取られ、動けなかった。
そのわずかな間にも美咲の姿は見えなくなっていた。

「寺西君、待って！　どこに行くの？」

「離してくれ。美咲のところへ行くんだ。」

「だめよ。今日は私に付き合ってくれる約束でしょ。」

「藤井さん、ごめん。やっぱりできない。すまない。」

和明は理沙の腕を振り払い、点滅している信号を渡って美咲の姿を追いかけて行った。

美咲はそのまま家に戻っていた。すぐに帰ってきた美咲に母親は驚いていたが特別に声をかけるでもなく昼を過ぎる頃に台所に昼食の用意をした後、声をかけると外出していった。誰もいない家の自室にこもり、ベットに突っ伏している。驚いた顔をした和明の姿が目に浮かんでくる。どうして？何故藤井さんと一緒なの？和明に聞きたいことがぐるぐると回っている。本当は和明の好きなのは理沙だったのかとそこまで思考は及んでいた。頬に涙が伝っていった。自分はこんなに和明のことが好きだったのかと思い知った。何か訳があるのかもしれない。美咲はどうしようもない思いに苛まれていた。

家の呼び出し音が鳴り響いた。直感で和明だと思ったがとても合わせられる顔をしていない。そのままやり過ごそうと布団を頭までかぶったが、呼び出しは長く続いた。やっと諦めたというように家に静けさが戻った。きっと携帯にも連絡が来ているだろう。電源を落

としている携帯は静かだったが・・・。

いつのまにか陽も傾き、扉をノックする音に眼が覚めた。美咲は徐に立ち上がり、扉を開けると驚いた顔をした正樹と眼が合った。

「おまえ、どうしたんだ、その顔。」

「え？」

「泣いてたのか？」

「・・・・・」

「何かあったのか？」

「・・正樹、誰か好きな人いてるの？」

「はぁ？」

「ねぇ、片思いでもしてるの？なんで、なんで・・・。」

「美咲、和明となんかあったのか？どうしたんだよ。」

「なにもないよ。どうして久子じゃだめなの？なにが気に入らないの？」

「違うよ。気にいるとか気に入らないとかそんなんじゃない。今の俺じゃ彼女の期待に答えてあげられない。それだけだよ。彼女が本気なのはよくわかった。それなら俺も同じように返さないといけないだろう。でも、できない。だから断ったんだ。」

「でも、あんなに正樹のこと思ってるのに・・。」

「わかってる。でも、今の俺じゃダメなんだ。美咲、お前の親友なのにな、ごめん。」

「・・正樹。ううん、私も言いすぎた。ごめん。」

「それより、お前こそ何なんだよ。映画観に行ったんじゃないのか？」

「ううん、帰ってきちゃった。私、今最悪なの。ほっといて。」

「ばか、ほっとけるか。俺にも言えないことなのか？どうせ和明のことで勝手に誤解して落ち込んでんだろう。話してみろよ。」

美咲は正樹の優しい言葉にほだされ、今日あったことを打ち明けた。

「藤井さんか、彼女かなり和明にご執心だったからなぁ。でも、なにか訳があるんじゃないか。あいつが二股かけてるとは絶対思えないし。」

「そんなのわからないよ。とても仲良さそうに腕組んでたし・・。」

「はは、お前、嫉妬してるのか。そのセリフ直接和明に聞かせてやれよ。あいつ飛び上がって喜ぶぞ。」

「何言ってるのよ。私がこんなに悩んでるのに。正樹なんかに話すんじゃなかった。」

「わかったよ。大丈夫だ。和明にはお前しかいてないよ。何か訳があるんだろう。早く確かめて仲直りするんだな。」

美咲は仕方なく頷いた。

第二十六話　真相

月曜の朝、気の重い美咲はいつもより早く家を出て学校へと向かった。和明と顔を合わすのがかなりきまずい。正樹の呼び止める声も無視してあわてて家を出てきた。校舎内は人もまだまばらで、運動クラブの朝連の声がわずかに聞こえてくる。美咲は上靴に履き替えようと下駄箱を開けたときに声をかけられた。

「おはよう、沢中さん。今日は早いのね。」

下駄箱の横にさわやかそうな笑顔で理沙が立っていた。美咲は一瞬驚いたがすぐに眼をそらし、挨拶した。

「・・おはよう、藤井さん。私に何か用?」

「別に用ってわけじゃないけど・・。土曜日は偶然ねぇ、あんなとこで会うなんて思わなかった。沢中さん、急に走ってどこか行っちゃうからびっくりしたわ。寺西くんも驚いてたわよ。」

「・・・・・」

「もう寺西君から話しは聞いたの?」

「え?」

「・・やだ、まだ聞いてないの?」

「何の事?」

「…。私、寺西君のことが好きなの。ずっと一年の時から彼だけを見てきたの。私も含めて振られた女の子はかなりいてるわ。それが急にあなたが現れて彼をさらっていった。」

「そんな・・、私は別に。」

「そう、幼馴染っていいわね。ちょっと早くに知り合ったというだけで特別になれるんだから。でも、土曜日は私たちデートだったの。沢中さん、まだなんにも知らないみたいだから、私の方があなたより彼に近いのかもしれないわね。」

「一体、何の事言ってるの？」

「寺西君に聞いてみれば？それじゃ。」

理沙は口元だけ笑みをうかべ、冷たく言い放つと美咲から離れていった。

理沙は一体何の事を言っているのだろう。和明は何か大事なことを隠しているのかもしれない。美咲は急に不安になってすぐにでも和明のところへ確かめに行きたくなっていた。日曜日も和明が家に来るかもしれないと、美咲は朝早くから外出し避けていたのだ。美咲は鞄を教室に置くとすぐに校門のところまで戻って、和明が登校してくるのを待っていた。

＊

「和明・・・。」

日曜の朝、扉を開けると沈み込んだ瞳の和明の顔が飛び込んできた。正樹はなにか言おうと口を開きかけたが先に和明の方が言葉を発した。

「美咲、いてるかな。話があるんだ。」

「まぁ、上がれよ。」

「ああ・・。」

正樹は和明を自分の自室へと促した。和明が美咲はどうしたのかと尋ねると苦笑しながら首を横に振っている。和明はますます落胆したように肩を落とした。

自室のテーブルに向かい合って座り、うつむいた和明に声をかけた。

「お前なぁ、どうせならうまくやれよ。」

「え？」

「二股かけるんなら、バレないようにやれってことだよ。」

和明は驚いた顔で正樹に言い返した。

「違う！　二股なんかかけてない。違うんだ！　」

和明の必至の様子を黙って見ていた正樹は仕方ないというように大きな溜息を落とした。

「美咲、泣いてたぞ。お前がそんなやつじゃないことはわかってるさ。けど、美咲を泣かす奴はいくらお前でも許せない。」

「正樹・・・。」

静かな声で正樹は和明を睨みつける。和明は思わず息を呑んだ。

「・・けど、お前は俺の親友だ。なにか訳があるんだろう？」

「・・・・・」

和明は正樹の顔をまっすぐに見ていたがゆっくりと視線を外し、窓の方に向けると唇を噛んだ。交差点を挟んで見た美咲の顔が忘れられない。驚いた顔がすぐに泣きそうな顔に変わっていた。全部自分のせいで・・・。あんな顔をさせるようなことをしてしまったんた゛。

「・・俺は、美咲が好きなんだ。ただ、昔みたいにそばにいられるだけでもよかったんだ。でも、それも・・・。」

「和明？」

「藤井さんのことは誤解だ。全然やましいことなんかないよ。でも、美咲には・・・・。」

正樹は和明の憔悴しきった様子に顔をしかめた。何があったのかと問いただす。和明の重い口を開いて言った内容は正樹の想像をはるかに超えていた。

「アメリカへ？」

「ああ、来年の一月から。」

「なんでまた急に・・・。」

「父さんの転勤が正式に決まったんだ。それに、母さんもニューヨークの会社に移ることになって・・・。俺もアメリカの高校に転入するようにと・・・。」

「お前、アメリカへ行くのか？」

「いや、俺は日本に残ると言ったんだ。でも、母さんがどうしても許してくれなくて・・・。」

「和明、そんな、お前・・・・。」

「まだ時間があるし、なんとかしようと思ってたんだ。それが・・・。」

「それが？」

「母さんが勝手に担任に話したみたいで、この間職員室に呼び出された。丁度その話をしている時に藤井さんに聞かれてしまって・・・。」

和明は苦い顔をして俯いた。正樹もあまりのことに言葉もなかった。ずっと一緒だった和明が離れていく。自分でもこれだけショックなのに美咲が聞けば・・・・。

「約束したんだ。これからはずっと美咲のそばにいるって、でも・・・・。」

アメリカは遠い。すぐに会いに行ける距離じゃない。やっと思いが通じ合った二人にまた大きな隔たりが生じようとしていた。

＊

和明はいつもと同じようにクラブの帰り、誰もいないはずの自宅へと向かっていた。父親はイギリスで単身赴任、母親も仕事で帰りが遅い。兄弟のいない和明はいつも一人で夕食をとるのが日常だった。今日もいつもと同じように家に入ろうとすると奥から明かりが洩れてくる。

扉の開く音を聞きつけて和明の母親が玄関先に現れた。

「ｋａｚｕａｋｉ、ｗｅｌｃｏｍｅ　ｈｏｍｅ．（和明、お帰り）」

「ｍｏｔｈｅｒ，ｈｏｗ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｉｔ？Ｉｓ　ｓｏ　ｅａｒｌｙ　ｉｔ　ｉｓ　ｕｎｕｓｕａｌ．（母さん、どうしたの？こんなに早いの珍しいね。」

和明は家の中では昔のまま英語で会話することが多かった。小さい頃アメリカで育ったおかげで英語が自然と出てくる。

「和明、やっと家族そろって生活できるわよ。」

「え？」

「アメリカへ行きましょう。お父さん、アメリカに転勤が決まったのよ。私もニューヨークの出版社に行けるようになったの。小さい頃あなたが育った町に家を買うことにしたから。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。母さん、そんな話聞いてない。」

「あら、あなたアメリカの大学に行きたいって言ってたじゃない。向こうの大学に進学するのなら高校から向こうに行ってた方が有利でしょう。」

「それは・・・。」

「和明、アメリカへ行くの嫌なの？この間は外国の学校へ行ってもいいって言ってたでしょう。きっとあなたも喜ぶだろうと思って私急いで帰ってきたのに・・。」」

和明は母親の言葉に返す返事もなく黙り込んだ。美咲と疎遠な時、一方的に嫌われていると思い込んでいたので距離を置こうとイギリスへ行こうとしたことがあった。

「あの時とは状況が違うんだ。俺一人残って日本の大学へ進学したい。」

「・・和明。あれだけアメリカの大学へ行きたいって言ってたのにどうしてそんなに言うことが変わったの？向こうへ行くことが決まって喜ぶと思っていたのに。」

「・・・・」

「日本を離れたくない理由は何？納得のいく説明をして頂戴。」

「話せば俺一人残ってもいいの？」

「・・だめよ。あなた一人置いてなんて行けないわ。すぐに飛んで帰って来れる所じゃないのよ。」

「・・・・」

アメリカ行きの話を聞いて二週間後、担任に呼ばれ具体的なことを教えてくれと聞かれた。勝手な母親に胸のうちで怒っていた時、すぐ後ろにいた藤井理沙に話を全部聞かれていたなど和明は思いもしなかったのだ。和明の知らないところでアメリカ行きはちゃくちゃくと準備が進められていた。やっと美咲のそばにいることができるようになったのに・・。どうにもならない現状に和明は頭を抱え込んでいた。

第二十七話　お見舞い

「あれ、沢中。どうしたんだ？」

美咲は登校してくる生徒たちの中から和明の姿を探していたがなかなか見つけられず焦りを感じ始めていた時に、クラスメイトの相田に声をかけられた。

「相田君、おはよう。」

「ああ、おはよう。そんなとこでなにしてるんだよ？」

「え、ああちょっと・・・。」

「だれか探してるのか？」

「・・・・」

訝しげな相田の視線にどう答えようかと考えていると後ろからぐいっと腕をつかまれた。

「美咲、ちょっと・・・。」

「えっ」

顔を向けると何とも言えない顔の正樹が見下ろしていた。

「正樹、お前・・・。」

正樹はまだ何か言いたそうな相田から離れて美咲を門の端へとひっぱっていった。

「正樹、何？私、和ちゃん探してるんだけど・・・。」

「和明は今日休みだよ。」

「え？どうかしたの？」

「風邪だそうだ。熱が高いっておばさんが言ってたから。お前、授業終わったら見舞いに行ってやれよ。」

「う、うん。大丈夫かな。」

「まぁ、顔出してやれよ。それとこの間のことだけど、仕方なかったみたいだぞ。和明、すごい落ち込んでたから、その・・・。」

言いにくそうにする正樹の顔をじっと見て美咲は言った。

「正樹、知ってるの？」

「え？」

「知ってるんでしょう、ねぇ、教えて。和ちゃん、どうしたの？一体なにがあったの？」

「何がって・・・。お前こそ何で・・・。」

「藤井さんに言われたの。なんにも聞いてないのかって、和ちゃんに聞けばって言われた。正樹、教えて。和ちゃん、いったいどうし

たの？」

「美咲、とにかく見舞いに行ってやれ。そこで和明に聞くんだな。俺には何も言えない。それじゃ。」

追いすがる美咲を突き放し、正樹は階段を足早に駆け上って行った。授業の始めを告げるチャイムの音に追い立てられるように門を入ってくる生徒達が次々と階段を上っていく。その中で美咲一人、動けずに立ちすくんでいた。

その日一日の授業は美咲にとってとてつもなく長く感じられた。先生の話も耳を素通りし、なにも残らない。なんとか最後の六時間目までやり過ごし、あわてて帰る用意をし話しかけてきた久子の相手もそこそこに家路についた。和明に早く会って確かめたいが、また反対に聞くのも怖いのが本音だった。いつもなら和明と別れて坂道を上がっていくところをそのままっすぐに進んで和明の家へと向かった。大きな塀の前で立ち止まり、一呼吸してからインターホンを鳴らす。具合の悪い和明を起こすことになるのではと一瞬ためらったが、思い切って鳴らしていた。しばらくすると門の向こうから名前を尋ねられ、それに答えると扉が開き、和明の母親と久し振りに顔を合わせることになった。

「こんにちは。おひさしぶりです。あの、和ちゃんは？」

「・・美咲ちゃん、久しぶりね。こんなに見違えるようになって・・・。」

和明の母親は目を細めて美咲を見ていた。ほとんど仕事で普段家にいないって言ってたのに・・・。やはりかなり具合が悪いからだろうか。美咲は顔を曇らせた。

「和明、珍しく風邪ひいたみたいで今二階の部屋で寝てるわ。わざわざお見舞いに来てくれたの？」

「はい。」

「どうぞ、入って。あの子喜ぶと思うわ。」

美咲は促されるまま門をくぐり、昔よく遊んだ庭に足を踏み入れた。今でもよく手入れされているのか綺麗な花々が咲いている。よく下から見上げていた樫の木もそのままでとても懐かしい気持ちになった。

「和ちゃん、具合悪いんですか？」

「まぁ、かなり熱があったので・・・。でもだいぶましになったと思うわ。」

美咲は母親の後ろをついて和明の自室まで向かった。一人部屋の前に残されるとためらいがちに扉をノックする。けれども部屋の主からは、何の反応も返ってこない。美咲は静かにドアのノブを回し扉を開けた。カーテンが閉まっているせいか部屋の中は薄暗い。部屋にそっと入り見回すと、奥のベットで背中を向けて寝ている和明に気づいた。よく寝ているのかそばまで近づいても何の動きも見られない。聞きたいことはたくさんあったが、まさかたたきおこすこともできない。しばらく様子をうかがっていたが起きる気配は見られないので、美咲はそのまま部屋を後にした。そのまま一言ことわって帰ろうと思っていたのに、そのまま応接室に案内されお茶をごちそうになることになった。広いゆっくりした部屋の中に上質のソファが置かれ、美咲は遠慮がちに腰を沈めた。こんな大きな家に今はたった二人で暮らしているのだ。さみしくないのだろうか、とふと

思った。

「美咲ちゃん、紅茶でよかったかな？ここのケーキ美味しいのよ。ちょうどいただいたところだったの。よかったわ。」

「ありがとうございます。」

「本当に久しぶりね。美咲ちゃんが来てくれるの。小さい頃はいつもよく遊んでくれて・・・。正樹ちゃんも元気？みなさんも変わりない？」

「はい、おかげさまで。あの、おばさんもお元気そうで。」

「ええ、ありがとう。よかったわ、いまでもあの子と仲良くしてくれてるのね。あの子なんにも言わないから学校でのこととかも私知らないのよ。正樹ちゃんの名前はたまに聞いてたんだけど・・・。」

「和ちゃん、相変わらず頭もいいし、スポーツも万能で人気者ですよ。私も勉強教えてもらってて・・・。」

「そう。男の子は駄目ね。なんにも言わないから。」

和明とよく似た面ざしの顔は昔と同じで優しかった。たわいのない話は尽きることなく、和明の話を聞くのはとても楽しかった。

「ところで、おばさん。今日お仕事は？」

「ああ、今日はお休みにしたの。和明もあんなだったし・・・。それにもうすぐニューヨークへ移ることになってね、引き継ぎとかでなかなか休みも取れなくなるから。」

「えっ、ニューヨーク？」

「ええ、そうなの。主人がアメリカへ転勤が決まったのでね。」

美咲は指の先が冷たくなっていくのを感じていた。言葉を出そうとするのになかなか声が出てこない。

「あ、あの、それは和ちゃんも一緒に・・・。」

「ええ、そう。来年の一月から向こうの学校に行くことになってるの。せっかくずっと一緒に仲良くしてくれてたのに残念なんだけどね。あの子だけ置いていくこともできないし・・。」

「・・・・」

美咲はうつむいて黙り込んだ。これだったんだ。この話だったんだ。目の前がかすんでこようかという時、名前を呼ばれてはっと顔をあげた。

「美咲ちゃん、どうしたの？ごめんなさい、あの子からまだ聞いてなかったのね。でも、前からアメリカの大学に行きたいって言ってたからちょうどいい機会だと思うのよ。なのに、和明なぜか行くの嫌そうで・・・。美咲ちゃん、何か心当たりないかしら？」

「私、その・・・。」

和明の母親のまっすぐな視線にいたたまれなくなって美咲はすぐにでも部屋を出て行きたかった。目に涙が浮かんでくる。その時、扉が開かれ、和明が部屋に入ってきた。

第二十八話　平気だから

部屋の入口に立った和明はスウェットスーツに身を包み、疲れた顔をしていた。美咲を見ると一瞬驚いた顔をしたが、すぐに顔をしかめ母親に席を外すよう頼んだ。美咲もなんといえばいいのかすぐに言葉が出てこない。テーブルを挟んで向かい合い、美咲が先に口を開いた。

「和ちゃん、具合どう？」

「ああ、だいぶましになったよ。・・・美咲、この間のことだけど・・・。」

「・・・・」

「その、藤井さんとは、その・・・。」

和明は言いにくそうに話を切り出した。美咲は口をつぐんだまま何も話さず俯いていた。

「和ちゃん・・・。」

「えっ」

「和ちゃん、私、ショックだった。」

「ああ、ごめん。その・・・。」

「土曜日、二人が一緒にいるところを見たのは、その時はすごくシ

ョックだった。でも今はそんなことどうでもいい。」

「え？」

「どうして、何で話してくれなかったの？アメリカへ行ってしまうこと。」

「美咲・・。それは違うんだ。俺は日本に残るつもりで・・。」

「どうして？そんな大事なこと何で一番に私に話してくれなかったの？私、藤井さんに言われて初めて知ったのよ。」

「ごめん。心配掛けたくなかったんだ。」

「それに、アメリカの大学へ進学したいんでしょう、おばさんが言ってた。前に私が聞いた時はまだやりたいことはないって言ってたのに・・。」

「・・ずっと、パイロットになるのが夢だった。航空学の勉強するのにアメリカにある大学が一番よかったんだ。けど・・・。」

「けど？」

「俺の一番の夢は、昔から・・。」

和明の真剣な顔が美咲の瞳に映し出されていた。胸の鼓動がどんどん上がっていくのがわかる。美咲は思わず視線をそらしたが次の瞬間、和明に手をつかまれてしまった。

「美咲。お前のそばにいたいんだ。ずっと美咲の一番近くにいたい。

」

「和ちゃん・・・。」

「だめか？」

不安げな表情の和明に美咲は戸惑っていた。自分もずっと和明のそばにいたい。アメリカなんかに行ってほしくない。それが本音だった。でも、和明の夢を自分のせいで壊してほしくない。やっと思いがかなったのに、やっと一緒にいられると思ったのに。美咲はいまにもこぼれそうな涙をぐっと押し込んで唇を引き結んだ。膝に落としていた視線を上げると、静かにこちらに向けられている和明と目か合った。

「…私、もう和ちゃんとは一緒にいられない。少しの間だったけど、楽しかった。アメリカへ行っても元気で頑張って・・・。」

和明はその言葉に眉を寄せ、悲しげに俯いた。美咲の手から和明の手が離れていく。冷たい空気が美咲の手を包みこみ、すぐに冷やしていった。

「美咲、やっぱり怒ってるのか？もう、元通りにはならないと言うのか？」

「・・・・・・」

「美咲。」

「私、昔からダメな子だったでしょう？いつも和ちゃんと正樹の影に隠れて・・・。小学校の時、一度だけ同じクラスになった時もク

ラスの子にひやかされるのが嫌で和ちゃんのこと傷つけた。昔からそう、和ちゃんは私が困った時、必ず助けてくれた。私はいつもそれに甘えて、迷惑かけて・・・。」

「違う、迷惑なんか・・・。」

「ううん、和ちゃんはいつも私に優しかった。なのに、私は・・・。和ちゃん、アメリカへ行って。私なんかのために日本に残るなんて言わないで。もう、私は大丈夫だから。和ちゃんがいなくてもちゃんとやっていける。」

「違う、美咲のためじゃない。自分のためだよ。勉強なんかやろうと思えばどこでもできる。それとも、美咲は俺がいなくなっても平気なのか？」

和明の言葉に美咲は黙り込んだ。できることならいっしょにいたい。素直に「行かないで」と言えたなら、どんなに楽か。でも、和明の足だけは引っ張りたくない。和明が自分なんかに捕らわれずに素直に夢に進んでほしい。美咲は和明の背中を押してあげなければと必死だった。

「平気だよ。和ちゃんがいてもいなくても別に大丈夫。」

美咲は和明の目を正面から見据え、言葉を放った。和明は一瞬目を見張り、何か話そうとしたが、美咲のかたくなな態度に大きな溜息を落とすと一言つぶやいた。

「わかった・・・。」と。

美咲はすぐ手に荷物を抱え、肩を落とした和明をそのままに家を出

た。外に出るといつの間にか夕日も沈み、あたりも暗くなっている。これからの自分の未来のようだと漠然とした不安が胸によぎる。我慢していた涙があふれ、頬を伝っていくのがわかる。よかった。これでよかったんだ。和ちゃんがいなくても大丈夫。今までもろくに話もしなかったじゃない。また元通りに戻るだけ。美咲は心の中で何度も自分に言い聞かせていた。

美咲は坂道をゆっくりと登り、自宅の扉を開けた。その音を聞きつけ、玄関先に正樹が駆け付けた。きっと心配していたに違いない。見るからに心配そうな顔で美咲の方を見ている。美咲は思わず苦笑して口を開いた。

「本当に心配症ね、大丈夫よ。」

「・・美咲。和明に聞いたのか？」

「うん、アメリカへ行くんでしょう。」

「お前、いいのか？」

「いいもなにも仕方ないじゃない。私にはどうしようもない。」

「けど、お前が行くなって言えば・・・。」

「ううん、そんなこと・・・。頑張って行ってきてって言った。私、頑張ってって・・・。」

我慢していた涙がまた溢れ出し、止まらない。正樹の顔を見て緊張が解けたのか美咲はとめどなくむせび泣いた。何度も手で涙をぬぐう美咲に、正樹は「わかったから」と寄り添い背中をさすり続けた。

第二十九話　冬の別れ

二人が離れていくのは、早かった。学校の行き帰りの道も、図書館で一緒に過ごした時間も今では過ぎ去った遠い思い出と変わっていた。それぞれが会う約束をしなければ、広い校内で偶然会うこともほとんどない。暦も１２月に入り、寒さもだんだん厳しくなってきた。ついこの間の数か月が夢だったのではないかと思うほど、穏やかに時間が流れて行った。たまに見かける和明の姿を追いかけては、無理やり視線を外す。もうすぐその姿を見ることもかなわなくなる。アメリカへ行く準備はもうできたのかな、いつ旅立つのかなと自分から突き放した手前、聞くこともできず、美咲は遠くから心の中で問いかけていた。

「和明、本当に行くんだな。」

クラブが終わった後、正樹と和明は並んで駅からの道を自宅に向かって進んでいた。和明はもう吹っ切れたというようにその質問に笑って答えている。

「ああ、学校へ行くのも明日が最後だ。明後日の飛行機で発つから。手続きもすべて済んだし。」

「そうか。あれからあっという間だったな。」」

「ああ、そうだな。おまえとこうやって顔を会わすのも、もうすぐできなくなる。」

「和明・・・。」

「寂しいか？」

和明は笑いながら正樹の方に顔を向けた。同じように笑い飛ばす答えが返ってくると思っていたのが違っていた。眉間にしわを寄せ、唇をかんだ正樹が黙りこんでいる。いつもと様子の違う正樹に和明も視線を落とした。

「公園で初めて会ったときからずっと一緒だったからな。おまえがいなくなるっていうことがまた〝よくわからないんだ。」

正樹はさびしそうに呟いた。二人にとってお互いが一番の友達だったのだ。寂しくないわけがない。

和明は鞄の中から紙袋を取り出し、前を向いたままの正樹の横顔に声をかけた。

「正樹、頼みがあるんだ・・・。」

「え？」

「俺がアメリカへ行った後でいいから、これを美咲に渡してくれないか。」

何気なく手を出すと思ったよりずっしりと重さを感じた。

「何だこれ？自分で渡せばいいじゃないか。」

「いや、おまえから渡してほしい。大したものじゃないんだ。必要無ければ捨ててくれてもかまわない。・・美咲と話せば離れたくなくなって、俺の決心も鈍りそうだから。」

「決心って・・・。おまえ、美咲のことはもういいのか？昔からずっとあいつのことしか目に入ってなかったくせに・・・。本当にあきらめるのか？」

「はは、そうだな。俺には美咲しかいてない。たぶんずっと、一生、諦められないよ。」

和明の言葉に正樹は一瞬大きく目を見開いたが、すぐにあきれた声で言い返した。

「おまえなぁ・・・。どうする気だ？アメリカからいつ帰ってくるとか先のことも考えてるのか？まさかずっと向こうにいる気じゃ・・・。」

「いや、目的を果たしたらすぐに戻るつもりだよ。」

「目的ってなんだよ？」

「向こうの大学を出て資格を取ってくる。」

「へぇ、それで？」

「それでって？」

「日本に戻ってどうするんだ？」

「希望の仕事に就いて、それから・・・正樹、勘弁してくれ。まだどうなるかわからないんだ。とにかく向こうでできるだけのことはしてくるよ。そして戻った時に、もし・・・。」

「ああ、わかったよ。大丈夫だ。何か安心した。あいつのためにも必ず戻ってこいよ。」

正樹が笑顔を向け和明の背中をたたくと、和明も笑って強く頷いた。

「正樹、本当にありがとう。俺、昔からおまえにはいつも助けられて・・・。本当に感謝してるんだ。」

「和明・・。いいや、そんなことない。世話になったのは俺の方だよ。…何時の飛行機だ？」

「へ？」

「美咲と一緒に見送りに行くよ。最後だからな。」

「いや、いい。来なくていいよ。」

「何で？見送りにも来るなってか」

「ああ。別れがつらくなる。」

「美咲とももうこのままでいいのか？」

「ああ、美咲には出発のこと言わないで欲しい。美咲のおかげでアメリカへ行く決心がついたんだ。美咲が俺の背中を押してくれた。でも、見送られると飛行機に乗る自信がなくなる。やっと決心がついたんだが、やっぱり離れたくないんだ。でも、俺、アメリカの大学へ行きたい。今度会うときに美咲にふさわしい男になっているよう頑張るつもりだ。」

「和明、頑張れよ。」

「違う。お互い頑張ろう、だろ。離れても俺たちはずっと友達だ。」

「ああ、そうだ。昔から何やってもどんなに頑張っても、お前には敵わなかった。悔しかったよ。でも、そのおかげで俺もここまでやってこれたんだ。これからもおまえに負けないよう精一杯頑張るよ。どっちが先に夢をかなえるか競争だな。」

「ああ、そうだな。おまえには負けられない。」

「・・・見送りは行かない。また、会えるよな?」

「もちろんだ。正樹も元気で・・・。」

「ああ、おまえこそ。」

二人は笑って頷き、固い握手を交わした。冬の夕暮れは日が落ちるのがとても早い。寒い冷気が二人の間を過ぎて行ったが、これからの未来に明るい希望が見えるのか全然寒く感じられなかった。これは別れじゃない。今度会うまで少しの間、離れているだけのことだ。正樹は親友の向こうでの活躍を心から祈った。

寒い冬の日だった。美咲は一階の職員室から担任に頼まれた資料を片手に、渡り廊下を歩いていた。運動場から体育の授業を終えて更衣室へと向かっている男子生徒のグループが歩いている。美咲が何気なくそちらの方に視線を向けるとそのうちの一人と眼が合った。美咲は驚いて立ち止まり、思わず持っていた資料を落としそうにになったのをかろうじて抱え込んだ。その視線の先にいた和明も思わ

ず駆け寄りそうになったが、そばにいた男子生徒に肩をたたかれ、その場に立ちすくんだ。二人の様子に気が付いた一人が気をきかせて去っていく。美咲と和明の距離はそんなに離れていなかったが、久し振りに会う二人にはこの距離がもっと離れていくのをよくわかっていた。美咲はかける言葉も見つけられず、まっすぐに和明の顔も見られない。和明は切なそうな顔で美咲を見ていたが、諦めたように大きく息をついた。その気配に美咲が顔を上げると、和明はいつの間にか屈託のない笑顔を浮かべている。和明は小さくなにかを呟くと軽く手を上げて踵を返し、男子生徒達の後を追って走り去った。小さくなっていく和明の背中を見つめる美咲は、和明の最後の言葉をゆっくりと抱きしめる。

「美咲、ありがとう・・・。」

第三十話　出発

和明がアメリカへ旅立つ朝だった。何も知らない美咲はいつもと同じように洗面所で顔を洗っていると、難しい顔をした正樹が立っていた。中学まではほとんど変わらない身長だったのに、今では頭一つ分正樹の方が背が高い。肩幅もがっしりしているなぁと狭い洗面所でぼんやりと美咲は正樹を見やった。正樹は言いにくそうに口を開く。

「美咲、あのな・・・・。」

「どうしたの？朝っぱらから浮かない顔して。あ、わかった。こづかい貸してくれっていうんでしょ。だめよ、私も今月ピンチなんだから。」

正樹は心底あきれた様子で睨んでくる。一体何なの？美咲は訝しげに首をかしげた。

「やっぱいいわ。後で・・、学校行ってから話すわ。」

「？」

正樹は、そのままくるっと反対に洗面所を出て行った。

正樹は何を言いかけたんだろう・・。美咲はさっきの正樹とのやりとりを気に掛けながら学校の門をくぐっていた。やっぱり気になる。先に家を出た正樹は教室にいるはずだ。美咲は急いで上靴に履き替えると正樹の教室へと向かった。人の間をくぐりぬけ廊下を進み、

やっと正樹の教室へとたどり着いた。扉から顔を出して正樹の姿を探すと、すぐに見つけられた。けれども男子生徒数人と一緒に話しこんでいてなかなか気づいてもらえない。どうしようかと思案していると、藤井理沙が廊下の向こうから歩いてきた。向こうも美咲に気づいた様子だったがそのまま横を通りすごしていった。美咲は一瞬ためらったが、その背中に声をかけた。

「藤井さん、おはよう。この間は、ありがとう。」

理沙は振り返り、美咲の方に視線を向けた。

「別にあなたにお礼を言われるようなことしてないわ。」

「ううん、あなたに教えてもらわなかったら何も知らないままだったわ。ありがとう。」

「寺西君、アメリカへいつ行くの？いくら聞いても彼教えてくれなくて・・・。あなたは聞いているんでしょう？」

「ううん、私もなにも聞いてないから・・・。」

二人で向かい合っているうちに正樹が美咲に近寄っていた。

「美咲、話がある。ちょっと来てくれ。」

正樹が美咲の腕をつかむと理沙の方に小さく「悪いな。」と断ると廊下の端の方へとひっぱっていった。

「正樹、朝言いかけたこと何なの？私、気になって・・・。もしかして和ちゃんのこと？」

「・・・ああ。あいつ今日の昼の便で発つんだ。あいつに口止めされてたんだけど・・・。美咲、今から向かえばまだ間に合うぞ。どうする？」

正樹の言葉に美咲は大きく目を瞠った。咄嗟に時計に目を向けたが、またゆっくりと正樹の方を見た。。昨日会った和明の姿が浮かんでくる。やさしい薄茶色の瞳を思い出した。

「和ちゃん、何か言ってた？」

「あ、ああ。・・・見送りはいらないって、別れがつらくなるからって。それとあいつが発った後にこれを美咲に渡してくれって預かったんだ。」

美咲は紙袋に包まれたものを正樹から受取り、じっと見つめていた。

「これ、何？」

「さあ、いらなかったら処分してくれってあいつ言ってたけど・・・・。まあ、後で開けてみればいい。美咲、見送りはいいのか？」

「・・・・・。」

美咲はじっと考え込むようにうつむいていたが、やがてゆっくりと首を横に振った。

「私、きのう和ちゃんに会った。たぶんあれがお別れだったんだと思う。」

「・・・美咲。もう会えないんだぞ。今度いつ帰ってくるかもわからないし・・。本当にいいのか？」

「空港まで行って笑って見送る自信ない・・・。和ちゃんも望んでないのに行けない。」

「そんなことどうでもいいだろ。今行かないと本当に間に合わないぞ。」

美咲はもう一度首を横に振り、正樹はじっとそれを見つめていた。

「正樹、ありがとう、出発のこと教えてくれて。本当は気になってたの。昨日も何も話さなかったから。」

「・・・・・」

「私、ずっと和ちゃんの足手まといになってるんじゃないかって思ってた。でも、これでやっと対等になれた気がする。和ちゃんの夢の手伝いができたと・・・。」

美咲は吹っ切れたように正樹の方に笑顔を向けた。丁度その時、一時間目の始業を告げるチャイムが校内に響き渡った。美咲はそのまま踵を返し急いで廊下を走り抜けていった。正樹は黙ったままその背中を見つめていたが、そのままゆっくりと教室へ戻っていった。

昼休み、美咲は和明からの包みを持ち、屋上へと上った。とてもいい天気で冬の空は澄み切っている。少し肌寒いが日のぬくもりが心地よかった。美咲は段差のあるプロックに腰かけて和明からの紙包みを開けてみた。中からはＢ５のノート５冊が現れた。何だろうとその一つをペラペラとめくってみると、数学の公式やら問題が丁寧

に書かれてある。他のノートも順にめくってみるとすべて数学の内容だった。まさに手作りの参考書だ。和明の見慣れた文字が並んでいる。男の子の書いたものにしてはとてもきれいな見やすい代物だった。

「和ちゃん・・・・・。」

ノートの字がだんだんぼやけてかすんでくる。数学の苦手な美咲のために、ひたすらこのノートを作りあげたのだろう。短期間のうちにここまで・・・・。そのノートの間からメモのような紙切れが滑り落ちた。美咲はゆっくりとその紙片を開いた。

「美咲へ
　ずっと一緒にいる約束守れなくてごめんな。二番目の夢がかなったら、今度は一番目の夢が　かなうよう頑張るつもりだ。もしできればその時にまた美咲に助けてほしい。その時　まで美咲も頑張れよ。同じ空の下で応援してる。　　和明」

美咲はその手紙を大事そうにたたむと胸にぎゅっと抱きしめた。丁度和明の乗った飛行機がアメリカへ向かう頃かもしれない。今度会えるのはいつかもわからず、先の約束もしたわけじゃない、けれどもまた、きっと会える。二番目の夢がかなう時にそばにはいられないかもしれないが、先の未来にまた、和明がいるのではと希望が湧いてきた。
美咲は立ち上がり、東の方向のフェンスに近づき大きく手を振った。

「和ちゃん、さようなら。元気で・・・・。」

子供のころの思い出から最近の和明とのやりとりが胸をよぎる。冷たい風が美咲の髪をなでつけていったが、美咲は遠い東の空をいつ

までも見つめていた。

第三十話　出発（後書き）

和明がアメリカへ旅立ちました。二人は離れてしまいますが、心は一つです。この続きも読んでくださるととても嬉しいです。感想お待ちしています。

第三十一話　季節はめぐり

「へ？結婚！？・・・誰が結婚するの？」

美咲は久しぶりに聞く双子の兄である正樹の電話に耳を傾けていた。突然かかってきた電話にたまたま出た美咲は相手が正樹だとわかると驚きに目をみはった。高校を卒業後、地元の大学に進学した美咲と違い、正樹は東京の医科大学へと進んだ。六年の大学生活の後、東京の大学病院へと就職した。めったに実家に戻らなくなった正樹と話すのは、本当に久しぶりのことだった。

「おまえ、俺の話聞いてたのか？俺に決まってるだろう。」

「・・・・・。」

久し振りに電話をかけてきたかと思うといきなりの結婚話。美咲は思いもしない内容に絶句した。二十六歳。結婚してもなにもおかしくない年齢だ。正樹ったらいつの間に・・・・。美咲は受話器を握りしめ、長い間会っていない自信に充ち溢れた正樹の顔を思い浮かべた。

「美咲、おい、聞いてるのか？」

「聞こえてるよ。びっくりした、あんた、いつの間に・・・。相手はその・・久子と？」

「ああ、ちょっといろいろあってな。再来月に式挙げようと思ってる。父さんたちにこの週末に帰るって伝えといてくれないか。」

「うん、わかったけど。久子と一緒に帰るんでしょ。・・・再来月って、まさかあんたたち・・・・。」

「ばか、違うよ。残念ながらおまえが考えてるようなことはない。とにかく帰ってから詳しく話すから。それより、そっちは変わりないか？」

「うん、みんな元気にしてるよ。修ちゃんは正樹と一緒で全然帰ってこないけどね。」

「そうか。美咲、おまえも変わりないか？」

「なによ、それ。ええ、どうせ私は今でも一人ですよ。正樹は幸せの絶頂でしょうけど・・。」

「あのなぁ・・。おまえももうすぐ・・。いや、いいよ。それじゃ、森野と一緒に土曜日の夕方には帰るから。」

「わかった。お土産に草加せんべい買ってきてね。」

「・・・ああ。」

受話器を置くと美咲は大きな溜息をついた。あの二人が結婚するなんて・・・。美咲の親友である久子の片思いから始まった二人がとうとう結ばれるんだ。おとなしかったあの久子が正樹のことになるととても一途な面を見せてくれた。大学も正樹と同じ東京の医科大学に進み、ずっと正樹のそばを離れなかった。あの情熱はどこから来るのか本当に感心させられたものだ。正樹もとうとう捕まったのね・・・。高校の卒業式で、正樹と同じ大学に進むと報告してくれた時の迷いのない凛とした瞳が思い出される。・・・久子、よかっ

たね。思いがやっとかなったんだね。週末に会えるであろう親友の懐かしい笑顔を思い浮かべた。

美咲はピアノのある応接室の窓を開けた。丘の上に建つ自宅からゆるやかな坂道が伸びて、遥か向こうには海がかすかに望まれる。小さい頃からずっとこの景色を見て育ってきた。

五月。

ついこの間、誕生日を迎えたばかりだ。桜が散って今では青々とした木々が風に揺られている。　・・・私だけ置いてけぼりね。美咲はうつむいて小さく呟いた。休日の午後の風はやわらかく美咲の頬を包んでいる。日々の忙しさに忘れかけていた記憶が思い起こされる。あれから九年近くが経っていた。大好きな幼馴染の男の子とやっと気持ちが通じあったと思ったのも束の間、すぐに離れ離れになってしまった。寒い季節の別れのせいか寂しい記憶となり、最後に見た和明の笑顔はとても切ないものとなってしまった。別れてしばらくは校舎のあちらこちらで彼の姿を探してしまう自分がいたが、周りは何も変わらず時間が流れていく。あれから何の音沙汰もない和明の存在も少しずつ遠いものへと変化していった。最近は忘れかけていた昔の記憶がどんどん膨らんでいく。美咲は思わず苦笑していた。これが年をとったってことかしら・・。センチメンタルな気分に酔いしれている自分がおかしかった。正樹のせいね・・・。

美咲は地元では名前の知れた製薬会社の研究室に勤めている。大学院の修士課程を終えた後、そのまま地元の企業に就職した。和明と約束した通り、苦手な数学も克服してひたすら勉強に励み、希望通りの進路に進んだ。正樹は進学とともに家を離れたが、美咲は両親とともにずっと海に近いこの地を離れずにいた。毎日会社と家の往復を繰り返し、仕事が恋人のように時間だけが穏やかに過ぎていく。

それでも自分の希望した職種について充実した毎日を送っている。
たとえ隣にあの人がいないとしても・・・・。
これまでも色々な出会いがあった。この人ならと踏み込んだ付き合いを考えた相手もいたが、最後にはなぜか尻込みしそれきりとなってしまった。けれども後悔はしていない。自分にはやはり和明しかいないのかもしれない。もう会うこともないかもしれないのに・・・・。ずっと帰ってくるのを待っているの？
今の私をみて和明はどう思うだろう。何も変わっていない自分を見て呆れる？　それとも、よくがんばったと褒めてくれるだろうか・・・・。

週末、正樹たちは連れ立って帰ってきた。二人が一緒に並んでいるところを見るのは初めてでとても不思議な感じだった。玄関先で待ち構えていた美咲の姿を見つけると正樹は手を振った。隣にいる久子はしっかりと握りあっていた手を離そうとしたが、正樹がそれを許さなかった。駆け寄ろうとした久子はそのまま正樹に連れられ、美咲に笑顔を向けている。

「久子、久し振り。元気そうね。・・・正樹もお帰り。」

「美咲。本当、久し振り。大学の時以来ね。美咲、全然変わってない。」

「そうかな・・・・。」

気にしてるのに・・・・。そんな美咲を見て二人とも顔を見合わせ苦笑した。

「おまえ、ほんと昔のまんまだよな。まぁ、中身は変わってってんだろうけど。」

意地悪そうな正樹の視線を受けて美咲はにらみ返した。

「久子、本当にこんなんと結婚するの？　考え直した方がいいわ。もっとまともな人がごまんといるわよ。」

「おまえなぁ・・・。」

「うん、そうね。」

「おい・・・・。」正樹はあわてて久子を見やった。久子はクスッと笑いながら、

「でも、知ってるでしょ。私にはずっと正樹君しか目にはいらないの。」

美咲と正樹は二人とも久子の言葉に目をみはった。正樹の顔がみるみる赤くなっていく。美咲はその様子に二人の仲がとても仲睦まじいことを理解した。正樹が照れ隠しにあらぬ方向に向いている。まるで高校生の時に時間が戻ったようだ。久しぶりの空気がとても懐かしい。美咲は思わず顔をほころばせた。

「さぁ、どうぞ。二人とも首を長くして待ってるわよ。」

両親は二人をとても歓迎した。久しぶりに帰る息子が生涯の伴侶を連れてきたのだ。部屋に入るとみんなでテーブルを囲み、簡単な自己紹介の後、正樹が姿勢を正し、本題に入ろうとした。久子が不安そうな表情を浮かべている。正樹が久子の方を見やり、大丈夫だというように頷いた。その様子に安心したように久子も頷いた。

「実は、東京の大学病院を辞めようと思うんだ。」

正樹の言葉にみんなが一瞬黙り込んだ。美咲も思わぬ正樹の言葉に驚いた。一番に口を開いたのは父親だった。

「どうして？　仕事になにか行き詰ってるのか？」

「いいや、そんなことはないよ。最先端の医療を勉強しながら俺なりに頑張ってきた。同僚たちにもとても恵まれていると思う。」

「なら、どうしてだ？　希望してやっと入った病院だろう。」

「ああ、そうなんだけど・・・・。」

正樹はそこで言葉を切ると思い切ったように続きを話し始めた。

「実は俺、北海道の病院に行くことに決めたんだ。父さんは反対するかもしれないけど・・・・。何年かそこに勤めたら、その後そこで診療所を開こうと思ってる。」

正樹はまっすぐの視線を父親に向けていた。昔からこうと決めたら絶対意志を貫く正樹だった。東京の大学への進学も一人で決めて、ここまできたのだ。母親もあきらめた様に軽く溜息をついた。

「正樹、それはもう決定事項なのね。私たちが反対しても行くんでしょう？」

「・・・母さん、ごめん。」

「でもどうして北海道なんだ？　そんなとこまで行かなくてもここに戻ってくればいいじゃないか。修司もいずれは帰ってくると言ってたぞ。」

「ああ。父さんの後は兄さんが継ぐと思うから、どうか許してください。・・・・ここにいるよりもっと医者を必要としている場所があるんだ。だから・・・・。」

正樹の真剣な様子にだれも反対を口に出せなかった。

「・・・ところで森野さんはどうするのかね。結婚の報告だと聞いていたんだが・・・。」

父親は正樹から視線を外し、久子の方へ向き直った。久子はそのまま正樹の方に視線を向けてから、また正樹の両親の方へ向き、口を開いた。

「私も勤めていた病院を退職しました。正樹君について行こうと思っています。不束者ですがどうか正樹君のそばにいることを許してください。できる限り力になりたいんです。お願いします。」

久子は深く頭を下げた。正樹もその姿に驚いた顔をしている。美咲は二人の話にだまって耳を傾けていたが、すっと離れた椅子から立ちあがり、傍へと近寄った。

第三十二話　帰省

「よかったじゃない。こんな無鉄砲な正樹に付き合ってくれる人なんか、なかなかいないわよ。正樹がこの家からもっとずっと離れていくのは寂しいけど・・・・。でも、二人が幸せになるのなら、喜んで送り出してあげなきゃ・・・・。ね？」

美咲は父親と母親の顔を順に見ながらそう言った。父親は大きな溜息を落としながら最後には「仕方ないやつだな・・・・。まぁ、覚悟して頑張れ。」とエールを送った。

「こうやって二人で寝るのって高校の修学旅行以来だね。」

五人で夕飯を食べてから、ホテルに泊まると言っていた久子を強引に引き止めて美咲の部屋で枕を並べている。

「久子、正樹の部屋でもよかったのに・・・・。私に遠慮したんでしょ。」

「ははは。それはできないわ。正樹君、きっとひくわよ。」

「？」

「ええと、私たち、まだ美咲が思ってるような関係じゃないのよ。結婚の約束はしたけどね。」

「え？それって・・・・。」

「うん、ほんとに何にもないの。結婚するっていうのもほんとに自分でも嘘じゃないかって思うもの。正樹君追いかけて大学から就職まで、本当に恋人同士っていうより、同志って感じだったから。プロポーズされた時は本当に驚いたわ。でも、嬉しかった。今まで生きてきた中で一番ね。」

「久子・・・・。」

「美咲は？　誰かいい人いないの？　」

「いないよ。仕事が恋人なの。なんちゃって・・・・。」

「美咲・・・。本当はまだ待ってるんでしょう？　あれからもう九年ね。寺西君から連絡とかないの？」

「ううん。高校の時、アメリカへ行ったっきりよ。今どこでなにしてるのかも全然わからない。」

「そうか・・・。美咲、これからどうするの？ずっと待ってるの？帰ってくる当てもないんでしょ。」

「うん、そうね・・・。わたしもよくわからないの。でも、今はいいかな。このままでも十分幸せだもの。」

「そんなこと言って。気がついたらおばあちゃんよ。」

「はは、そうかもね。・・・それより、よく決心したわね。北海道って遠いわよ。ご両親よく許してくれたわね。」

「まぁ、かなり大変だったけど・・・。私、妹と二人姉妹じゃない。養子をもらうつもりだったのにって言われて。その時、正樹君が言ってくれたの。」

「え、なんて？」

「俺は次男だから婿入りしてもいいよって。それ聞いてうちのお父さん、びっくりして。」

「それで？」

「うん、結局とりあえず私がお嫁に行くんだけど。また先でゆっくり相談しようって言ってくれた。正樹君、本当に優しいのね。」

「へぇ、そうなんだ。でも、その話聞いたら内の親、きっとびっくりするよ。でもなんで北海道なの？」

久子は少しためらってから口を開いた。

「なんかね、この間担当した患者さんが北海道出身の人で・・・。もうおじいちゃんなんだけど、若い時に娘さんを亡くしてて・・・。田舎の家で医者に診てもらうのに二時間もかかるような所で、高熱をだして苦しんでた娘さんを手遅れで亡くしたらしいの。こんな都会の立派な病院が地方にあればって言ったらしいわ。正樹君、それ聞いて調べたみたい。」

「そう。正樹らしいわね。また、それについて行くっていう久子も久子だけど。」

「うん、そうね。私も大分悩んだんだけど、後悔はしたくなかった

から・・・。」

そのしばらくの後、二人は顔を見合すと笑い合った。

「私たち、義理の姉妹になるわね。ふふふ、なんか変な感じね。」

「うん。・・・明日にはもう東京に戻るんでしょ？」

「ええ。正樹君、今大変なのよ。引き継ぎとかで・・・。私も色々支度があってね。」

「そう・・・。残念だなぁ、もっと遊んでもらおうと思ったのに。」

「ごめんね。」

「ううん、結婚式、楽しみにしてるよ。」

二人はいつまでも尽きない話に花を咲かせ、結局寝たのは夜中になっていた。

次の朝、朝早くに目を覚ました美咲が庭先にたたずんでいると、正樹が隣に並んで座りこんだ。

「どうしたの？　起きるの早いじゃない。」

「おまえこそ。」

「・・・正樹。結婚おめでとう。それにありがとう。久子、本当に

うれしそうだった。」

「別におまえに礼を言われることはないよ。自分のために決めたんだから。」

「そっか。でもよかった。二人が幸せになるの本当にうれしいよ。正樹、私が言わなくてもきっと頑張るだろうけど、一応頑張ってね。」

「ああ、頑張るよ。美咲、仕事はうまくいってるのか？」

「うん、まぁ・・。よもぎの葉の成分の分析ばっかりやってる。ソックスレー抽出にかけて、後はずっとガスクロマトグラフィー。地道な作業ばっかりよ。正樹は？」

「まぁ、俺もまだ新米だからな。でも、担当した患者が元気に退院していくのを見ると嬉しいよ。もっと頑張ろうって思える。北海道に行くのも・・・。」

「わかってる。久子に聞いた。正樹も思い立ったらとことんだもんね。高校の美術部の時もそうだったし・・・。あんな下手くそなのに最後までコンクールあきらめなかったもんね。」

「あのなぁ・・。でも我慢強いのは、おまえの方だよ。勉強もピアノも人一倍頑張ってたし、恋も一途だろう？」

「え？」

「まだ好きなんだろう？誰とも付き合わずにずっときたんだから。」

美咲は一瞬目をみはったがすぐに視線を落とし、溜息をついた。

「私のことはいいの。それより自分の心配しなさいよね。ほんとに勝手なんだから、そのうち結婚する前に久子に見限られるかもね。」

「はいはい、忠告どうも。・・・・それより美咲、強くなったな。」

「え？」

「これからも自分の決めた道をまっすぐ進んでいくんだろうな。」

「それは正樹の方でしょ。猛勉強の末、医者になって、しまいに北海道・・・。なんかどんどん離れていくのね。ほんとにおいてけぼりだ・・・。」

「美咲・・・。俺達双子だろ、離れていても一緒だよ。そうさ、俺が幸せになるんだからお前も幸せになるんだよ。大丈夫だ、心配するな。」

「何が大丈夫よ。でも、よかった。・・・本当によかった。向こうでの成功を祈ってる。」

美咲は小さくつぶやくとゆっくりと正樹の方に顔を向けた。美咲と面立ちのよく似た正樹がやさしい笑みを浮かべている。いままでも正樹にどれだけ助けられたかわからない。今以上に離れていく正樹にとても寂しさを覚えたが、笑って見送りたい。

「ああ。・・・それと、おまえにプレゼントがあるんだ。」

「え？プレゼント？何？」

「来週の水曜日に届くようにしといたから。たぶん六時頃に着くと思うよ。」

「わざわざ宅配にしたの？持ってきてくれればよかったのに・・・。」

「楽しみは先延ばしの方がいいだろ。きっと喜ぶと思うよ。」

「ふうん、なんだろ。それって誕生日祝い？よくわかんないけどありがとう。」

「お返しの結婚祝い、はりこんでくれよ。楽しみにしてるから。」

「ええ！？」

正樹は昔と同じの悪戯そうな笑みを浮かべている。美咲は口を尖らせていたが、久し振りの正樹とのやりとりが懐かしく、とても心地よかった。

第三十三話　ありふれた日常

正樹たちは朝食を終えた後、そのまま東京へと戻って行った。二人で寄り添いながら、たまに顔を見合わせて笑い合っている姿はとても眩しかった。お似合いの二人だ。玄関先まで見送りしていた美咲は羨望の眼差しで見ていたが、ふっと息をつくとそのまま視線を上に向けた。雲ひとつない空が頭上に広がっている。この空は今でも変わらず和明のいる場所まで続いているのだろうか。美咲は瞳を閉じて大きく息を吸い込んだ。

「同じ空の下で応援してる」

高校生の和明の顔がふと浮かんできた。目を開けると坂道の向こうに小さくなった正樹たちがかすかに見える。今度会えるのは、たぶん結婚式で・・・・。晴れた夏の日に、幸せそうにほほ笑む二人に会えるだろう。その時、どんな自分が今を思いだしているのだろうか。美咲はほのかに感じた明るい未来に思いを馳せた。五月の風に揺れている木洩れ日に見とれながら。

＊

午前十時。美咲は九階にある会社の会議室で、上海にある製薬会社との共同プロジェクトについての会議に出ていた。上司3人と同期の水無月愛と橋本貴明の6人に向こうの会社の3人のメンバーだった。よもぎの成分から新しい効能の薬が考案されることになっている。毎日の分析結果について議論が白熱していた。会議は昼過ぎまで続き、やっと昼休憩をとることができた。

会社近くのカジュアルなイタリアンレストランで、同期3人は遅めの昼食をとることにした。

「ああ、やっと一息つけるわね。」

ショートカットの髪に大きな瞳が印象的な水無月愛が、店員が運んできたお冷を一気に喉に流し込んで呟いた。隣で細いチタンフレームの眼鏡をかけた橋本が苦笑しながらうなづいた。
美咲は研究開発課、水無月は企画課、橋本は営業部と同期でそれぞれの部署から借り出され、このプロジェクトのメンバーとなっていた。

「なぁ、さっき言ってた案件なんだけど・・・。」

「もう、やめてよ。休憩時間ぐらい仕事の話やめよ。」

橋本の話を途中で遮り、愛は笑いながら適当にあしらうとメニューをめくり始めた。美咲はちらっと橋本の方に同情の視線を送ったが、すぐに愛の持つメニューを覗き込んだ。
大きな組織に入ると同期とはいえ、なかなか顔を会わすことさえままならない。畑違いの部署とはいえ、やはり同期は気のおける仲間だった。
運ばれてきたパスタを3人は黙々と食べ始めた。お腹がかなり空いていたらしい。あっという間に平らげると食後のコーヒーに口をつけ、やっと落ち着いた。

「なぁ、君ら明後日の水曜日空いてないか？久しぶりに同期で飲みに行こうって話が出てるんだけど・・・・。」

「えっ明後日？えらく急な話ね。でも、せっかくだし私行くわ。」

愛はすかさず返事した。

「ごめん、私は遠慮しとくわ。」

「ええ、どうして？　行こうよ。沢中さんも」

「ごめん、その日早く帰らないといけないの。」

「何か急用なのか？」

二人から疑問の視線を投げられて、仕方なく美咲は説明した。

「この間、兄から電話がかかってきて・・・。」

「兄って、たしか双子のお医者の？」

「そう。正樹からわざわざ届け物があるから、必ず早く帰るようにって釘さされちゃって・・・。」

「へぇ、でも沢中さんて、ご両親と同居じゃなかった？別に沢中さんがいてなくても・・・。」

「うん、そう思ったんだけど、たまたま両親がその日旅行に行くことになってて。」

「そうか、残念だな。幹事の奴に沢中さんは欠席で伝えとくよ。」

「ごめんなさい。」

「ねぇ、それより沢中さん。そのお兄さんも独身なんでしょ？　私、

紹介してほしいな。それか、そのお友達と合コンしたい。ねぇ、ダメかな？」

女子大卒で美咲より二つ年下の愛の言葉に美咲は思わず苦笑した。

「うん、よく言われるんだけど、正樹ずっと東京にいてなかなか帰ってこないのよ。それに、この間久しぶりに顔を合わせたんだけど、結婚が決まったみたいで・・・。」

美咲の言葉に二人とも驚いて顔を見合わせた。

「ええっ、結婚するの？　ショックだなぁ。もっと早く頼めばよかったなぁ。」

「ごめんなさい。愛ちゃんならもっと素敵な人がいてるわよ。」

「・・・はははは。だといいんだけど。そうだ、沢中さんもフリーでしょ？早くお互い、いい人見つけようね。橋本君はもうあの受付嬢とうまくやってるからどうでもいいだろうけど・・・。」

愛はちらっと橋本の方へ視線を向けたが当人は知らん顔でコーヒーを飲んでいた。

「水無月さんは何も知らないんだな。」

「はぁ？何が？」

「沢中さんにはもう決まった人がいてるんだよ。」

橋本は今更のように話したが、美咲と愛はびっくりして固まった。

「ええ!?　そうなの?」

「ううん、違うわよ。橋本君、何言って・・・。」

橋本は笑みを浮かべ困り顔の美咲をうかがっているようだった。その時、愛が勢いよく椅子から立ち上がった。

「忘れてた。私、やり残してた仕事があって・・・。先に行くわ。」

自分の財布からあわてて昼食代を机に置くと、急いで店を出て行った。取り残された二人はあっけにとられて、愛が出て行った扉をしばらく眺めていたが、きまずい沈黙が続きそのまま店を出ることにした。橋本と並んで美咲は会社に戻る道を進んでいた。平日の昼のためか、大通りの車はかなり混雑している。

「橋本君、さっきのって・・・。」

「えっ、何?」

「私に決まった人がいるって・・・。」

「ああ・・・。ごめん、かまかけただけだよ。たぶん、そうかなって、違う?」

「・・・。」

「ごめん。気にしないで、ただ、会社の中に君のことねらってる人結構いるんだよ。君は全然その気がないみたいだから。そいつらが

かわいそうでさ。早くあきらめた方がいいと思ったんだ。」

「ごめんなさい。私・・・。」

「いや、別に君が悪いわけじゃないから。でも、好きな人がいてるんだろう？早くうまくいくといいね。」

橋本の言葉に思わず美咲は顔をあげた。大学時代に仲のよかった男友達の言葉とそのまま重なり、美咲は大きく目をみはった。昔、好きになりかけた人の優しい横顔が脳裏をかすめた。美咲より高い位置にある橋本と目が合い、すぐに驚いて視線を落とした。

「本当に素直だなぁ。・・・さぁ、早く戻ろう。沢中さん、またの機会にみんなで飲みに行こうな。」

橋本は苦笑しながら美咲にそう声をかけた。美咲もつられて笑い返したが、すでに頭の中はお昼からの仕事のことでいっぱいだった。

＊

「ちゃんと戸締りして、火の元は気をつけてね。冷蔵庫に晩御飯用に材料適当に入れといたから。ああ、一人なんだし外で食べてもいいわね。それから・・・・。」

「お母さん、大丈夫よ。私を幾つだと思ってんの？そんなに心配しないで。それより二人でゆっくり楽しんできてね。」

翌日の水曜日の早朝、両親は北海道旅行へ出かけるべくスーツケー

スを手に持ち、玄関先に降り立っていた。さわやかな風が吹き、とてもいい天気で旅行日和だ。

「帰ってくるのは明々後日ね。気をつけて行ってきてね。」

「あなた一人で本当に大丈夫？」

「大丈夫よ。本当に心配症なんだから。それよりお父さん、急によく病院休めたね。旅行で仕事休むなんて初めてじゃない？」

「ああ、そうだな。代わりのの先生が見つかってよかったよ。正樹が急に旅行をプレゼントしてくれたもんだから、行かないと悪いと思ってね。」

「そのチケット、正樹からなの？」

「ああ、そうなんだ。必ずお母さんと二人で行けっていうもんだから。」

今日の日付が打ち出された航空券に目が行った。美咲は訝しげに思ったが、せっかくの旅行の当日に水を差すわけにもいかない。今日届くはずの正樹からのプレゼントがちらっと頭に浮かんだが、別に気にすることもないだろうと両親を快く見送った。二人を見送った後、しんと静まり返った家の中はとても寂しい。まるで世界に自分だけかと思うほど孤独に感じた。孤独？いいや、違う。なにをしても文句を言われない自由な時間なのだ。美咲はすぐに思いなおすと、早めの出勤のために支度に急いでとりかかった。

第三十四話　坂道の向こうは

いつもと変わらない日だった。美咲は、少し早目の電車に乗り、車窓から流れる見慣れた景色を眺めながら、４０分かけて勤め先の会社へと向かった。もうすぐ六月に入り、梅雨の季節になってくる。美咲はいつもと同じように駅に降り立つと、すぐそばにある公園へと進んだ。少し遠回りになるが、季節がらきれいな花々が咲き乱れている。美咲の好きな紫陽花の花もたくさん植わっていて、もう少しすればきれいな紫の花が見られるだろう。今日もとてもいい天気だ。北海道へと向かっている両親の旅行もいい天気でよかったと美咲は頬を緩めた。

午前中はあっという間に時間が過ぎた。一時間かけてひとつのサンプルをガスクロマトグラフィーにかける。その結果の分析を繰り返し、膨大なデータが蓄積されていく。美咲は新しく採取してきたよもぎの葉をエーテルに浸し、その抽出した液をシリカの詰まったカラムクロマトグラフィーに流し込んだ。後は半日放置しても大丈夫と窓側の席に座りこみ、やっと一息ついた。いつもなら同じ研究室に同僚三人と一緒なのだが、今日は出張のため美咲一人だった。のんびりと時間が流れて行った。

カラムを通り、ビーカーに落ちていくエーテルをぼんやり眺めていたが、すっと視線を窓の外へと向けた。青い空に飛行機雲がうっすらと残っていた。

定時で仕事を終えた美咲は、まっすぐに家へと向かっていた。会社の同僚と一緒に夕食を食べに行こうかと思ったが、一緒に行けそうな友人には会えず、仕方なしに誰もいない自宅へと向かった。電車に乗り込むとすぐに思わず溜息がもれてしまう。六月の初旬、六時

前でもまだまだ日は長い。本屋にでも寄り道して帰ろうかと思ったが、そのまま駅の改札を出るとまっすぐ家に続く坂道へと向かった。坂道の向こうに見える樫の木が、美咲の帰りを待っていた。

なだらかな坂を登って自宅の塀が見えてくると、そのそばにたたずんでいる人影に気づいた。静かな住宅街であまり人の気配がない中、美咲はいつもと違う状況に少し緊張した。門扉近くにたどり着き、その少し離れて立つ男性も美咲に気づいたようだ。美咲は鞄から急いで家の鍵を取り出し、早く中に入ってしまおうと、その人には目もくれずに門扉に手をかけた。

「・・・・・・美咲」

ふと自分の名前を呼ばれたような気がして、美咲はおもむろに振り返った。少し離れて立っていたはずの人物が距離を縮めて美咲のそばに近寄ってきた。すらっとした長身に均整のとれた体格の若い男性だ。ワイシャツに黒いスラックス。袖をまくっているため、細身のわりにたくましい腕が見てとれた。

「？」

美咲は一瞬驚いたが、大きな荷物を肩から提げた様子に道にでも迷っているのかとゆっくりとその男性に目を向けた。右手にもった英字新聞に気づき、英語に堪能な人なんだとぼんやりと思っていた。

「・・・美咲、か？」

「！」

いきなり名前を呼ばれて美咲は驚いて顔をあげた。その男性と視線

が絡まり、びっくりしたまま言葉もでてこない。はじめてまっすぐに相手の顔を見て大きく目をみはった。昔と変わらない優しい薄茶色の瞳が美咲に向けられていた。和明だ。間違いない。夢にまで見た和明が、美咲の前に立ちすくんでいた。高校生の時より、体格もたくましく顔つきも大人の男性となり、離れていた月日の長さを否応なく感じさせられる。美咲は驚いたまま、固まって和明の顔を凝視していた。信じられない。美咲は、夢でも見ているのかと瞬きを繰り返した。何も話そうとしない美咲に、和明は困ったように苦笑すると頭をかきむしった。

「俺の顔も忘れてしまったかな。何せ八年ぶりだから。」

美咲は掌を口にあてたまま、首を大きく横に振った。

「美咲、あの、遅くなったけど。ただいま。」

和明の昔と全然変わらない、はにかんだような笑顔に一瞬見惚れ、懐かしい声がこだました。会いたくて、会いたくてたまらなかった人がすぐ手の届くところにいる。美咲はまだ信じられず、和明の顔を見つめていた。

「和ちゃん、本当に和ちゃんなの？私、夢を見ているのかしら。」

「夢じゃないよ。帰ってきたんだ。」

美咲は思わず自分で自分の頬をつねり、小さく悲鳴をあげた。静かに見下ろしていた和明は、もう一度困ったような笑顔を浮かべると昔と同じ仕草で美咲の頭をかきまわした。美咲は驚いて固まってしまい、その様子に気づいた和明もあわてて手をひっこめた。二人の視線がまじかで絡まる。美咲は目を逸らすこともできずに、和明の

薄茶色の瞳を見ていた。その時、美咲の鞄から急に電子音が鳴り響いた。美咲ははっとして、あわてて鞄の中から明かりが点滅している携帯電話を取り出し、和明に一言謝って通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「ああ、俺だよ。美咲か？」

「・・・正樹？いったいどうしたの？どこからかけてるの？」

美咲は電話の主が正樹とわかり、ほっとして和明の方に視線を向けた。和明も一瞬目を瞠ったが、すぐに美咲の方に微笑んで頷いた。

「もちろん病院だよ。今、家か？・・・そろそろ着く頃なんだけど。」

「はぁ？それより、和ちゃんが、和ちゃんがいてるの。私、びっくりして・・・。」

「なんだ、もう着いてんのか。よかったな、美咲。ちゃんと届けたからな。約束の結婚祝い頼んだぞ。」

「へ？何言ってんの・・・。」

「誕生日プレゼント、もう届いたんだろう？二人で必ず結婚式、出てくれよ。」

「何、今日届く宅配って、もしかして・・・。」

「もちろん、和明のことだよ。ゆっくりこれからのこと、二人で相談するんだな。」

「な、何言って・・・。」

「それよりちょっと和明と代わってくれ。」

美咲は言われるがままに電話を和明の方に差し出した。和明もためらいがちに受取り、話し出す。

「ああ、久し振りだな。元気か？」

「・・・・・・」

「え、おまえ、それって・・・。ええ?！　ちょっと待てよ。おい、正樹。もしもし・・・。」

話をはじめてすぐに、和明の様子がおかしかった。電話の内容はわからなかったが、美咲はあわて始めた彼の様子をまだ夢の中にいるような感覚で眺めていた。

第三十四話　坂道の向こうは（後書き）

うまくまとめられれば、次回最終話となります。本編終了後もいくつかのエピソードで番外編を書ければと思っています。よろしければお付き合いください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2116f/

坂道の向こうは

2010年10月8日22時44分発行